

福岡市早良区

飯倉F遺跡 1

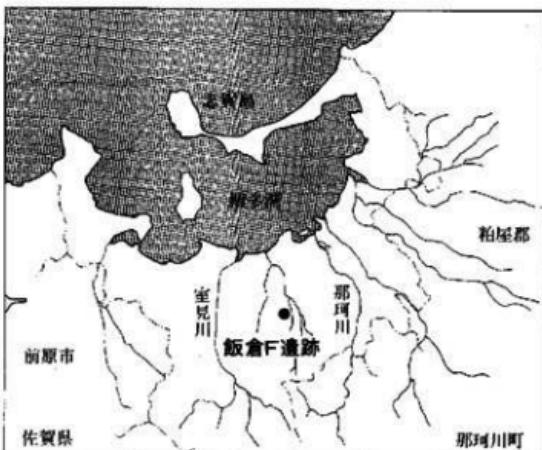
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第379集

1994

福岡市教育委員会

Ii Kura
飯倉F遺跡1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第379集



調査番号 8940・9031・9108
遺跡略号 IKR-F

1994

福岡市教育委員会

序

福岡市の西方に位置する半良平野は、豊かな自然を誇り、また史跡野方遺跡・吉武高木遺跡を始め、先人の遺産が数多く残されています。

近年では都市化の波が著しく、福岡市では環境整備の一環として緑地公園等の整備を行ってきました。

今回の梅林緑地公園整備は、自然の樹木を活かした形で整備を行いますが、その工事にともないやむ無く破壊される埋蔵文化財の記録保存が必要になり、1989年度から3ヶ月にわたって調査を行いました。

本書はその成果を収録したものです。本書が文化財についての認識と理解、更には学術研究の資料として活用して頂ければ幸いに存じます。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は梅林緑地公園建築に伴い、1989年度から1991年度にかけておこなった、飯倉F遺跡1次から3次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は各担当者のほか、高橋建治、井上靖崇、田中博睦、吉岡員代、杉本文子、清水文代、金子由理子、清水ユリ子、宮原邦江、瀬戸啓治、堀川ヒロ子、柴田勝子、吉岡田鶴子が行なった。なお本書で使用する方位は磁北である。
3. 本書使用の遺物の実測は各担当者のほか熊埜御堂和香子、山下智美、井上加代子、加藤周子、蜂須賀博子、内野亞子、赤星攝が行なった。
4. 本書使用の図面の浄書は各担当者のほか江崎木綿、熊埜御堂和香子、山下智美、林由紀子、井上加代子、加藤周子、蜂須賀博子、内野亞子、赤星攝、坂本智子が行なった。
5. 本書使用の写真については、担当者のほか力武申治が行なった。
6. 出土石器については一部杉山富雄氏（福岡市教育委員会埋文課）の協力を得た。
7. 本書の執筆は各担当者がこれを行なった。
8. 本書の編集は各担当者の協議を経て、宮井がこれを行なった。
9. 本書収録の遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理される予定である。活用されたい。
10. 調査担当者により遺跡名称、遺構番号の付け方に若干の差異があるが、最小限の統一を図るのみにとどめている。

本文目次

本文頁

第1章はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査体制	1
第2章立地と歴史的環境	3
第3章第1次調査	9
1. 調査の概要	9
2. 遺構と遺物	12
3. 小結	24
第4章第2次調査	27
1. 概要	27
2. 住居跡	27
3. 祭祀土壙	44
第5章第3次調査	55
1. 調査の概要	55
2. 調査の記録	57

挿図目次

本文頁

Fig. 1 飯倉F遺跡周辺の遺跡（縮尺=1/25,000）	5
Fig. 2 調査地点位置図（縮尺=1/4,000）	6
Fig. 3 第1次調査区位置図（縮尺=1/800）	10
Fig. 4 I区遺構配置図（縮尺=1/150）	11
Fig. 5 I区谷部土層実測図（縮尺=1/50）	11
Fig. 6 I区出土遺物実測図（縮尺=1/4）	13
Fig. 7 II区遺構配置図（縮尺=1/150）	14
Fig. 8 II区1号土壤墓実測図（縮尺=1/25）	15
Fig. 9 II区1号住居跡実測図（縮尺=1/60）	15
Fig. 10 II区出土遺物実測図（縮尺=1/3）	16
Fig. 11 III区遺構配置図（縮尺=1/150）	17
Fig. 12 III区2号住居跡実測図（縮尺=1/60）	18

Fig.13	III区2号住居跡出土遺物実測図(縮尺=1/3)	19
Fig.14	III区3号住居跡実測図(縮尺=1/60)	20
Fig.15	III区1号櫛棺墓実測図(縮尺=1/10)	21
Fig.16	III区1号壺棺実測図(縮尺=1/6)	21
Fig.17	IV区遺構配置図(縮尺=1/150)	22
Fig.18	V区遺構配置図(縮尺=1/150)	23
Fig.19	VI区遺構配置図(縮尺=1/150)	23
Fig.20	住居跡2004実測図(縮尺=1/60)	28
Fig.21	住居跡2007実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/60・1/3)	29
Fig.22	住居跡2024実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/60・1/3・1/2)	30
Fig.23	住居跡2044実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/60・1/3)	31
Fig.24	住居跡2057実測図(縮尺=1/60)	32
Fig.25	住居跡2124、2126実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/60・1/3)	33
Fig.26	住居跡2125、2128、2129実測図(縮尺=1/60)	34
Fig.27	住居跡2163実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/60・1/3・1/2)	35
Fig.28	住居跡2195実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/60・1/3)	36
Fig.29	住居跡2193、2374実測図(縮尺=1/60)	37
Fig.30	住居跡2312、2383実測図(縮尺=1/60)	38
Fig.31	ビット2315出土遺物実測図(縮尺=1/3)	39
Fig.32	住居跡2390、2407、2509実測図(縮尺=1/60)	40
Fig.33	住居跡2390、2407、2509出土遺物実測図(縮尺=1/3)	42
Fig.34	住居跡2168出土遺物実測図(1)(縮尺=1/3)	43
Fig.35	遺構2168出土遺物実測図(2)(縮尺=1/3)	45
Fig.36	遺構2168出土遺物実測図(3)(縮尺=1/3・1/2)	46
Fig.37	土壤2130実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/30・1/3)	47
Fig.38	土壤2316実測図、出土遺物実測図(縮尺=1/30・1/3)	48
Fig.39	土壤2317実測図(縮尺=1/30)	49
Fig.40	土壤2317出土遺物実測図(1)(縮尺=1/3)	50
Fig.41	土壤2317出土遺物実測図(2)(縮尺=1/3)	51
Fig.42	その他の出土遺物実測図(縮尺=1/2)	52
Fig.43	I区北壁、南壁土層断面(縮尺=1/60)	56
Fig.44	住居跡3001(縮尺=1/60)	57
Fig.45	住居跡3002(縮尺=1/60・1/30・1/4)	折込み
Fig.46	住居跡3003・3004(縮尺=1/60)	59

Fig.47	住居跡3001・3002出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	60
Fig.48	住居跡3005・3006（縮尺=1/60）	61
Fig.49	住居跡3006・3007（縮尺=1/4）	62
Fig.50	住居跡3007（縮尺=1/60）	63
Fig.51	住居跡3008（縮尺=1/60）	64
Fig.52	住居跡3009・3010（縮尺=1/60）	65
Fig.53	住居跡3009・3010・3014出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	66
Fig.54	住居跡3009出土遺物（縮尺=1/6）	67
Fig.55	住居跡3011（縮尺=1/60）	68
Fig.56	住居跡3012～3014（縮尺=1/60）	折込み
Fig.57	住居跡3015（縮尺=1/60）	69
Fig.58	住居跡3016（縮尺=1/60）	70
Fig.59	住居跡3017（縮尺=1/60）	71
Fig.60	住居跡3016・3017出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	72
Fig.61	建物3001・3002（縮尺=1/60）	73
Fig.62	建物3003・3004（縮尺=1/60）	74
Fig.63	建物3005・3006（縮尺=1/60）	75
Fig.64	建物3001・3003出土遺物（縮尺=1/3）	76
Fig.65	土坑3001・3002・3004～3006（縮尺=1/60）	77
Fig.66	土坑3003（縮尺=1/40）	78
Fig.67	土坑3007・3008（縮尺=1/60）	79
Fig.68	土坑3001、3002、3004出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	80
Fig.69	各溝土層断面図（縮尺=1/40）	83
Fig.70	溝3002出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	84
Fig.71	各溝出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	85
Fig.72	SP. 1054・1231（縮尺=1/30）	86
Fig.73	各ピット出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	87
Fig.74	包含層2号土器群出土遺物1（縮尺=1/4）	88
Fig.75	包含層2号土器群出土遺物2（縮尺=1/4）	89
Fig.76	包含層2号土器群出土遺物3（縮尺=1/4）	90
Fig.77	包含層2号土器群出土遺物4（縮尺=1/3・1/4）	91
Fig.78	包含層出土遺物（縮尺=1/4）	92
Fig.79	包含層・II区3016号溝出土遺物（縮尺=1/3・1/4）	93
Fig.80	II区西壁土層断面図（縮尺=1/60）	94

Fig.81	遺構面、表土出土遺物（縮尺=1/3）	95
Fig.82	各遺構出土遺物（縮尺=1/1・1/2）	95
Fig.83	各遺構出土石器1（縮尺=1/2）	96
Fig.84	各遺構出土石器2（縮尺=1/2）	97
Fig.85	各遺構出土鐵器（縮尺=1/2）	98
Fig.86	各遺構出土石器3（縮尺=1/1・2/3）	99

図 版 目 次

- PL. 1 (1) 調査地周辺航空写真（1948年撮影）
 PL. 2 (1) 調査地周辺航空写真（1987年撮影）
 PL. 3 (1) 調査地遠景（東から）
 (2) 第1次調査I区調査前（東から）
 PL. 4 (1) 第1次調査I区遺構検出状況（西から）
 (2) 第1次調査I区谷部東側土層（西から）
 PL. 5 (1) 第1次調査II区調査前（北から）
 (2) 第1次調査II区東辺柱穴検出状況（西から）
 PL. 6 (1) 第1次調査II区1号溝内遺物出土状況（東から）
 (2) 第1次調査II区1号住居跡完掘状況（南から）
 PL. 7 (1) 第1次調査II区1・2号土壤基検出状況（南から）
 (2) 第1次調査II区1号土壤基内遺物出土状況（南から）
 PL. 8 (1) 第1次調査III区調査前（南から）
 (2) 第1次調査III区南半部遺構検出状況（東から）
 PL. 9 (1) 第1次調査III区2号住居跡完掘状況（南から）
 (2) 第1次調査III区2号住居跡東壁溝内遺物出土状況（南から）
 PL. 10 (1) 第1次調査III区2号住居跡電跡検出状況（南から）
 (2) 第1次調査III区2号住居跡床面遺物出土状況（南から）
 PL. 11 (1) 第1次調査III区2号住居跡東壁溝内遺物出土状況（北から）
 (2) 第1次調査III区2号住居跡南壁溝内遺物出土状況（東から）
 (3) 第1次調査III区2号住居跡南壁溝内遺物出土状況（東から）
 PL. 12 (1) 第1次調査III区3号住居跡完掘状況（西から）
 (2) 第1次調査III区2号溝検出状況（東から）
 PL. 13 (1) 第1次調査III区1号窓棺墓検出状況（南から）

- (2) 第1次調査Ⅲ区1号窓枠検出状況（東から）
- PL. 14 (1) 第1次調査N区調査前（南から）
 - (2) 第1次調査N区遺構検出状況（東から）
- PL. 15 (1) 第1次調査V区遺構検出状況（東から）
 - (2) 第1次調査V区遺構検出状況（東から）
- PL. 16 (1) 第1次調査出土遺物
- PL. 17 (1) 住居跡2004（東から）
 - (2) 住居跡2007（東から）
- PL. 18 (1) 住居跡2044（東から）
 - (2) 住居跡2124（北から）
- PL. 19 (1) 住居跡2124、2125、2128、2129（北から）
 - (2) 住居跡2125、2128、2129（北から）
- PL. 20 (1) 住居跡2193（北から）
 - (2) 住居跡2163（西から）
- PL. 21 (1) 住居跡2195（北から）
 - (2) 住居跡2126（北から）
- PL. 22 (1) 住居跡2315遺物出土状況（東から）
 - (2) 住居跡2383（西から）
- PL. 23 (1) 住居跡2407・2509（北から）
 - (2) 土壌2130（西から）
- PL. 24 (1) 土壌2316（北から）
 - (2) 土壌2317（北から）
- PL. 25 (1) 遺構2123遺物出土状況（東から）
 - (2) ピット2127遺物出土状況（南から）
- PL. 26 (1) 道構2168（北から）
- PL. 27 調査区全景（北から）
- PL. 28 (1) 調査区北半部（西から）
 - (2) I区北半部包含層（南から）
- PL. 29 (1) I区南半部（北から）
 - (2) I区南半部（東から）
- PL. 30 (1) 住居跡3002（南から）
 - (2) 同住居跡變換状況（北から）
- PL. 31 (1) 住居跡3003・3004（西から）
 - (2) 住居跡3008（東から）

- PL. 32 (1) 住居跡3005・3006（東から）
(2) 住居跡3007（北から）
- PL. 33 (1) 住居跡3009・3010（東から）
(2) 同窓掘状況（東から）
- PL. 34 (1) 住居跡3012・3013・3014（東から）
(2) 同（南から）
- PL. 35 (1) 住居跡3013・3014（東から）
(2) 住居跡3012（南から）
- PL. 36 (1) 住居跡3016（南から）
(2) 住居跡3017（南から）
- PL. 37 (1) 建物3001（南から）
(2) 建物3002（北から）
- PL. 38 (1) 建物3003（南から）
(2) 土坑3001（北から）
- PL. 39 (1) 土坑3002（東から）
(2) 土坑3004（南から）
- PL. 40 (1) 土坑3005（南西から）
(2) 上坑3006（南から）
- PL. 41 (1) 土坑3003（東から）
(2) 土坑3007（東から）
- PL. 42 (1) 土坑3008（西から）
(2) ピット1054（南から）
- PL. 43 (1) ピット1231（東から）
(2) 溝3004（北から）
- PL. 44 (1) 2号上器群検出状況（北から）
(2) 包含層掘り下げ後（西から）
- PL. 45 (1) II区全景（西から）
(2) 溝3016（東から）
- PL. 46 各遺構出土遺物1
- PL. 47 各遺構出土遺物2
- PL. 48 各遺構出土遺物3
- PL. 49 各遺構出土遺物4
- PL. 50 各遺構出土遺物5

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

1989年、福岡市都市整備局公園計画課より、教育委員会埋蔵文化財課にたいして、福岡市城南区梅林3丁目地内の緑地公園予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査依頼があった。予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である飯倉下遺跡の範囲内にあり、遺跡の存在が予想された。これを受け、埋蔵文化財課では事前調査に入り、以前の試掘成果などから当該地内には古墳時代住居跡をはじめとする遺構、遺物が豊富に遺っていることが判明した。そこで埋蔵文化財課は公園計画課、公園建設課と保存についての協議にはいり、工事によりやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行って記録保存の措置を取ることになった。当初は構造部のみに限定して、第一次調査を行ったが、その結果遺構面が浅く、雜木等の除去作業の際にも遺構面に影響が及ぶものと判断された。そのため芝張部、園道部の調査を必要とし、2、3次の調査を行った。なお今回の調査は、飯倉下遺跡内における最初の調査である。

発掘調査は工事の進捗状況に合わせ、1989年度から1991年度にかけて3次にわたって行った。

1次調査 1989年8月17日～10月21日 調査面積 543m²

2次調査 1990年9月4日～12月28日 調査面積 1,731m²

3次調査 1991年5月1日～9月11日 調査面積 1,615m²

2. 調査体制

調査委託／福岡市都市整備局公園緑地部公園建設課

調査主体／福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛

調査総括／埋蔵文化財課長 柳田純孝（前） 折尾学（現）

埋蔵文化財課第一係長 折尾学 飛高憲雄（前） 横山邦雄（現）

調査庶務／埋蔵文化財課第一係 松延好文 安倍徹（前）

中山昭則 寺崎幸男 吉田麻由美（現）

調査担当／1次調査 瀧本正志

2次調査 宮井善朗

3次調査 山崎龍雄

調査作業 1次 高橋建治 井口菊太郎 伊藤みどり 牛尾秋子 牛尾シキヨ 牛尾三子
牛尾豊 大内文恵 尾崎達也 尾崎八重 金子ヨシ子 菊池栄子 舟光ナツ
子 柳光雄 白坂フサヨ 正崎山須子 懇慶とみ子 丘美保子 典略初 田
村和子 鍋山千鶴子 西崎マツ子 林嘉子 平田タマエ 平田勇 平田千鶴

子 平野ミサヲ 真名子ユキエ 山西人美 結城シズ 結城千賀子 結城信子 結城弥澄

2次 鬼丸邦弘 太田孝房 朱雀義雄 平田信吉 山崎吉松 濑戸啓治 井上靖崇
田中博勝 清水文代 杉村文子 中牟田サカエ 西納テル子 西島初子 能
美八重子 古岡アヤ子 吉岡員代 吉岡蓮枝 吉岡竹子 野坂三重子 松本
愛子 津田和子 池弘子 西尾タツヨ 藤崎久子 堀川ヒロ子 上原チヨ子
坂本キミ子 西田マキエ 古井モモエ 森友ナカ 萩田シズノ 井上紀世子
若狭謙代 吉積ミエ子 有吉貞江

3次 濑戸啓治 西畠盛行 坂本誠 吉村哲美 三浦義隆 柴田博 清原ユリ子
西尾タツヨ 堀川ヒロ子 松井邦子 土斐崎初栄 柴田勝子 庄野崎ヒデ子
有富満子 井上キヨ子 若狭謙代 藤崎久子 宮原邦江 吉岡田鶴子 緒方
マサヨ 平井和子 萬スミヨ 徳永ノブヨ 内尾トミ子 井上マツミ 古田
祝子

- 整理作業**
- 1次 青柳恵子 牛尾美保子 内山孝子 江崎木綿 尾崎京子 斎藤美紀枝 日名
子節子 真名子順子 渡辺ちず子
- 2次 熊塙御堂和香子 山下智美 小森佐和子 土斐崎つや子 大石加代子 堂岡
晴美 太田順子 林由紀子 佐藤幸子
- 3次 井上加代子 加藤周子 内野並香 岩下郁子 大賀順子 釘崎由美 坂本智
子 田口美智子 有吉千栄子 赤星攝 池田礼子 吉良山益美 武田祐子
手鏡恭子 松下節子

第2章 立地と歴史的環境

飯倉F遺跡の位置する早良平野は、福岡平野と糸島平野の中間に位置しており、東側を油山山塊から北へ伸びる丘陵により福岡平野と画され、西側を反垂丘陵によって糸島平野と画されている。平野のほぼ中央部を室見川が北流し、広い沖積地を形成している。

飯倉F遺跡は早良平野の東辺を南北に長く伸びる飯倉丘陵上に立地する。飯倉遺跡群はこの丘陵に立地する遺跡の総称で、丘陵の舌状部を単位に北側からA群からH群に分けられているが、地形的な隔離部がある訳ではなく現在の所は便宜上の区分である。実際の遺跡群の単位の把握はこれからの課題であるが、遺跡地内は早くから住宅化が進行し、今となっては困難である。

飯倉遺跡周辺では、旧石器時代から丘陵部を中心に各時代の遺跡が点在している。旧石器時代ではカルメル修道院内遺跡で尖頭器が採集されている。縄文時代では五ヶ村遺跡、新ノ池遺跡、笠栗遺跡などがあり、五ヶ村遺跡では、曾畠式土器片や石器類が採集されている。早良平野の中央部では四箇遺跡、重留遺跡など規模の大きい集落も出現している。縄文時代晩期末突堤文土器期から弥生時代に入ると遺跡数は急増する。小河川が発達した早良平野は、初期農耕に適しており、台地縁辺部や微高地に多くの遺跡が営まれる。有田遺跡群、原遺跡群、東入部遺跡群などは、拠点集落として大きく発展していく。この農耕基盤を背景に弥生時代前中期には小首長の存在が顕在化する。その存在は青銅器副葬墓によって知ることができる。早良平野では、有田遺跡、野方久保遺跡、東入部遺跡、吉武遺跡などが挙げられ、ほぼ旧郷単位ほどの領域を掌握する首長が並立した様子が窺われる。飯倉遺跡群内でも、古くは1963年に発見された飯倉唐木遺跡があり、前中期の甕棺墓から銅劍が出土している。この構組みに大きな変更は無く中期を経ていくが、後期にいたって一つの画期を見出すことができる。それは北部九州、特に玄界灘沿岸域に共通することであるが、甕棺墓制の消滅である。早良平野でも例外ではない。後期から古墳時代初頭にかけては外米系土器が多数流入しはじめる。また、前代には墓地としての利用しかなかった海岸部の砂丘地域に外来系土器を多量に持つ集団の集落が営まれる。西新町、藤崎の両遺跡がそれにあたる。この集落は農耕集落とは考えられず、対外交易に従事した集団の可能性が考えられている。

出現期の古墳としては藤崎方形周溝墓、五島山古墳、飯盛谷方形周溝墓、重留箱式石棺墓などがあり、弥生時代以降の領域の規模はほぼ変化していない。5世紀初頭にいたってようやく拝塚古墳の出現を見る。この被葬者は早良平野全体を統括したものと思われ、その首長権は吉武穂波古墳へと継承されるものと考えられる。しかし次代の梅林古墳は前方後円墳とは言え全長27mの小古墳で規模としては前代とは隔絶している。該期以降山麓部を中心に群集墳の造営

が開始される。

飯倉遺跡群内における既往の調査はいまだ多くはない。以下に概要を述べる。

飯倉原遺跡（飯倉唐木遺跡）

1963年、前期末の甕棺墓から細形鋼劍が出土した。

飯倉E遺跡

早良区干隈376-1において1979年調査。箱式石棺を主体部とする前期古墳1基、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の土壙墓、甕棺墓、掘立柱建物、火葬墓などが検出されている。

飯倉A遺跡

早良区飯倉2丁目において1988年に調査。3面の遺構面が確認され、古墳時代の住居跡、弥生時代の住居跡などが検出されている。

飯倉G遺跡

公園建設に伴い、1988年から91年にかけて3次にわたる調査が行われた。弥生時代の小形彷彿鏡を副葬する上塙墓、古墳時代後期の住居跡、製鉄関連と考えられる炉跡などが検出された。

飯倉H遺跡（梅林古墳）

市営団地の建設に伴い1989年に調査。5世紀末の前方後円墳1基と弥生時代甕棺墓などが検出された。



1. 菩崎遺跡 2. 沢新町遺跡 3. 有田・小田部遺跡 4~6. 原遺跡群
7. 原深町遺跡 8. 飯倉遺跡 9. 板倉原遺跡 10. 鶴町遺跡
11. 干瀬遺跡 12. 能添古墳群 13. 梅林古墳群 14. 五ヶ村池遺跡
15. 七隈古墳群 ■部が調査地点

Fig.1 稲倉F遺跡周辺の遺跡 (1/25,000)

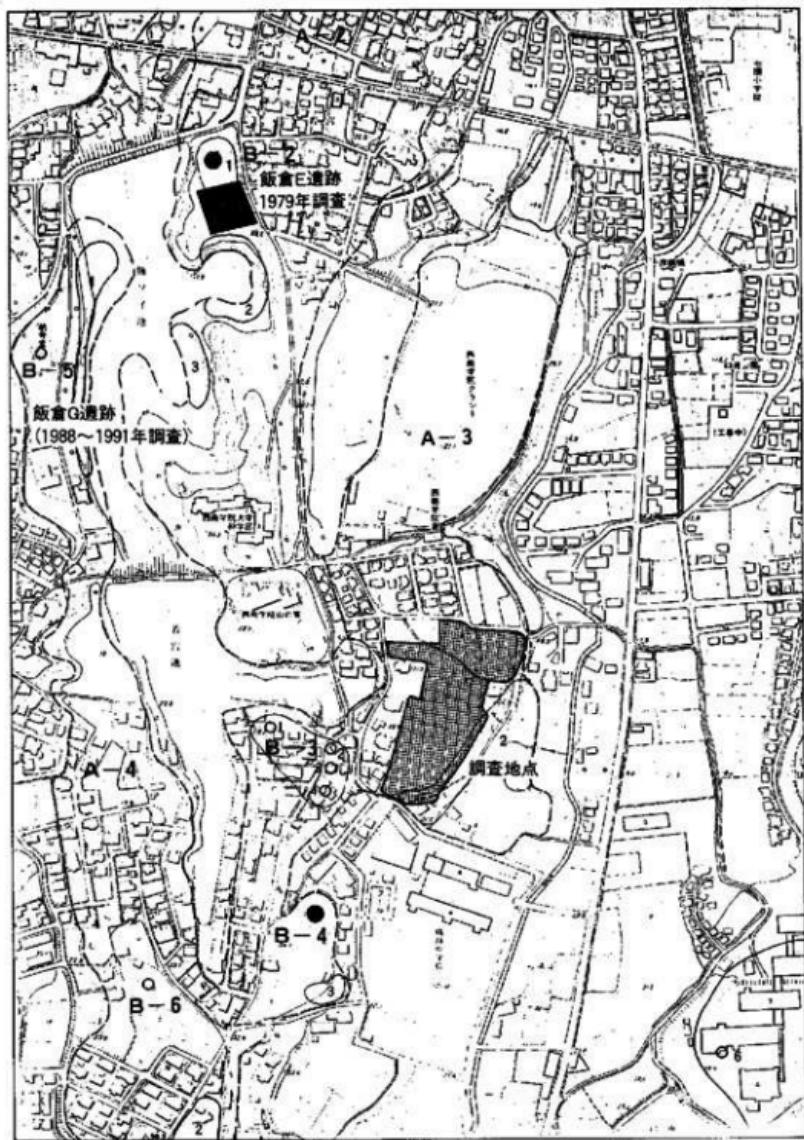


Fig.2 調査地点位置図 (1/4,000)

第1次調査

第3章 第1次調査

1. 調査の概要

調査地の立地する福岡平野の中央南部は、油山（標高592m）から幾筋もの舌状丘陵が北へ向かって派生している。これら丘陵は北へ延びる途中でさらに東西方向から入り込んだ谷によって複雑な地形を形成している。本調査地は、基本的には標高28mの尾根高を呈する丘陵の東斜面に位置するのであるが、東から入り込んだ谷によって出入りのある地形を占地している。

調査対象地は、事前に行われた埋蔵文化財課と都市整備局緑地課との協議により、遺跡を保全する観点から、構造物建設予定地の543m²に決定していた。構造物は東岸、展望台、便所などで、Fig. 3 に示すように計6地点であった。これらの地点は、先に述べたように丘陵斜面の谷部、平坦部、急斜面部、尾根筋と各様である。これら6地点に調査区を設定し、第I～VI調査区とした。調査前は、藪や雑木に覆われた地であったが、自然の状態とは言い難く、以前に開削が行われたことを示すような状況も幾箇所で見られた。このため、調査は、調査区を設定するために藪などの障害物を取り除くことに時間が取られながらも、平成元年8月17日に開始し、同年10月21日に終了した。調査の結果、弥生時代中期～奈良時代の遺物・遺構を発見した。以下、各調査区別に調査概要を記すものである。

第I調査区 調査地東北部に位置し、東から入り込む小さな埋没谷と丘陵斜面である。表土をバックフォーにより除去して、谷部が相当深いものであることが判明した。遺構は谷の南斜面で東西方向に伸びる溝状遺構を検出した。谷部からは、下層の包含層から弥生時代中期～奈良時代の土器、土師器、須恵器などが大量に出土し、全調査区で最も多い。

第II調査区 調査地北辺部中央、東から入り込む小さな谷に面した丘陵の南斜面に位置する。調査区の北半部は地山が露出していたが、南半部では遺構が良好に遺っていた。弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡、溝、柱穴、中世の土塙墓等が検出された。

第III調査区 調査地の北半部中央、東から入り込む小さな谷に面した丘陵の東斜面に位置する。第I調査区で検出された谷が続くことを確認すると共に、谷を望む平坦部においては弥生時代末～古墳時代の竪穴住居跡、溝、柱穴等を検出した。

第IV調査区 調査地の南半部中央、東に張り出した丘陵の頂部から東斜面に位置する。大木が抜根され、以前に周囲が荒らされていたことを物語っていた。古墳時代初頭の溝、小穴などを検出したが、これら遺構のあり方は、丘陵の頂部付近の平坦部集落の存在を示唆するものである。

第V調査区 調査地の南辺部中央、東に張り出した丘陵の南斜面に位置する。遺構、遺物は検出されなかった。

第VI調査区 調査地の西北部、尾根筋に位置する。小穴を検出した。

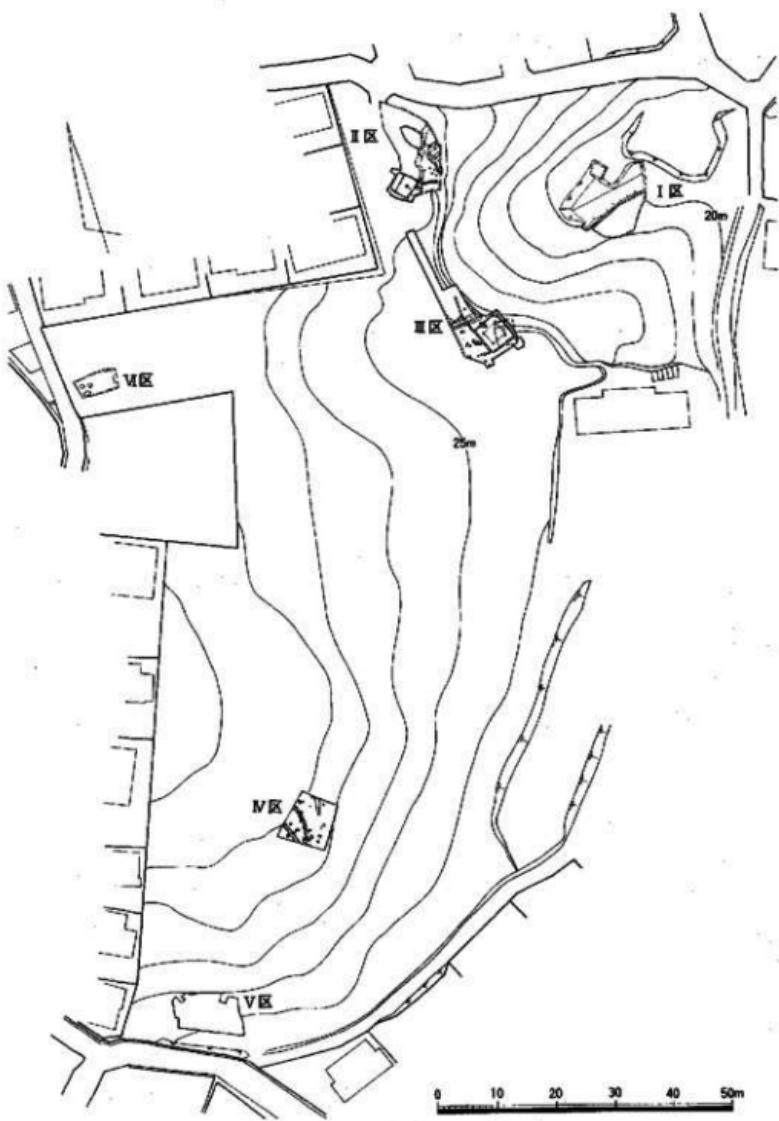


Fig.3 第1次調査区位置図 (1/800)

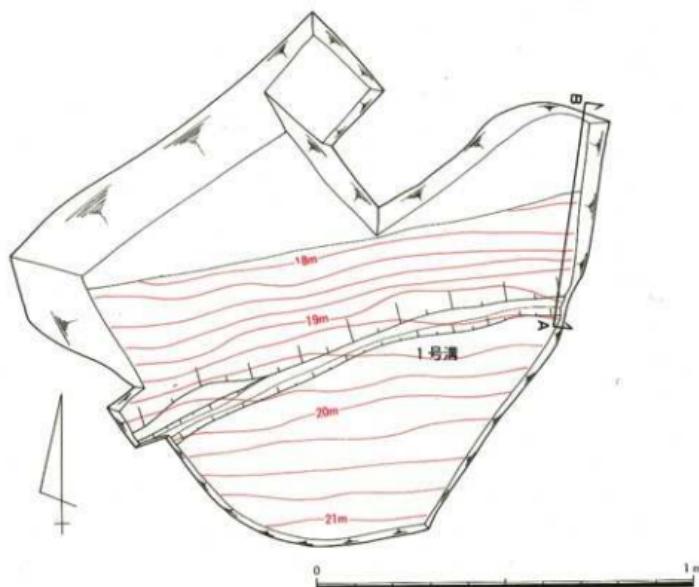
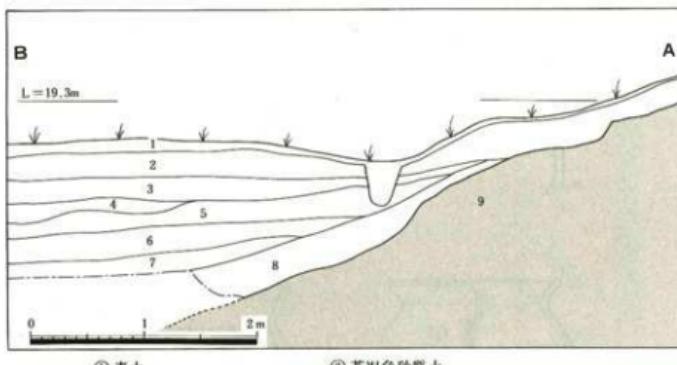


Fig.4 I区造構配置図 (1/150)



- | | |
|----------------|---------------------|
| ① 表土 | ⑥ 茶褐色砂質土 |
| ② 黄褐色土 | ⑦ 暗茶褐色砂質土 |
| ③ 晴茶灰色土 | ⑧ 黒灰色粘砂質土 (土器を多く含む) |
| ④ マンガン粒含茶灰色砂質土 | ⑨ 黄色粘性土 (地山) |
| ⑤ 濁茶褐色砂質土 | |

Fig.5 I区谷部土層実測図 (1/50)

2. 遺構と遺物

1) 第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区は、調査地東北部に位置する。調査前は平坦な地形を呈しており、標高20mを測る。表土をバックフォーにより除去して、調査地は東から入り込む小さな埋没谷と丘陵斜面を占地することが明らかになると共に、谷部が相当深いものであることも判明した。谷部底は、調査区内において明らかにすることはできなかった。遺構としては、溝状遺構を検出した。

埋没谷は、幅20m前後が予想され、東北から南西方向に入り込んでいる。大半が埋没している。調査区内における谷の堆積状況は、Fig. 5、PL 4に示したとおりである。谷を形成する斜面は、調査区という極めて限られた範囲からの推定では緩やかなものである。遺物は、埋土の最下層である黒灰色粘性砂質土層から、Fig. 6、PL 16に示した他に多量に出上した。遺物の時代は、弥生時代末～古墳時代初頭を中心とするが、弥生時代中期、古墳時代後半期の遺物も認められる。遺物の状況から、当地周辺における古代の活動は弥生時代末～古墳時代初頭に求められ、大規模な開削が奈良時代に行われたことが想定される。

A. 1号溝 (Fig.3~5, PL 4)

1号溝は、調査区の中央に位置し、東西方向、すなわち尾根筋に並行する素掘りの溝である。溝は、東に入り込む谷を形成する南側斜面の中位、標高19.5～20mを占地する。幅1m、深さ10cm、長さ12mを測るが、溝の東西両端はそれぞれ調査区外に位置するために全長は不明である。遺構の状況から、東は直線的に尾根筋近くまで存在するものと考えられる。本章では、同遺構を溝としたが、溝であるならば直接谷部につながることが効率的であるにもかかわらず、現状はつながっていない状況などから、平坦部から丘陵上部に位置する古代集落等への通路として用いられた可能性が高い。

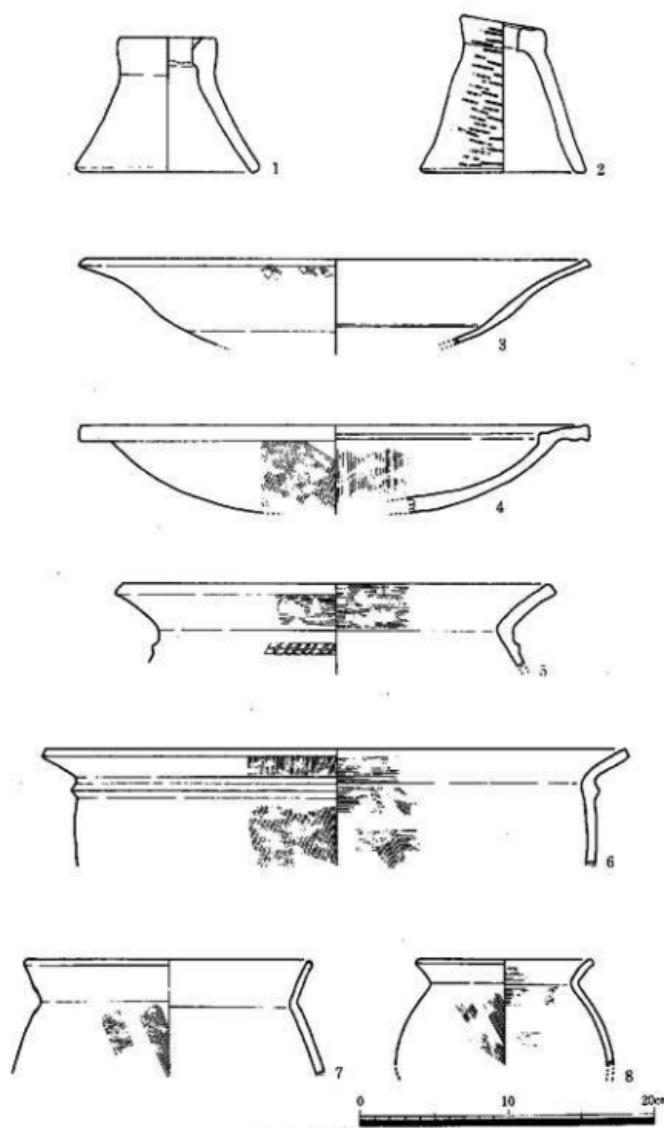


Fig.6 I区出土遺物実測図 (1/4)

2) 第Ⅱ調査区

第Ⅱ調査区は、公園建設予定地の北辺部中央、東から入り込んだ小規模な谷に面した丘陵の南斜面に占地する。そのために調査区は南東方向へ傾斜し、標高は23~25mを測る。調査前の状況は、北半部は既に地山が露出し、後世の削平が激しかったことを示していた。調査区の南東部ではテラス状の開削が認められ、柱穴、溝が検出されたが、建物もしくは施設に伴うものは不明である。調査区南西部では土壌墓と縦穴住居跡を検出した。

A. 1号土壙墓 (Fig.8, PL 7)

調査区南西部、1号住居跡の上層で検出した。墓壙は丘陵等高線に並行する位置に掘削されている。墓壙の一部が調査区外に位置するために全容は不明であるが、幅0.7m、深さ15cm、長さ2mを測る。墓壙の平面形は長円形、断面形は逆台形を呈し、壁は直線的に斜めに立ち上がる。主体部は不明で、墓壙内からは绳が出土している。

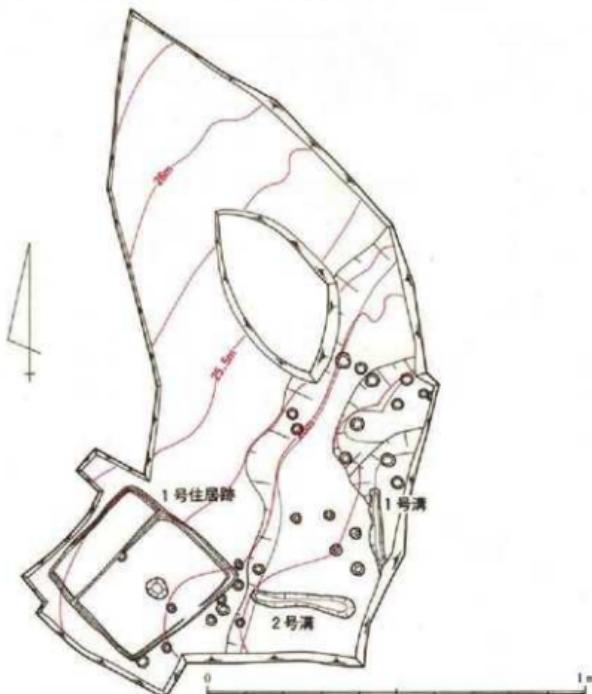


Fig.7 Ⅱ区遺構配置図 (1/150)

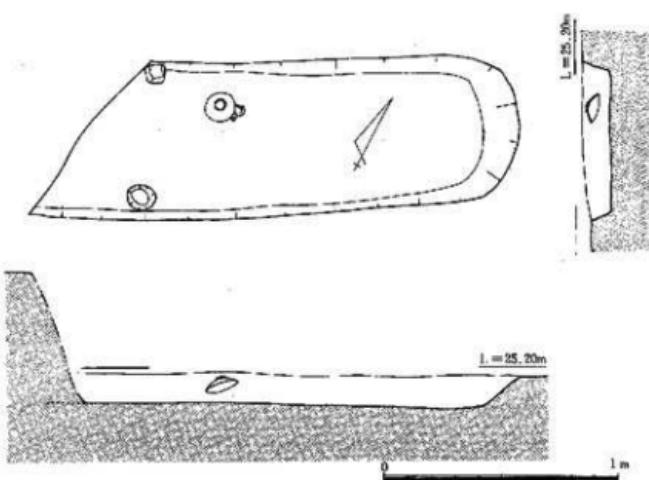


Fig.8 II区1号土壤基実測図 (1/25)

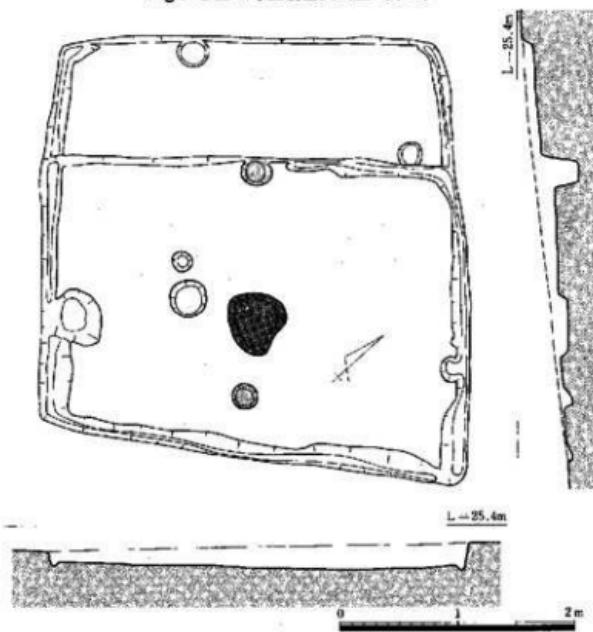


Fig.9 II区1号住居跡実測図 (1/60)

B.2号土壙墓 (PL 7)

調査区南西部、1号土壙墓の北に並行して検出した。墓壙は丘陵等高線に並行する位置に掘削されている。墓壙の一部が調査区外に位置するために全容は不明であるが、幅0.6m、深さ15cm、長さ1.2mを測る。墓壙の平面形は長円形、断面形は逆台形を呈し、壁は直線的に斜めに立ち上がる。主体部は不明で、墓壙および棺内からは、副葬品等は検出されていない。

C.1号住居跡 (Fig. 7・9、PL 6)

調査区南西部、1号土壙墓の下層で検出した堅穴住居跡である。建物は、建物長軸が北西方向、すなわち丘陵等高線に直交するように配されている。堅穴部は、長辺3.2m、短辺3.9m、深さ20cmを測る。床面には、短辺の西側にいわゆるベッド状遺構、椎状の削り出しがあり、幅1m、長さ3.2mを測る。壁溝は、幅10~20cm、深さ5cmを測り、西辺部以外の辺に認められる。柱穴は、2本が床面において認められたが、住居跡の外周等には認められなかった。壁面が統けた小土塙が、床面の柱穴を結ぶ線上で検出された。50cm×60cmを測る円形の平面形を呈する。深さは6cmほどを測り、炉址と考えるのが妥当であろう。

遺物は、埋土内から甕、高杯、砥石等が出土しており、弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定されよう。

D.1号溝 (Fig. 7、PL 5・6)

調査区東南部に位置する素掘りの南北溝である。幅30cm、深さ5~15cmを測るが、溝の南端は調査区外に位置するために全長は不明で、検出した長さは2.3mを測る。溝の北端は、緩やかに立ち上がって消滅する。遺物は、甕片が少量出土しているのみである。

E.2号溝 (Fig. 7、PL 5)

調査区東南部、1号住居跡の東に位置する素掘りの東西溝である。幅30~50cm、深さ20cm、全長3mを測る。溝の両端部は、緩やかに立ち上がって消滅する。遺物は、甕片が少量出土しているのみである。

F.小穴 (Fig. 7、PL 5)

小穴は、調査区南部のテラス状に開削された平坦面を中心として検出された。径20~40cmを測り、円形ないしは橢円形の平面形を呈する。深さは10~50cmと一定ではない。柱穴からは、上師器の甕片、須恵器の坏片が出士している。

3) 第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は、公園建設予定地の北半部中央、東から入り込んだ小規模な谷を間にして第Ⅱ調査区と面する位置にあり、谷の一部とその谷に面した丘陵斜面中位にテラス状に形成された平坦部に占地する。そのために調査区は北方向へ緩やかに傾斜し、標高は24~24.5mを測る。調査前の状況は、藪で覆われていたが、不自然な地形を呈しており、後世の畑作に伴う削平が激しかったことを示していた。調査区の北半部には、第Ⅰ調査区で検出した谷部が位置することが予見された。遺構検出は、地表下0.6mの茶褐色粘質土上面で行った。その結果、調査区北半部では谷、南半部では、テラス状の平坦部において竪穴住居跡、溝、小穴、土壤、甕棺墓等を検出した。各遺構の時期は、弥生時代後期~奈良時代に比定されるものである。

A. 1号溝 (Fig.11, PL 8・9)

1号溝は、調査区の中央部、2号住居跡から北の谷部に向かって掘られた素掘りの溝である。2号竪穴住居と一体のものであろうが、途中を2号溝によって分断されている。溝の規模は、幅30cm、深さ20cm、長さ7mを測るが、溝の北端は谷部の傾斜に沿ってなくなる。

B. 2号溝 (Fig.11, PL 12)

2号溝は、調査区の中央部、2号住居跡の北側に位置し、東西方向に中心軸をとる素掘りの溝である。溝の位置は、東から入り込んだ小規模な谷の北側斜面と谷に面し

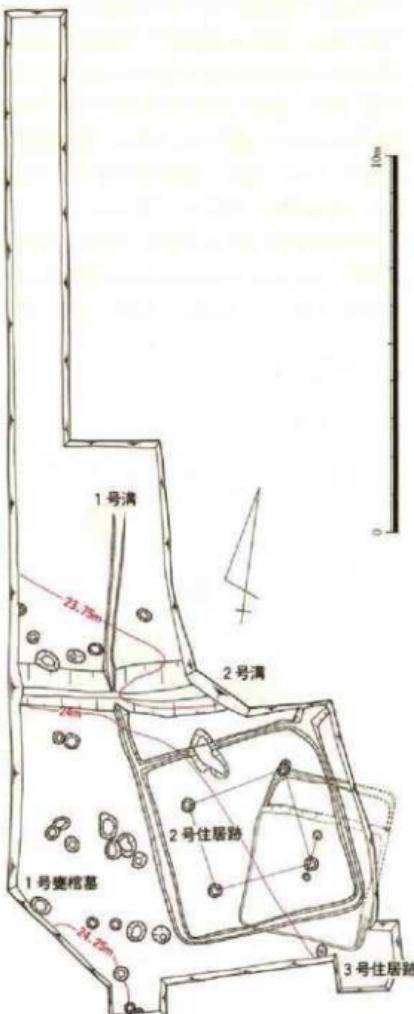


Fig.11 Ⅲ区遺構配置図 (1/150)

た平坦部との変換点上、丘陵の尾根筋に並行するようである。溝の規模は、幅1.1～1.5m、深さ10～25cm、長さ5mを測るが、溝の南北両端はそれぞれ調査区外に位置するために全長は不明である。溝の断面形は弧を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。この第III調査区で検出した2号溝は、位置、規模、方向性等の状況が、東方30mに位置する第I調査区で検出された1号溝と類似することから判断して、両者は一体の遺構である可能性が極めて高い。遺物は、甕片が少量出土しているのみで、時期を決定するような資料には至っていない。

C. 2号住居跡 (Fig. 7・9、PL 6)

調査区南東部で検出した竪穴住居跡で、谷部に面した平坦部の縁部に位置する。建物は、建物棟筋を北西方向、すなわち丘陵等高線に直交するように配されている。竪穴部は、隅丸方形の平面形を呈し、辺長は5.2mを測る。壁高は20cmを測る。壁溝は、四辺をめぐり、幅20cm、

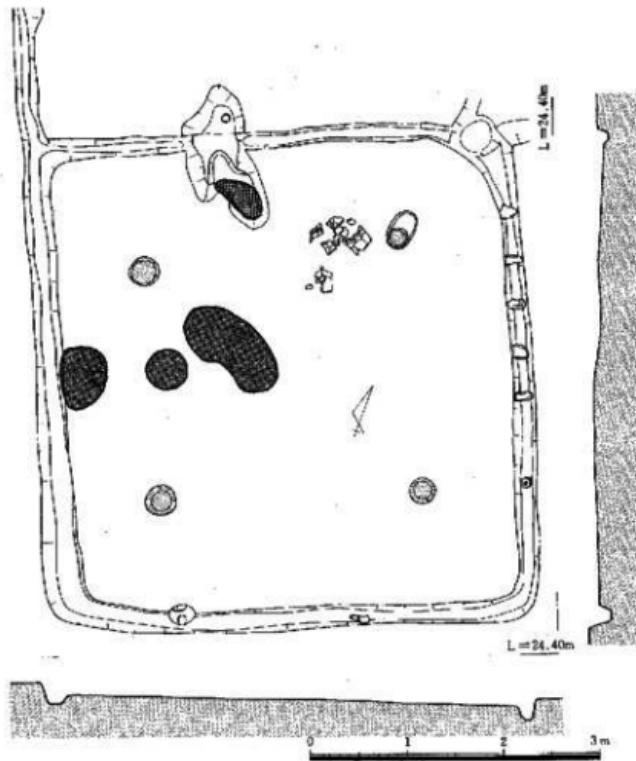


Fig.12 III区2号住居跡実測図 (1/60)

深さ10cmを測る。東辺の壁溝上には、振り拳人の石が長さ2mの間を50cmの等間隔で、壁溝を覆うように配されている。西辺の壁溝から直線的に谷側に向かって掘られているのが1号溝である。床面は、約23m²の広さを測り、僅かであるが東に傾斜する。これは、住居跡の立地する丘陵斜面の傾きに合致するものである。柱穴は、方形状に4本が配され、径30cmの円形の平面形、深さ30~50cmを測る。柱間の距離は、2.4~2.7mを測る。住居跡の外周等には、その他の柱穴などは認められなかった。北壁には窓、突出しが配されているが、削平のために規模を確認するには至らなかった。中央と西辺の壁溝近くの床面には焼上面が広がっている。

遺物（Fig.13, PL16）は、壁溝内から土師器（鉢、碗）、須恵器（甕）、石器（砥石）、床面からは土師器（甕）等が出土した。11は滑石製の筋錘車である。径5cm前後の円形に作られ、厚さは3mmを測る。作りは粗雑で外縁に面を残す。12・13の小型鉢の成形は、手づくねによる。赤褐色を呈する。底部は面を有し、口縁部は外反しながら立ちあがる。祭祀用と思われる。14の甕は、暗青灰色の色調を呈する。肩部には2条の凹線がめぐり、その間を波状紋が施されている。胴部は全体的に扁平的で、底部は丸味をもつ。16は台付きの鉢で、口径24cm、器高9cm、底部径12cmを測る。器壁は厚く、粗雑な調整である。台の整形は、ヘラ削りによる。

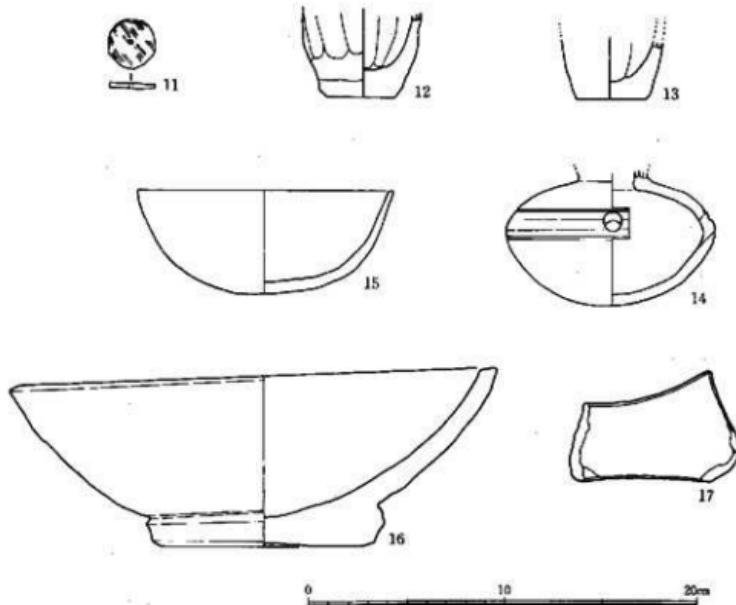


Fig.13 Ⅲ区2号住居跡出土遺物実測図 (1/3)

D.3号住居跡 (Fig.11・13, PL.12)

調査区南西隅、2号住居跡の下層で検出した竪穴住居跡である。住居跡は、東半部が調査区の外に位置するために全容は不明である。建物は、建物長軸が北南方向、すなわち丘陵等高線に並行するように配されている。竪穴部は、長辺4.4m、短辺3.2m、深さ8cmを測る。床面には、短辺の北側にいわゆるベッド状遺構、槽状の削り出しがあり、幅1m、高さ4cmを測る。壁溝は、槽状に削り出したベッド状遺構の三面にのみ認められ、幅10~15cm、深さ5cmを測る。柱穴は、床面中央において2本が配され、径25cmの円形の平面形、深さ20cmを測る。住居跡の外周等には、その他の柱穴などは認められなかった。

遺物は、埋土内からは少量の甕片が出土しており、弥生時代終末期~古墳時代初頭に比定されよう。

E.小穴 (Fig.11, PL.8)

小穴は、調査区南部のテラス状の平坦面を中心として検出された。径20~40cmを測り、口形ないしは梢円形の平面形を呈する。深さは10~50cmと一定ではない。柱穴からは、上師器の甕片、須恵器の坏片が出土している。

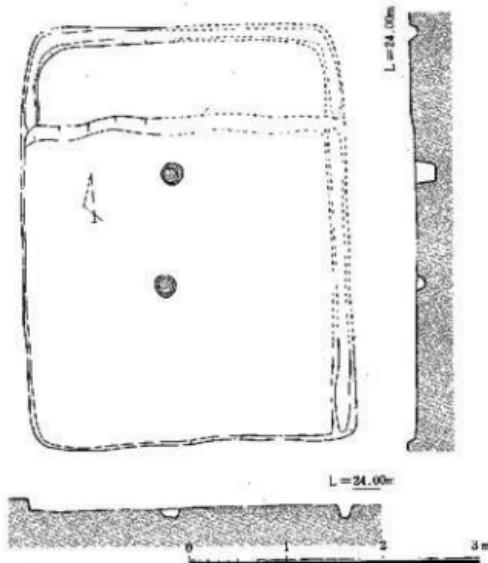


Fig.14 III区 3号住居跡実測図 (1/60)

C.1号壺棺墓 (Fig.16・17、PL 13)

1号壺棺墓は、調査区の西南隅に位置し、地表下0.7mの茶褐色粘質土上面で検出した。壺棺墓の立地する地形は、丘陵斜面中位にテラス状に形成された平坦部である。標高24.3mを測る。遺構の上半部は後世の削平により欠く。主体部は壺棺の单棺であると推定されるが、遺構検出時には、Fig.16、PL 13に示すように欠損した状態であったので考慮する必要がある。棺の大きさから、小児用が妥当であろう。

墓墳は、検出時で東西0.5m、南北0.6m、深さ0.3mを測り、平面形は椭円形を呈している。墓墳の断面は緩やかな弧を描き、壁は立ち上がる。墓墳および棺内からは、副葬品は検出されていない。

棺として用いられた壺は底部を欠く。壺は二重口縁で、球形の同部に頸部が鋭く外彎しながら立ちあがり、口縁部は内傾しながら立ちあがる。胸部と頸部との境には断面三角形の凸帯がめぐる。凸帯には飾りなどの施紋は施されていない。器面調整は、全体的に器面の剝離が激しく、確実な調整痕跡を認めることはできないが、口縁部は内外面ともヨコナデ、その他の内外面はハケメによると思われる。口縁部の成形は、折り返し技法ではなく、端部に別の粘土材を用いて二重口縁とし、端部は面を有する。口径は23cm、洞部径は最大で30cmを測る。

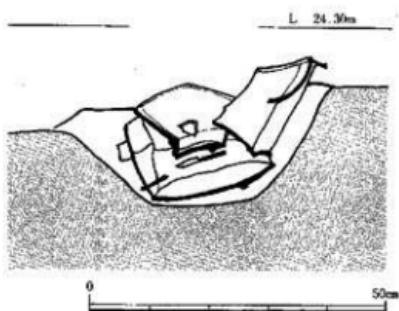


Fig.15 Ⅲ区1号壺棺墓実測図 (1/10)

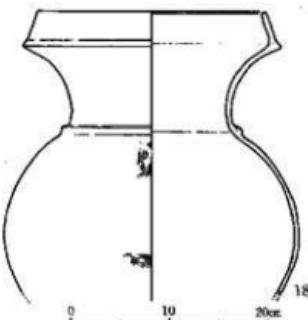


Fig.16 Ⅲ区1号壺棺実測図 (1/6)

4) 第Ⅳ調査区

調査区は、公園建設予定地の南半部中央、丘陵の標高23~25mを測る東緩斜面に位置するが、現地に立った感覚的には斜面というよりも平坦地である。東西8m、南北9mのトレンチを設定し、厚さ10cm前後の表土層を除去後、その下層である茶褐色粘質土の地山面で遺構検出を行った。その結果、弥生時代後期~古墳時代の溝3条、小穴多数を検出した。

A. 1号溝 (Fig.17, PL14)

1号溝は、調査区の北辺に位置する、素掘りの南北溝である。幅0.8m、長さ3m、深さ5~10cmを測る。溝の南端は、調査区中央部に位置し、緩やかに立ち上がって消滅する。溝は、その北端が調査区外に位置するために、全長は不明である。

遺物は、甕片が少量出土しているのみである。

B. 2号溝 (Fig.17, PL14)

2号溝は、調査区の中央に位置し、南北方向に中心軸をとる素掘りの溝である。幅0.5~0.6m、深さ10~20cm、長さ7mを測るが、溝の南北両端はそれぞれ調査区外に位置するために全長は不明である。平面的形状は直線的ではなく、僅かに彎曲ぎみである。溝の曲がり具合から推定すると、溝の開始地点は、調査区の北西に位置する丘陵頂部近くと考えられる。

遺物は、甕片が少量出土しているのみである。

C. 3号溝 (Fig.17, PL14)

3号溝は、調査区の西辺に位置する、素掘りの南北溝である。溝の規模は、幅0.5~0.8m、深さ15~30cm、長さ4mを測るが、溝の両端がそれぞれに調査区外に位置するために全長は不明である。

遺物は、甕片が少量出土しているのみである。

D. 小穴 (Fig.17, PL14)

小穴は、調査区全面で検出された。径20~40cmを測り、円形ないしは楕円形の平面形を呈する。深さは10~50cmと一定ではない。

遺物は、柱穴から土師器の甕片、須恵器の蓋片が出土している。

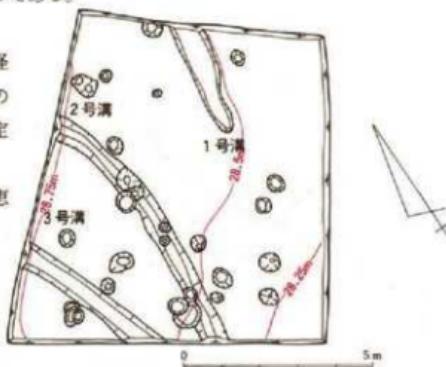


Fig.17 N区遺構配置図 (1/150)

5) 第V調査区

公園建設予定地の南辺部、丘陵の南面斜面に位置する。標高23~25mを測る。東西11m、南北7mのトレンチを設定し、掘り下げた。厚さ10cm前後の表土層を取り除き、その下層は茶褐色粘質土の地山面で遺構検出を行った。遺構遺物は、調査区内において認められなかった。調査区を含む調査地南辺部は、不自然な地形を呈していることから、後世の削平による遺構欠失が十分に考えられる。

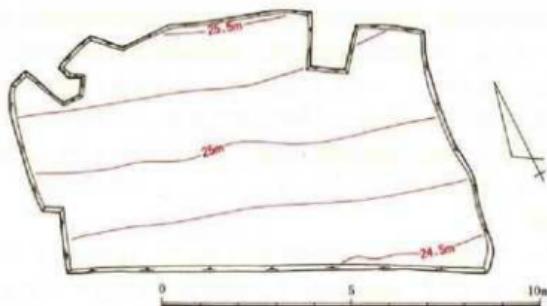


Fig.18 V区遺構配置図 (1/150)

6) 第VI調査区

公園建設予定地の西北部、北伸する丘陵の尾根筋上を占地する。標高27.5~28mを測る。調査区周辺は、調査前に宅地として使用されていたことから平坦化し、激しい削平を受けたことを予想させた。構造物建設予定地内に東西7m、南北3mのトレンチを設定し、掘り下げた結果、地表下35~55cmの茶褐色粘質土の地山面で小穴を検出した。小穴は円形ないしは梢円形の平面形を呈し、径0.7m、深さ0.6mを測る。小穴はいずれも直下に掘られており、底部は丸味を有する。

遺物はほとんど出土していない。

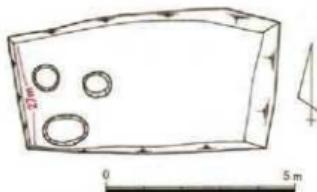


Fig.19 VI区遺構配置図 (1/150)

3. 小 結

本次調査は構造物を多く範囲だけを調査するという、制約された中での調査であった。しかし、宅地開発等により遺跡の確認調査も行われないまま現在に至った梅林の丘陵の過去の経緯からすると極めて意義の高いものであった。本項では、第1次調査の成果をまとめるとともに、いくつかの問題を取り上げ、今後の周辺地域における調査研究を進めるための手がかりとしたい。

遺物からの推定

調査では、弥生時代中期～奈良時代の遺物が出土したが、遺構は弥生時代末～古墳時代を中心としたものであった。この遺物と遺構の差違は、調査地が第I調査区に代表されるような遺物が集積しやすい谷部であったことによる。第I調査区の谷部における遺物の出土状況、器種、量は、今後の周辺地域の調査を進める上で貴重な資料を提供した。すなわち、谷部に面した丘陵上に立地したであろう遺構の変遷を如実に反映したものであることから、確実に丘陵周辺に弥生時代中期～奈良時代の遺構が存在していることを示しているからである。

遺跡の活動期

遺物の時代は、弥生時代末～古墳時代初頭を中心とするが、弥生時代中期、古墳時代後半期奈良時代の遺物も認められる。遺物の状況から、当地周辺における古代の活動は弥生時代末～古墳時代初頭に求められ、大規模な開削が奈良時代に行われたことが想定される。奈良時代の開削そのものの要因は今後の調査の検討課題であろう。

周囲の遺構

本調査地を含む飯倉遺跡群における埋蔵文化財の調査は、残念ながらその多くが実施されないままに開発・宅地化された。その中で、開発工事中に出土した遺物の情報が、調査中にいくつもたらされた。情報の多くは、調査地が立地する関係から、調査地周辺が多数を占め、主に弥生時代中期～後期に推定される甕棺墓の存在を示唆するものであった。この情報は、今調査地から出土した遺物とも整合性が認められることから、周辺に残る未開発地ははもちろんのこと、住宅地内にも遺構が遺存している可能性が高いと判断されるので、今後の開発・再開発時には留意する必要があろう。

生産基盤の推定

今回の調査では、遺構としては弥生時代後半期～古墳時代の住居跡を検出したが、遺物は弥生時代中期～奈良時代に比定される物が多量に出土した。このことから、十分に住居跡を中心とした遺構、すなわち集落が丘陵上に展開していたことが容易に想像される。この丘陵上に集落が展開していたとするならば、その集落の生産基盤は、丘陵に立地する谷部水田に求めざるをえない。今後の調査に注目したい。

第2次調査

第4章 第2次調査

1. 概要

2次調査は、調査対象区の東辺、北辺、西辺の外周部をU字型に調査を行った。不定形の調査区で、かつ伐採不可の大木が隨所に残り、遺跡、遺構の全体像を明らかにするのは極めて困難であった。

検出した遺構は、総計で641基に及ぶが、その大半はピットである。その他の主な遺構としては、住居跡20基以上、祭祀遺構と思われる土壇など3基以上がある。また北側に浅い谷部があり、ここで包含層を検出した。また出土遺物は総量コンテナで68箱に達するが、そのほとんどは北側谷部で検出した包含層からのもので、遺構に伴うものは、比較的少ない。

今回の報告では、紙数、時間の関係ですべての遺構、遺物については言及することができない。したがって、住居跡、祭祀土壇を中心に特徴的な遺構、遺物について、概要だけを報告することとし、その他の遺構、遺物については、別の機会に報告することとした。

2. 住居跡

住居跡は推定も含め、20基程度を検出したが、総じて遺存が悪く、また調査区の形状の關係で、全容を明らかにしうるものは少ない。

住居跡2004 (Fig.20)

D 3区で検出した。方形を呈すると思われる。遺存は悪いが、一段低くなる部分があり、ベッド状遺構を持つものと思われる。東辺で3.5mを計る。4本柱であろう。出土遺物は岡化に耐えるものがなく時期決定の決め手を欠く。

住居跡2007 (Fig.21)

B 3区で検出した。ほぼ正方形を呈する。北、西、南辺に、一段高くなる部分があり、ベッド状遺構を持つものと思われるが、すべてベッド状遺構とすると、中央部が狭くなり過ぎるのではないかとも思われる。1辺で4mを測る。主柱穴は不明である。

図示した出土遺物は古墳時代初頭頃の高坏坏部片であろう。外側に屈曲しつつ大きくなっている部を持つ。出土遺構の時期と、住居の形態等との間には特に矛盾がないと考える。

住居跡2024 (Fig.22)

H 2区で検出した。方形を呈するものと思われるが、遺存が悪く、西壁と、南壁の一部しか、検出されなかった。ベッド状遺構、壁溝などは見られない。西辺で3.2m以上を測る。

図示した遺物は、1が須恵器片である。壺の胴部であろうか。3は黒耀石の割片である。

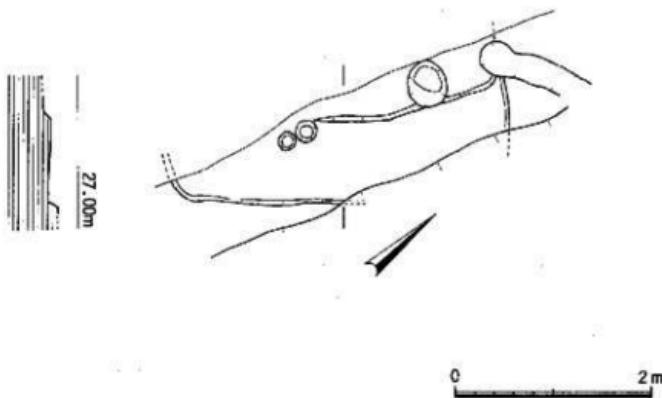


Fig.20 住居跡2004実測図 (1/60)

住居跡2044 (Fig.23)

H 1 区で検出した。ほぼ正方形を呈する。この住居跡は、焼失住居である。しかし、失火ではなく、焼失廐棄と思われ、遺物がほとんど出土していない。北、西、南辺に壁溝が見られる。住居跡2024に切られる。2本柱である。一边4~4.5mを測る。

図示した出土遺物は、1が高壊片である。脚部は短いものである。2は椀であろうか。外面にハケメを施す。

住居跡2057 (Fig.24)

G 2 区で検出した。東西とも調査区外にでており、規模は不明であるが、ほぼ長方形を呈すると思われる。遺存は極めて悪い。壁溝などは見られない。住居跡内のピットはいずれも浅く、主柱穴の特定はできない。須恵器片が出上している。

住居跡2124 (Fig.25)

D 7 区で検出した。西側が調査区外にでている。長方形もしくは梢円形を呈すると思われる。東辺の中央付近に一部壁溝が見られる。壁溝に取り付く形で住居跡を区画する溝が見られ、この溝から南側がベッド状遺構になるのかもしれない。区画溝が取り付くピットが主柱穴の一つと思われる。住居跡2125、2128、2129を切る。図化に耐える遺物はない。

住居跡2126 (Fig.25)

C 6 区で検出した。西側が調査区外にでている。長方形もしくは方形を呈すると思われる。壁溝は見られない。東辺で3.5mを測る。隅角にそれぞれピットが見られ、これが主柱穴にな

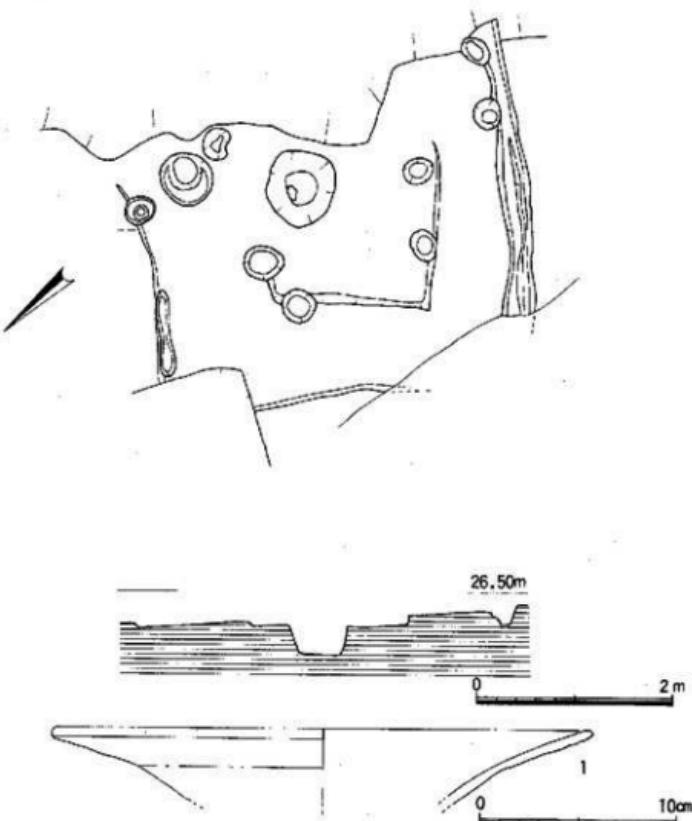


Fig.21 住居跡2007 (1/60)・住居跡2007出土遺物実測図 (1/3)

ると思われる。須恵器片が出土している。

住居跡2125、2128 (Fig.26)

D 6 区で検出した。住居跡2125、2128は当初同一遺構として掘り下げを行った。しかし、その結果2125部分にあたる箇所が不自然な段状部を呈し、2基の住居跡の切り合いの可能性を考えて、別の遺構番号を付した。しかし発掘の結果、図示したように2125まで含めた方が、住居跡平面形としては均正が取れている。いずれにしても出土遺物もなく、これ以上の確定は不可能である。2128は北辺と東辺に壁溝が見られる。また中央にも区画溝が見られる。住居跡内にはビットはいくつか見られるが、いずれも浅い。あるいは区画溝の両端のビットが主柱穴にな

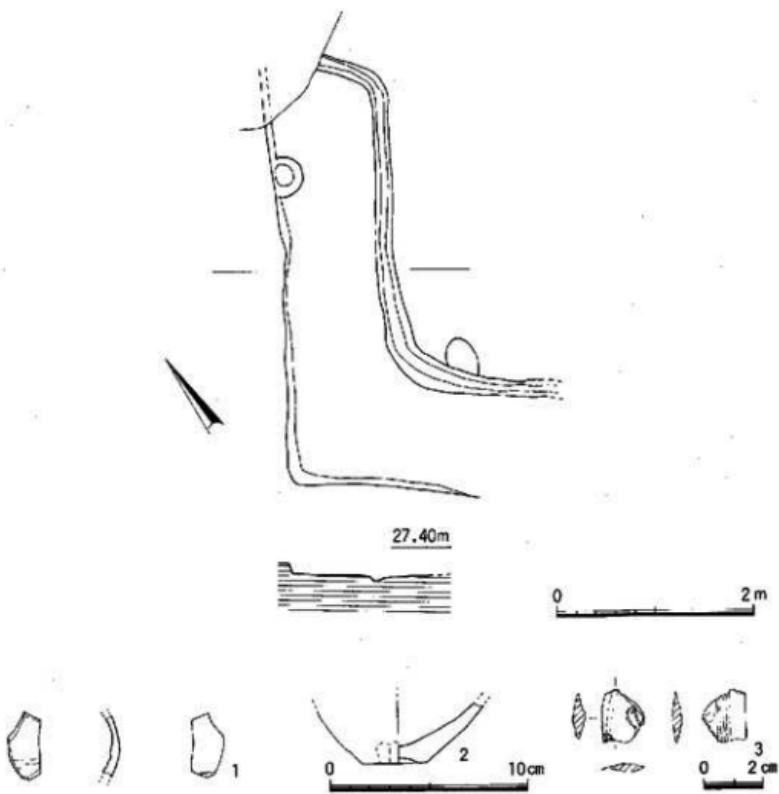


Fig.22 住居跡2024 (1/60)・住居跡2024出土遺物実測図 (1/3・1/2)

る2本柱であろうか。

住居跡2129 (Fig.26)

D 6区で検出した。住居跡2126、2128に切られる。ほぼ方形に復原できよう。西辺の一部に塁溝が見られる。

住居跡2163 (Fig.27)

G 7区で検出した。北側と東辺の一部を住居跡2195に切られ、東辺、南辺が調査区外にてて、規模などは不明であるが、ほぼ方形に復原できよう。遺存している北辺と西辺に塁溝が見られるが、西辺ではずれている。ビットはいくつか見られるが主柱穴は特定できない。

出土遺物の1は土師器高坏の脚であろう。2は鉄器であるが、刃は付けられておらず器種不

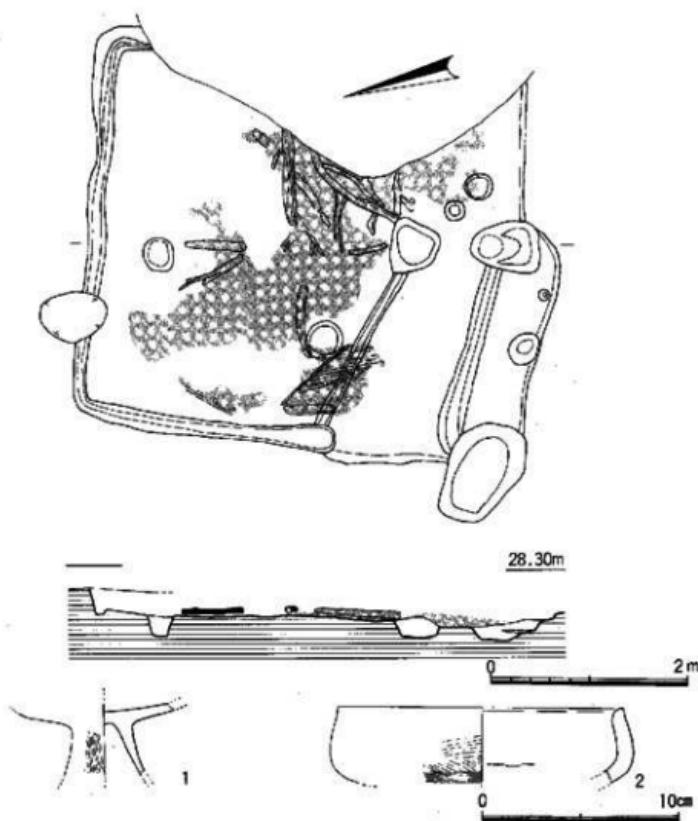


Fig.23 住居跡2044 (1/60)・住居跡2044出土遺物 (1/3) 実測図

明である。

住居跡2195 (Fig.28)

F 7 区で検出した。調査区内では比較的遺存のよい住居跡であるが、東側は調査区外にでる。方形もしくは長方形である。西辺で 6 m を測る。西辺、南辺には壁溝が見られ、北辺には壁溝の代わりに小穴が並び、杭状のものを多数打ち込んで、壁を立ち上げたものと考えられる。床面から比較的良好な遺物が出土しており、時期が判明する。

出土遺物の 1 は須恵器の壺である。口縁部を欠く。肩が強く張り、最大径部に 1 条、その下位に 2 条の沈線を巡らし、沈線間に櫛指波状文を施す。底部外側に回転ヘラ削りを施す。内面には顕著に指頭痕が見られる。2 は上師器壺である。外反する口縁を持ち、胴部が張る。長胴

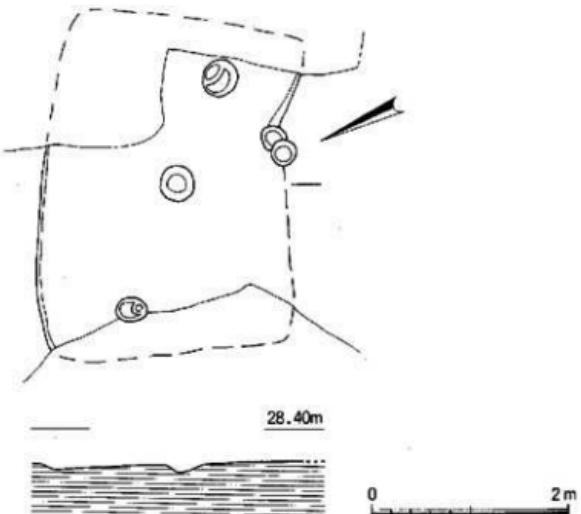


Fig.24 住居跡2057実測図 (1/60)

になるものであろう。器壁の遺存が悪いが、内面はケズリが施されていよう。3は土師器高壺の脚部である。外面にはハケメが見られる。4は土師器碗である。口縁端は薄く仕上げる。5は支脚である。裾広がりになる。いずれも古墳時代後期に属する。

住居跡2193 (Fig.29)

B 5区で検出した。ほぼ方形を呈すると思われるが遺存は極めて悪く、壁はほとんど遺存していない。西辺の中央に一部壁溝がみられる。

住居跡2374 (Fig.29)

H 7区で検出した。L字状に折れ曲がる溝を検出し、住居跡壁溝であろうと判断した。溝は西辺と南辺に見られ、北側には見られない。西側は調査区外に出る。住居であればほぼ方形を呈すると思われる。溝内から高台を持つ壺片が出土しており、古代に属するものと思われる。

住居跡2312 (Fig.30)

D 7区で検出した。ほぼ方形を呈すると思われる。遺存は極めて悪く、壁はわずかしか残っていない。南辺に壺溝が見られる。中央部で検出したピット2315はその位置から住居跡に伴うものと考えられる。瓶が出土しており、炉跡の可能性も考えられる。

Fig.31にピット2315出土上の瓶を図示した。平口縁で、端部は丸く收める。肩部のかなり上位に把手を持つ。底部に向かって丸みを持ちながらすぼまる。孔は2孔の半円もしくは1孔の円孔であろう。外面はハケメ、内面はケズリ調整である。古墳時代後期に属する。

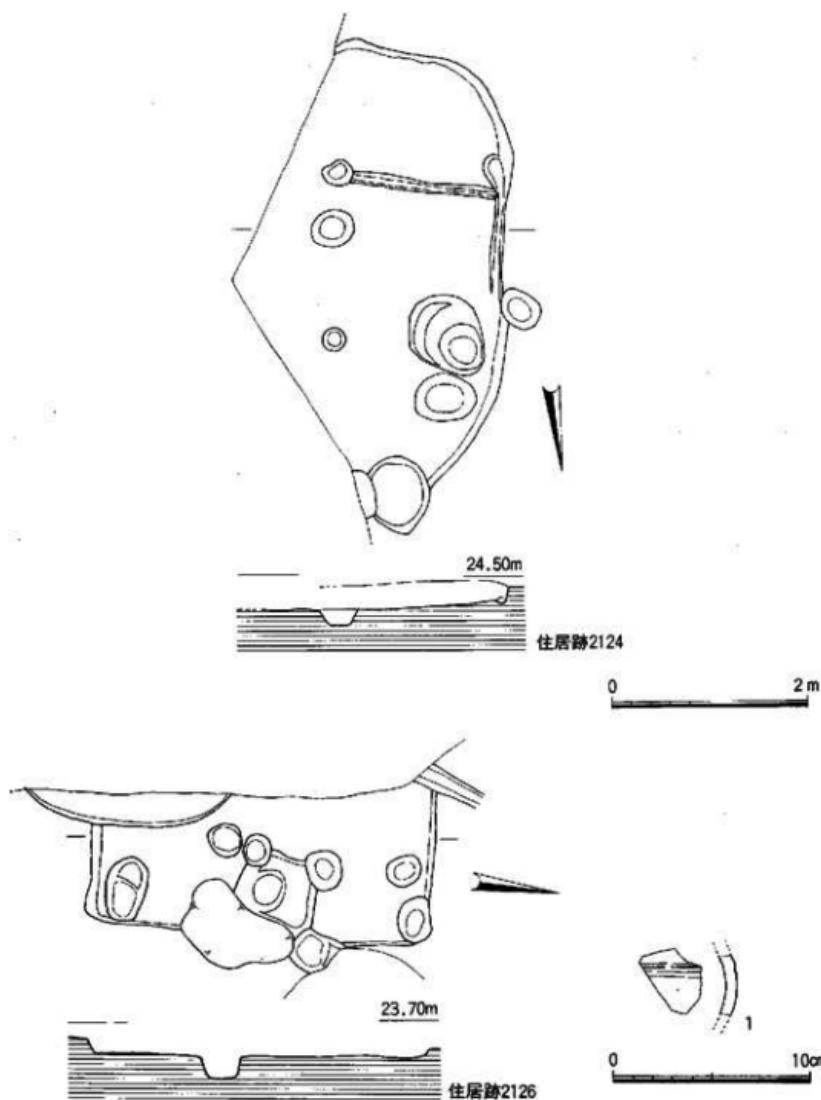


Fig. 25 住居跡2124・2126 (1/60)・住居跡2126出土遺物 (1/3) 実測図

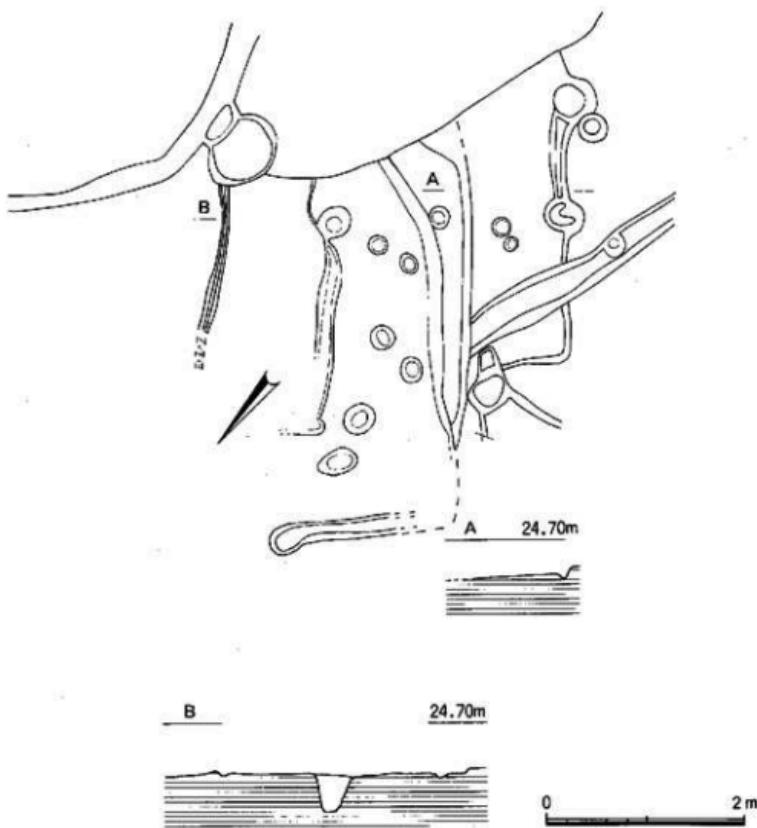


Fig. 26 住居跡2125・2128・2129実測図 (1/60)

住居跡2383 (Fig.30)

E 7区で検出した。西側のベッド状遺構の一部のみ検出した。方形もしくは長方形を呈する。壁溝が巡る。西辺で4 mを測る。岡化に耐える遺物は出土していない。

住居跡2390 (Fig.32)

E 7区で検出した。西側、南側が調査区外に出る。西側に方形に一段低い部分があり、検出した部分はベッド状遺構の一部と考えられ、L字もしくは四字形に巡るものと考えられる。方形もしくは長方形を呈する。壁溝は見られない。北辺で3 mを測る。

出土遺物 (Fig.33) 1は高坏の口縁片であろうか。2は複合口縁壺であろう。屈曲部に刻目

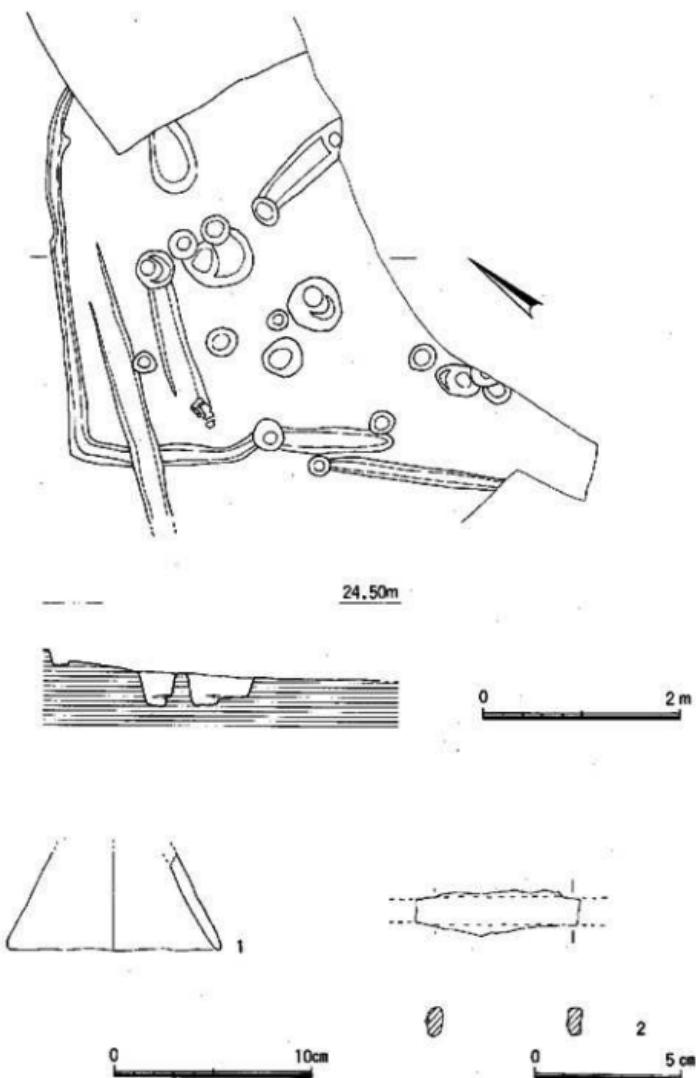


Fig.27 住居跡2163 (1/60)・住居跡2163出土遺物 (1/3・1/2) 實測図

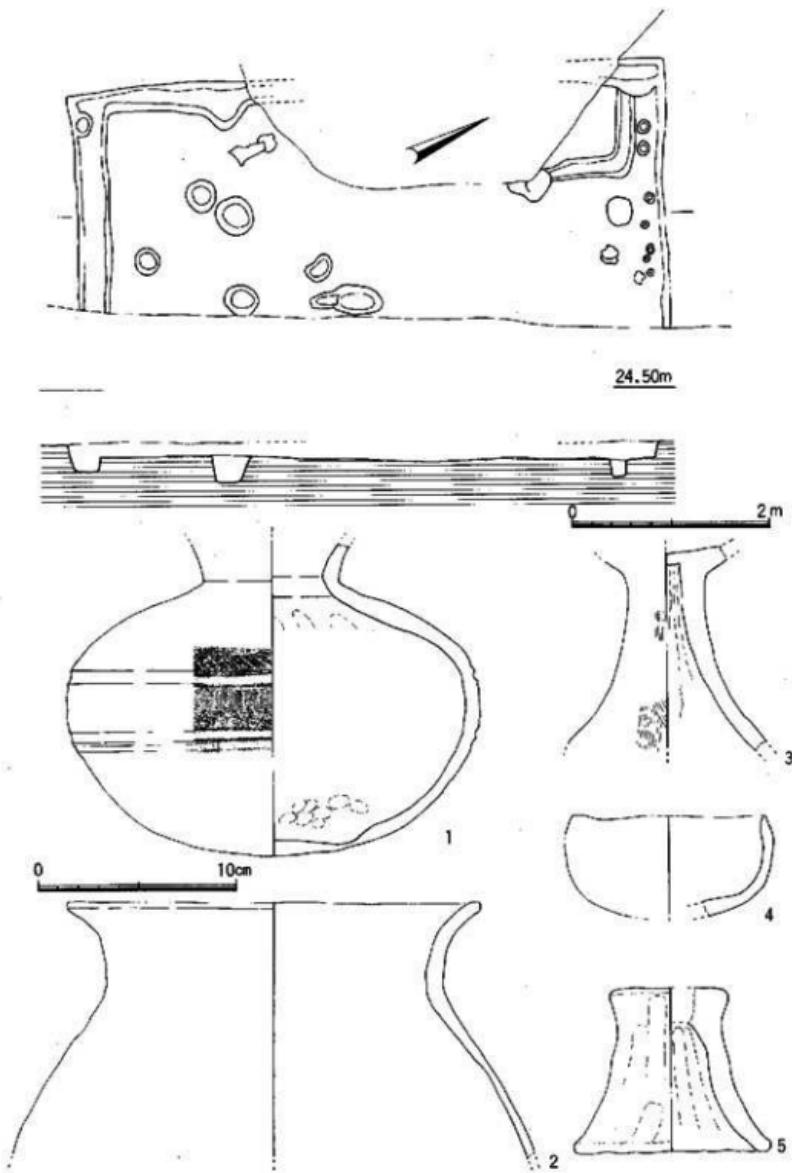
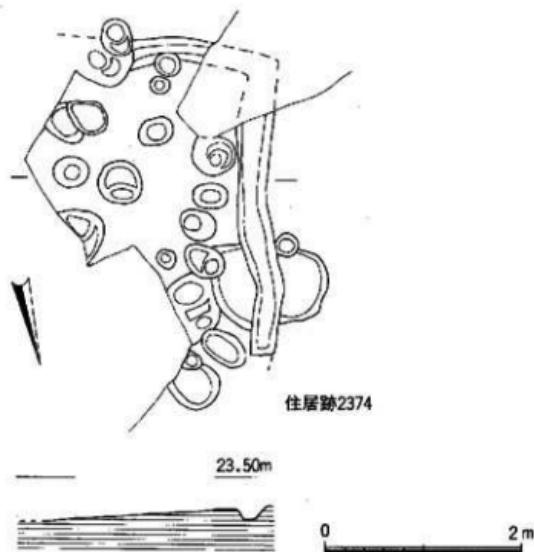


Fig.28 住居跡2195 (1/60)・住居跡2195出土遺物 (1/3) 実測図



住居跡2193



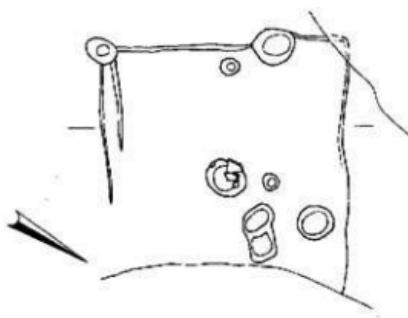
住居跡2374

23.50m

0

2m

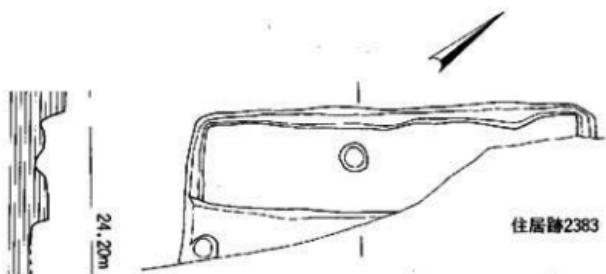
Fig.29 住居跡2193・2374実測図 (1/60)



23.60m



住居跡2312



住居跡2383

0 2 m

Fig.30 住居跡2312・2383実測図(1/60)

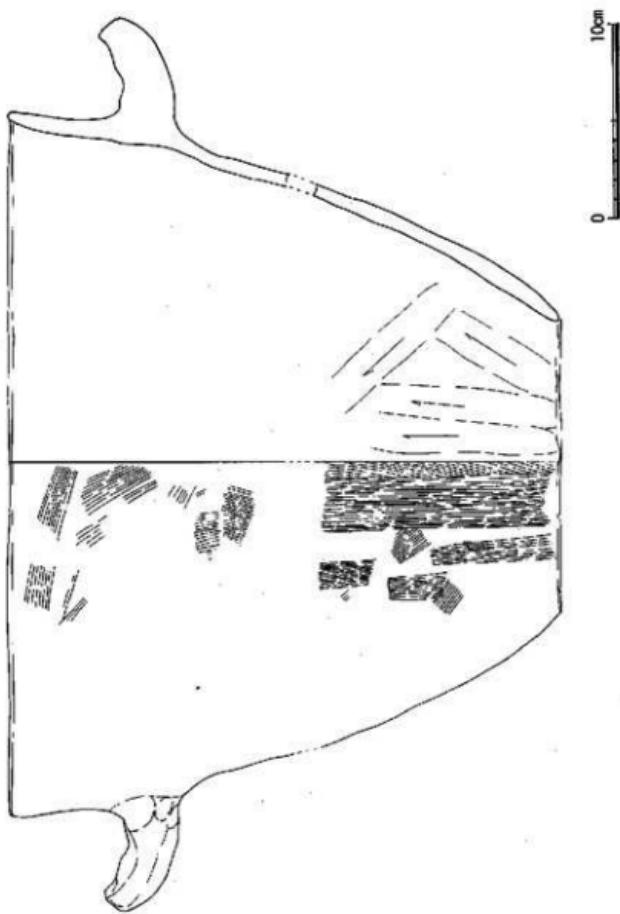
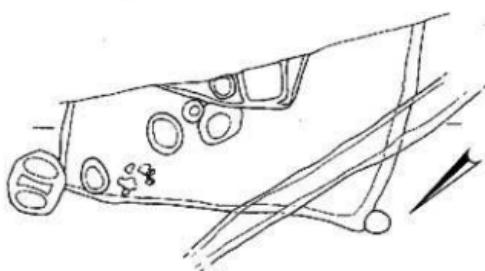
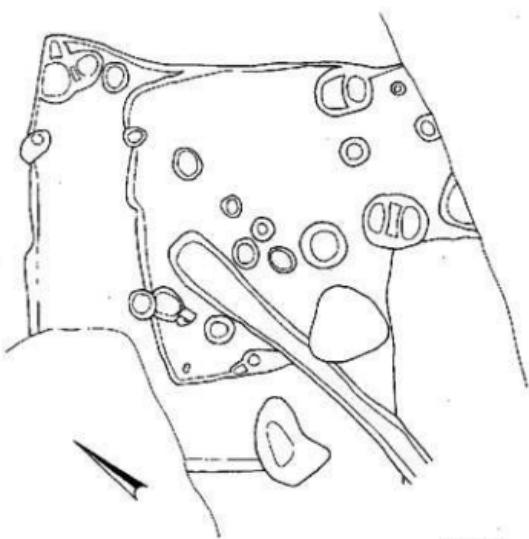


Fig. 31 ピット2315出土遺物実測図 (1/3)



24.20m



23.30m



Fig.32 住居跡2390・2407・2509実測図 (1/60)

を施す。口縁部は直線的に内傾する。3は脚部である。高杯もしくは台付甕であろうか。脚部には内外面ともハケメを施す。4は高杯脚柱部である。裾部で屈曲する形態のものであろう。5は器台である。緩く屈曲する。外面はハケメを施す。6も器台であろう。やや小形である。7は台付甕の脚台である。内外面ともなでられている。8は平底の底部である。横方向の調整痕が残る。9も底沿である。ミニチュア土器であろう。出土土器は弥生時代後期後半～終末頃に位置付けられよう。

住居跡2407、2509 (Fig.32)

E 7区で検出した。2509は2407のベッド状遺構部分と考えられるが、図示したように形態がややいびつで疑問が残る。出土遺物からは、明らかな時期差は見出しえない。一応ベッドとみなして報告する。西側と南側にL字に巡る。壁溝は見られない。南北4m、東西3.5mほどの長方形に復原される。住居跡2390に切られる。

出土遺物 (Fig.33) 10は高杯脚部である。直線的に大きく開き、屈曲部は不明瞭な段状を呈する。11は高杯もしくは台付鉢である。外反しつつ大きく広がる口縁部をもつ。端部は丸く取める。口縁部の体部の境には段、沈線などは見られない。以上は2407部分の出土である。12は高杯脚柱部である。長い円筒部を持つ。外面にハケメを施す。13は甕口縁部で、付け根に断面三角形の突帯を1条巡らす。以上は2509部分の出土である。住居跡2407、2509出土遺物は、いずれも弥生時代終末に位置づけられる。

遺構2168出土遺物 (Fig.34-35-36)

住居跡2407、2509、2390の上層で、遺物の集中する箇所を検出した。遺構としての輪郭が判明しなかったのでとりあえず出土位置を記録した後振り下げる。その結果住居跡を検出したのである。図には下層の住居跡の検出位置によって出土遺物を分けているが、それとの間に時期差は小さく、むしろ弥生時代終末期である住居跡との間に明確な時期差を認めうる。したがって遺構2168は、下層の住居跡とは別の遺構もしくは包含層と考えられる。

Fig.34-1、2は須恵器壺蓋である。いずれもかえりを持つ。3、4はかえりの形態から壺身とした。5は須恵器甕の口縁部である。口縁端を面取りし、直下に突帯状の段を持つ。6は弥生時代後期の器台で、下層の住居のものであろう。7は土師器甕である。内面をヘラ削りする。8は小形甕の底部で、下層住居のものであろう。9は調整がよくわからないが、土師器甕で、上層のものと思われる。以上は2407上層出土。

Fig.35-10、11はかえりを持たない須恵器壺身である。12は須恵器細頸壺である。肩が強く張る。13は土師器で、甕口縁であろう。14、15は土師器の把手である。以上は2509上層出土。

Fig.36-16は須恵器甕である。口縁部は内傾して面取りされ、直下に突帯状の段が付く。2390上層出土。17も須恵器甕である。18は土師器把手である。19は弥生時代の器台であろう。20はミニチュア土器である。以上は住居跡検出位置からは外れた位置から出土している。19、20は

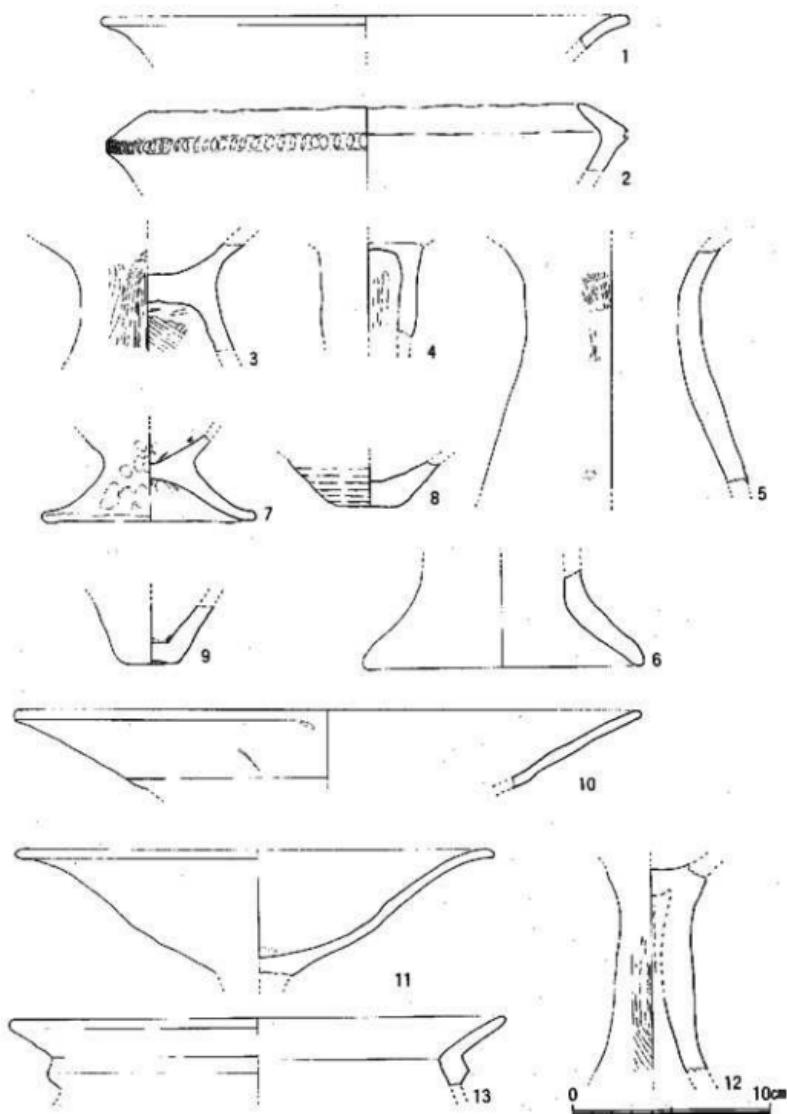


Fig. 33 住居跡2390・2407・2509出土遺物実測図 (1/3)

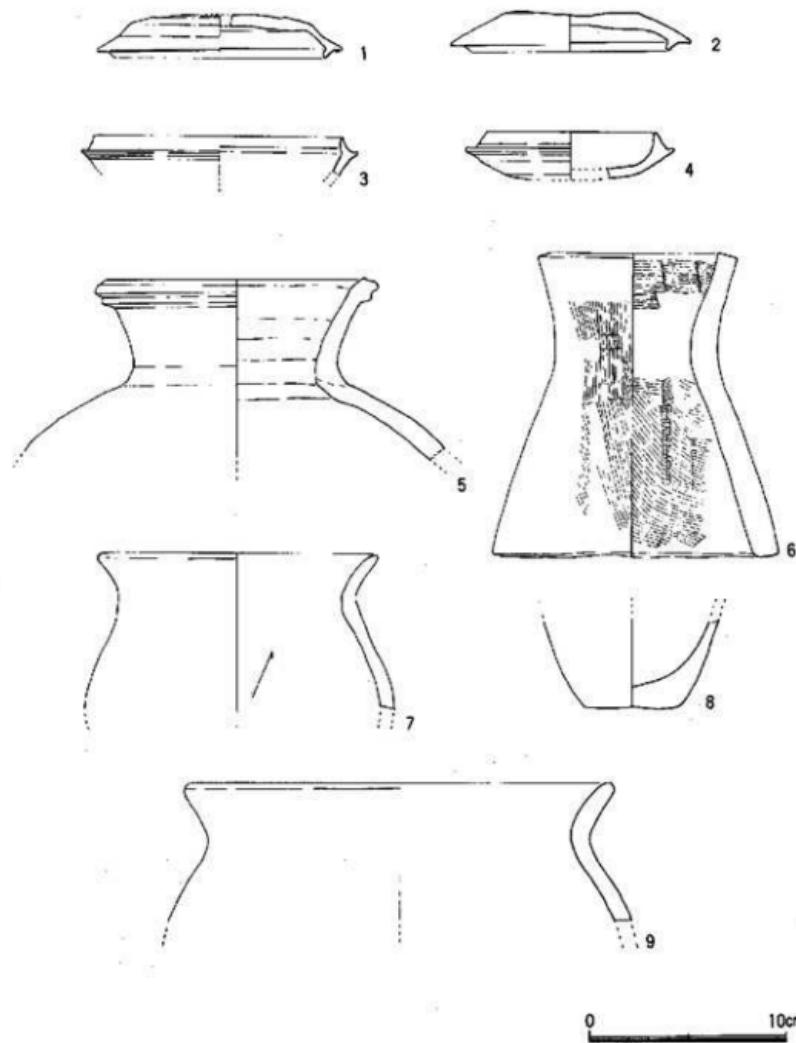


Fig.34 通構2168出土遺物実測図(1) (1/3)

下層住居関連の遺物と思われる。21は2407上層出土の袋状鉄斧である。遺構2168出土遺物は、下層住居跡に伴うと思われる弥生時代遺物を除くと、古墳時代後期から古代に属するものである。

3. 祭祀土壙

祭祀関連の可能性が考えられる土壙が、3基検出された。いずれも橢円形の土壙に土器を投棄している。この他に、掘方は見られなかったが、焼土上に祭祀遺物を検出した遺構もある。

土壙2130 (Fig.37)

E 7区で検出した。橢円形を呈し、長1.1m、巾0.7mを測る。床面には約15cmの厚さで、白色の粘土を敷いている。その上部に甕、壺などの須恵器が出土した。

出土遺物の1は壺身である。外傾する口縁部を持つ。底部はヘラ切りのままである。2は高台付の壺である。直線的にやや外傾する高台である。3は須恵器の鉢である。屈曲して外反する口縁を持つ。4は須恵器甕である。強く外反する短い口縁部を持ち、端部はわずかに内傾する坦面を持つ。胴部は大きく張る。いずれも古代に属する。

土壙2316 (Fig.38)

D 7区で検出した。橢円形を呈し、長1.4m、巾0.9mを測る。この土壙はいわゆる焼土壙である。床面には炭が堆積しており、壁の中央部も焼け縮まっている。遺物は最上層で、大甕の破片が見られた。

図示した遺物が、大甕の肩部片であるが、厚さから見ても、かなりの大きさになるものと思われる。叩き調整されている。

土壙2317 (Fig.39・40・41)

F 7区で検出した。L字に曲がる溝状を呈するが、遺物の見られない南側屈曲部は別遺構の可能性もある。遺物の出土している部分は、長方形を呈し、2.7m、巾0.9mほどを測る。

出土遺物Fig.40-1～3は壺蓋である。2はやや口径の大きいもので、かえりは小さい。3は天井部につまみを持つ。かえりは比較的高い。4は平底の壺である。口縁端は丸く収める。5はやや深めの壺で、口縁部は薄く尖らせる。やや上部になる。6～7は高台付の壺である。6はやや深めの壺部に踏張り気味の高台を持つ。7は短い高台を持つ。8は浅い壺部に高い高台を持つ器形のものであろう。9は壺の肩部であろう。10は小形壺である。短く外反する口縁部で、底部は平底である。Fig.41-11は土師器甕である。12も甕口縁である。15は瓶の口縁部であろうか。13、14は把手である。

遺構2123 (Fig.42)

調査区東半区北側で遺構検出作業中、表土直下から陽物形土製品が出土した。周囲を精査して見たが、掘方などは全く検出できず、ただ地山が焼けた部分が川上推定地の周囲に不整形に

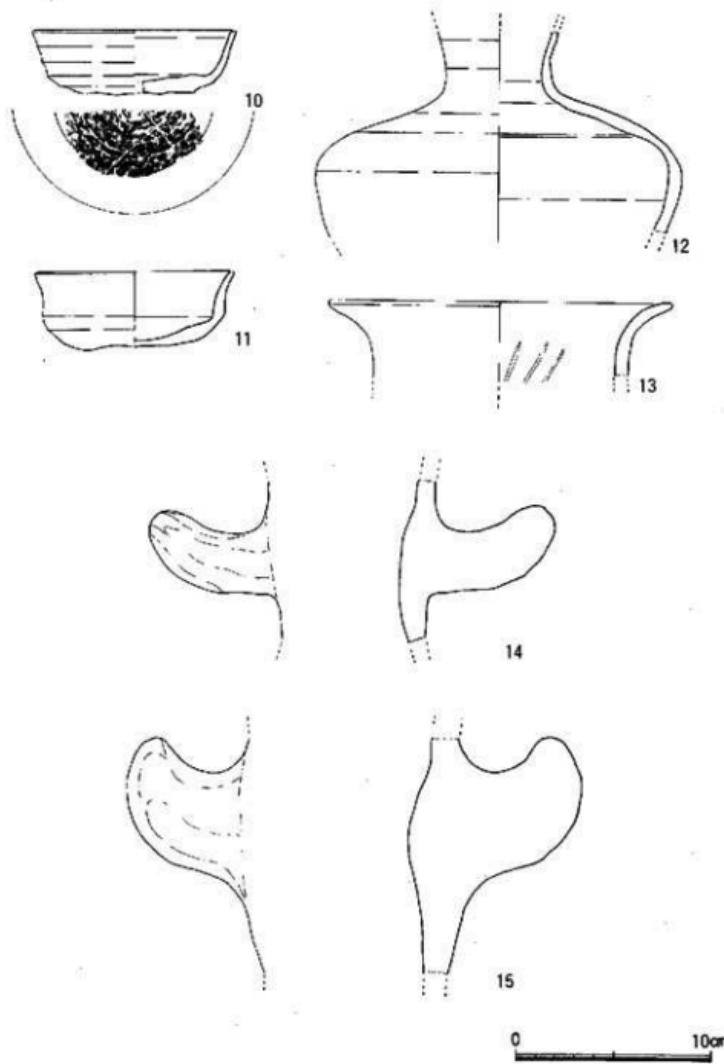


Fig.35 遺構2168出土遺物実測図(2) (1/3)

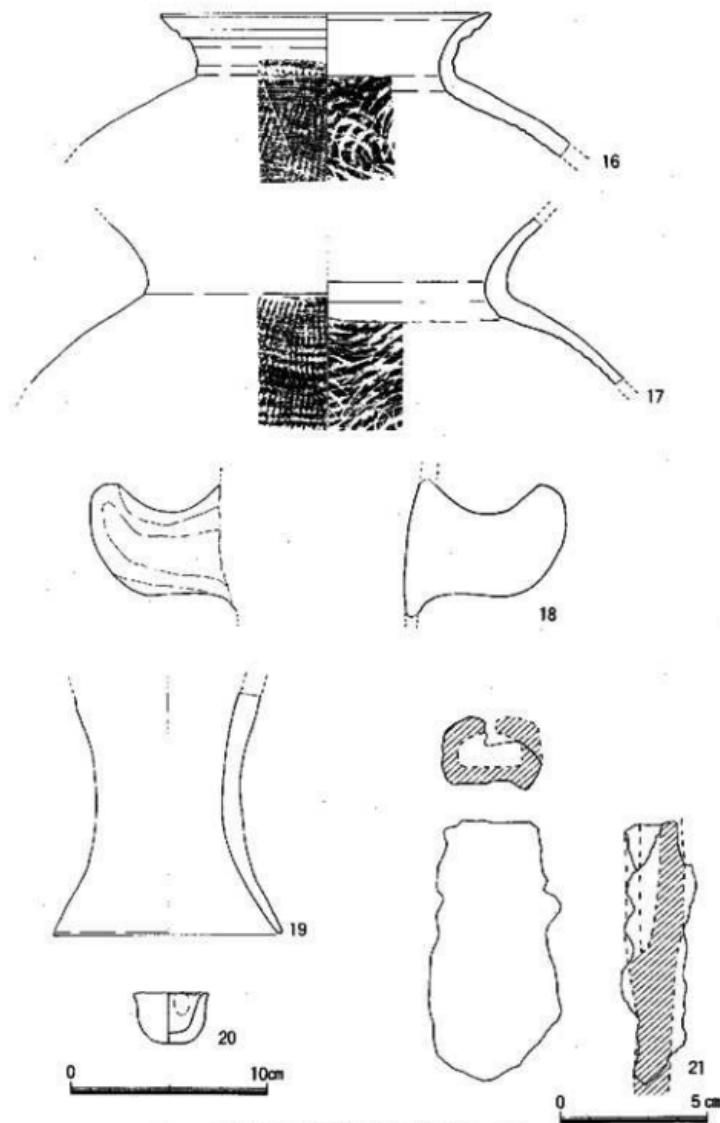


Fig. 36 造構2168出土遺物実測図(3) (1/3・1/2)

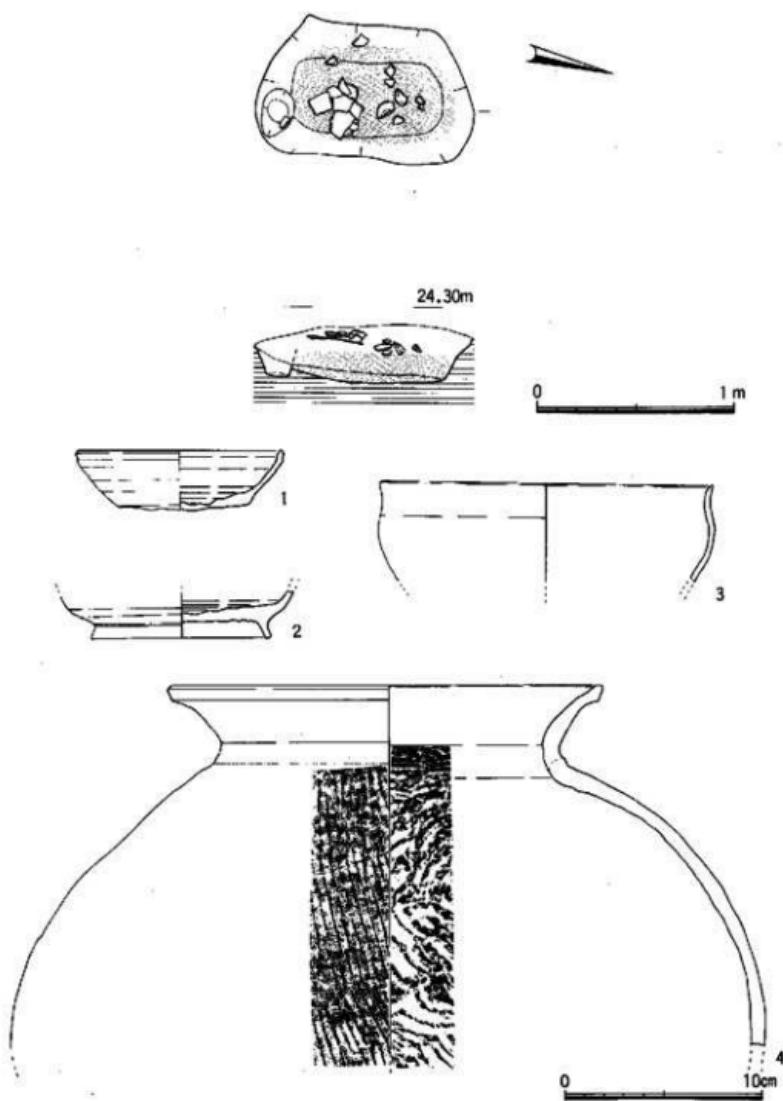


Fig.37 土壙2130 (1/30)・土壙2130出土遺物 (1/3) 対測図

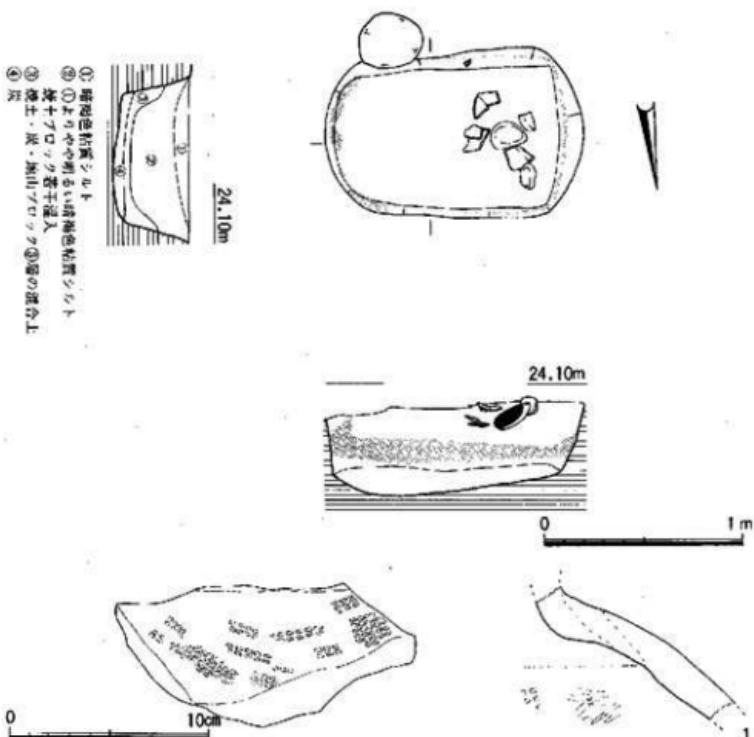


Fig.38 土壌2316 (1/30)・土壌2316出土遺物 (1/3) 実測図

見られたのみであった。祭祀遺構の一類には間違い無いと思われる。

Fig.42-11に出した陽物型土製品を図示した。ほぼ丸形と思われ、長5cm、基部幅1.6cm、最大幅2cmを測る。ミニチュアとはいえ、表現はかなりリアルである。先端部には小孔を穿つ。この種の祭祀遺物は、古くは縄文時代の石棒から近年に至るまで多く見られるものであるが、少なくとも古代以前では石製品、木製品が主流であり、土製品というのは極めて稀である。管見に触れたかぎりでは、兵庫県氷上郡春日町春日七日市遺跡において出土している。七日市例は先端部約6.5cmが遺存しており、基部の最大幅3.97cmを測る。調査者によると30cmほどに復原されるという。弥生時代中期後半に属する。現在ではこの例のみである。では飯倉F遺跡例はいつの時期に属するものであろうか。先述した様に直接的に時期を示す遺物は無いので確定できないが、祭祀に関わる遺構は、今まで述べてきたように古代に属するものが多く、該期に属する可能性が最も高いものと考える。

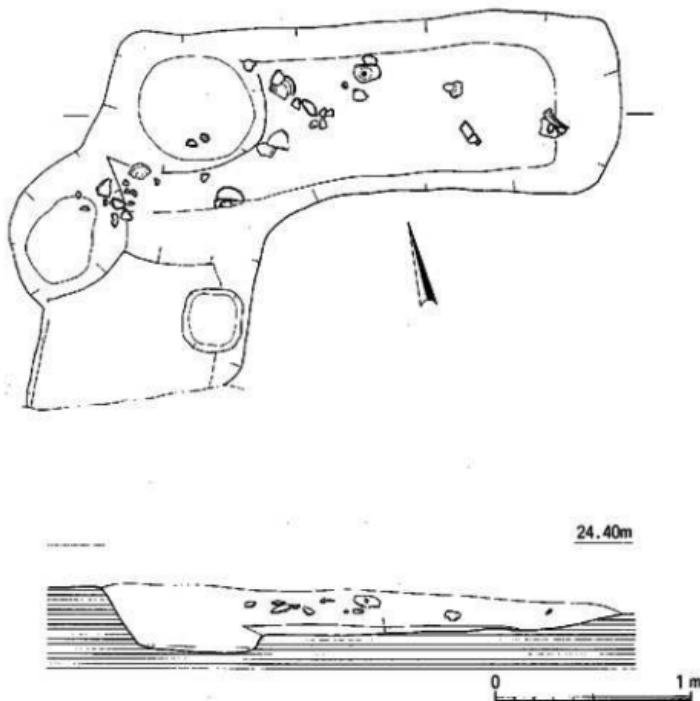


Fig.38 土壙2317実測図 (1/30)

4. その他の遺物 (Fig.42)

その他、ピットなどから出土した遺物のうち、特徴的なものについて述べておく。

1は石包丁である。外湾刃を有し、基部も外湾する。小豆色を呈し、いわゆる立岩産の銅鐸石安山岩性の石包丁である。孔は2孔で、両面穿孔である。北側谷部の包含層出土。2も銅鐸石安山岩性の石包丁である。外湾刃を有し、基部はほぼ直線である。図上右側の使い減りが著しい。刃部もこの部分が広くなっている。穿孔はほとんど片側から仕上げのみ反対側から穿つ。かつ、交互に穿孔している。図上左側は図上表から、右側は図上裏側から穿孔している。2孔の間に貫通していない孔がある。この孔は図上表のみである。ピット2127出土。3～5も石包丁であるが、石材はそれぞれ異なる。3は直線的な基部に外湾する刃部を持つ。約二分の一の破片である。4は外湾する基部を持ち、使い減りのため刃部はかなり直線的になっている。孔の部分で破損している。5は小片で孔の部分と刃端で破損している。

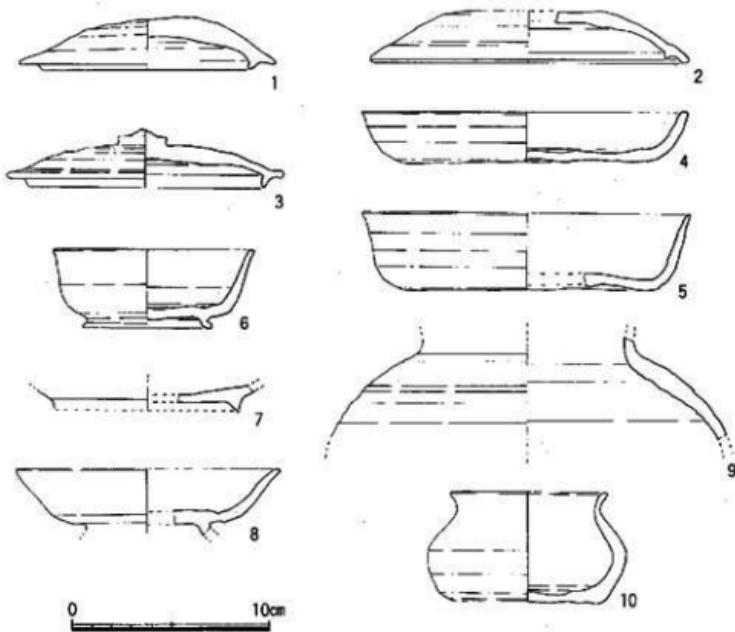


Fig. 40 土壌2317 出土遺物実測図(1) (1/3)

6は安山岩製の石鎌である。細身で、縁部は鋸歯状を呈する。基部端を欠くが、凹基である。北側谷部包含層出土。7は黒耀石製の石鎌である。基部は深い凹基である。ピット2076出土。

8は鉄鎌である。凹基をなす無基式で、偏平である。ピット2049出土。9は器種不明の鉄器である。関部状の部分を持ち、茎状をなす部分があるところから、刀子片ではないかと考えられる。銹化が著しい。10は鉄斧である。ピット2309出土。基部は袋状に折り曲げる。基部断面は梢円形を呈する。

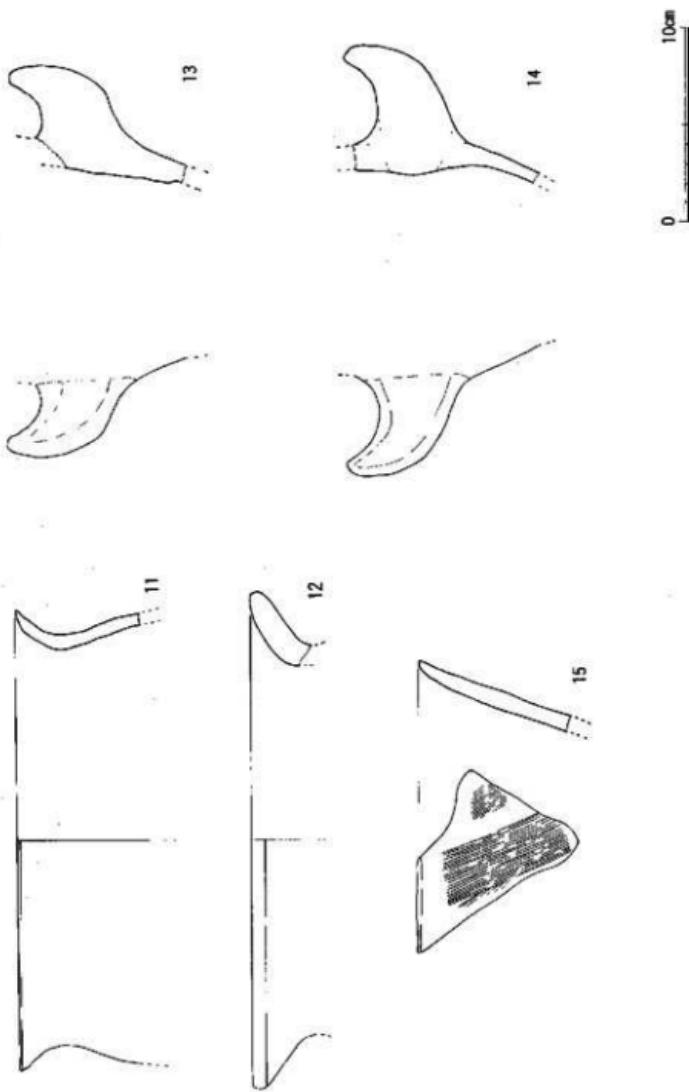


Fig. 41 土標2317出土遺物實測圖2 (1/3)

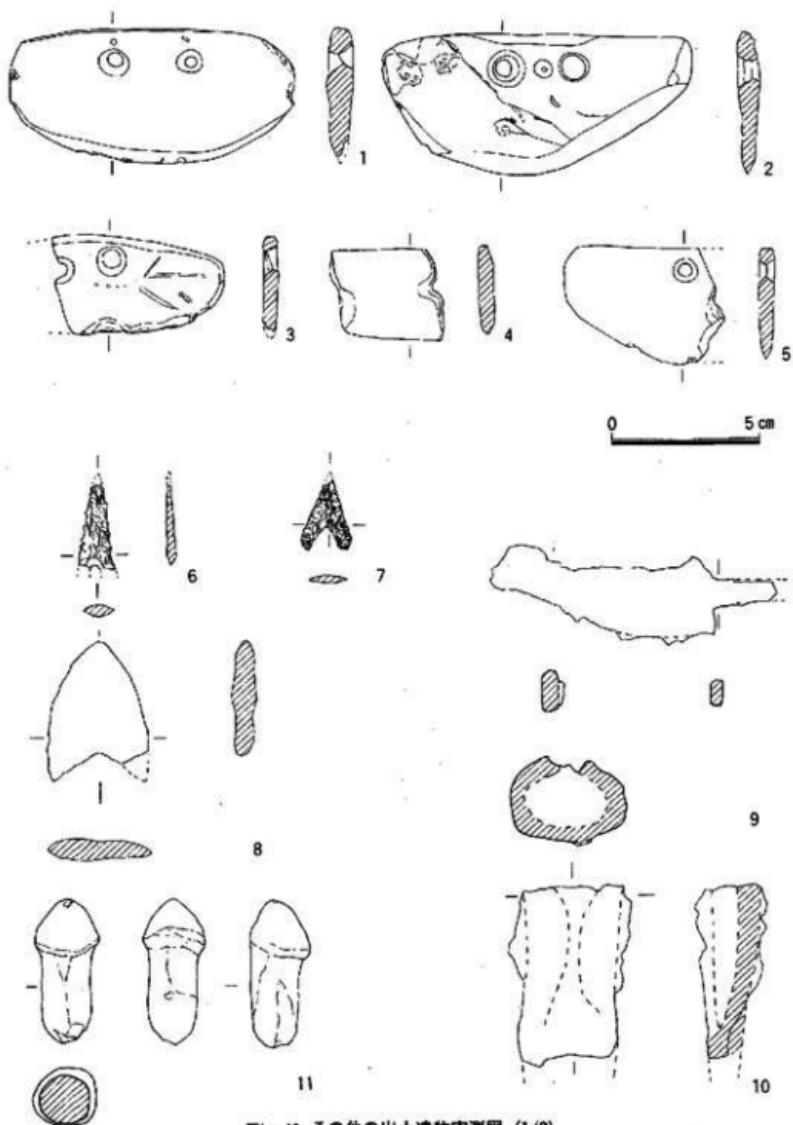


Fig.42 その他の出土遺物実測図 (1/2)

第3次調査

第5章 第3次調査

1. 調査の概要

1) 調査の経緯

今回の調査は平成元年度（1989年）から始められた、梅林緑地公園造成に伴う事前調査の最終年度の3次調査である。

調査は昭和61年度に行った試掘調査の成果を基に、工事によって遺跡の消滅が予想される地域を中心に発掘調査を行った。第3次調査の調査対象範囲は最終的に残っていた公園予定地内の中心部の調査である。調査は公園内の樹木は出来るだけ残して公園整備を行うという公園緑地課の方針に沿って、保存樹木を残しつつ重機で表土除去を行い、耕土は既に調査が終了している部分に仮置した。調査は平成3年（1991年）5月1日から開始し、埋戻し終了の同年9月11日迄行った。今回の調査面積は1,615m²であるが、保存樹木を残して調査を行ったため、調査区域は複雑な形を成している。

2) 調査の概要 (Fig.43)

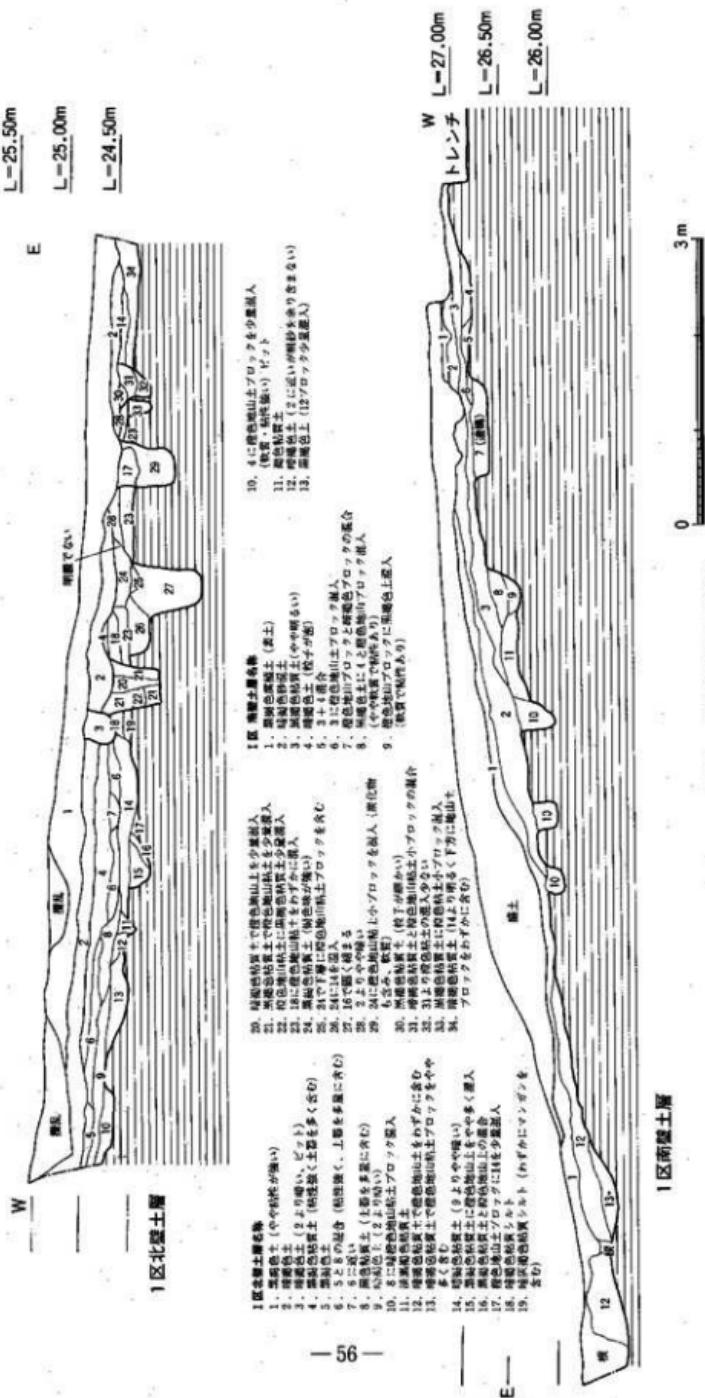
調査範囲は中央部のI区、遊歩道部のII区の2区域に分かれる。I区は高所部分の西側から低地部の東へ階段上に低くなり、西側の標高は27.5m、東側の標高は23.5mを測り、北側には舌状の狭い谷が入り込み、包含層を形成している。II区は北から南へ傾斜する斜面である。

這構面は橙色から明褐色の花崗岩バイランナである。I区南壁の土層では盛土（前年調査の残土）の下10~50cmの表土と暗褐色土の下で確認した。北側の包含層は30~50cm厚の黒色から黒褐色粘質土を主体とする。這構面は調査区全域で検出したが、調査区はもともと緩斜面を階段状に造成した場所であった為、造成で地下げを受けた部分は這構の残りが良好であるという状況であった。

検出した這構は弥生時代後期から古墳時代後期迄の竪穴住居跡17棟、掘立柱建物5棟、溝状這構10条、土坑8基などである。北側の包含層を撤去した後にはピットや溝を検出している。

這構の時期は出土遺物から弥生時代後半から奈良時代迄の時期であり、遺跡の主要時期は弥生時代後半から古墳時代前期前半である。遺物は包含層・住居跡を中心にコンテナ26箱出土した。遺物の種類としては、弥生上器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の須恵器、中世の陶器・青磁などがあり、他には旧石器時代のナイフ形石器をはじめ石器、鉄器、玉類などが出土している。

調査方法としては第2次調査の基準坑を基に10m毎のグリッドを設定し、第2次調査区と同面の統一が出来るようにしている。這構の番号と遺物の取り上げについては、第2次調査区の方法を準用して行った。



2. 調査の記録

1) 積穴住居跡

住居跡3001 (Fig.44・47)

D 4 区で検出した積穴住居跡である。非常に残りが悪く、部分的に残る周壁溝と柱穴しか残っておらず、図上復元したものである。形態的には 4 本柱の古墳時代後期の積穴住居跡と考える。復元規模は約 $4.80\text{m} \times 4.25\text{m}$ 、床面積は 20.4m^2 を測る。主柱穴は深さと位置関係から P 1 - P 4 とした。いずれも円形の柱穴で、直径は $20\sim30\text{cm}$ 、深さ 50cm を測り、柱穴間距離は P 1 - P 2 、 2.30m 、 P 2 - P 3 、 2.40m 、 P 3 - P 4 、 2.25m 、 P 4 - P 1 、 2.30m である。形態的に竈を伴っていたと考えるが、その粘土の痕跡や、焼土面は確認出来なかった。

出土遺物は周壁溝及び主柱穴から遺物が若干出土している。主に弥生土器から土師器の細片が少量であるが、図示出来るものは少ない。

2 は住居跡内ビット 1107 から出土した製塩土器の脚部分的片。本来はワイングラス型を呈す。中実の脚部で、外面指圧痕が明瞭に残る。焼きは良く、外面色調は橙色、胎土は精良で最大 3mm の粗砂粒や金雲母を少量含む。

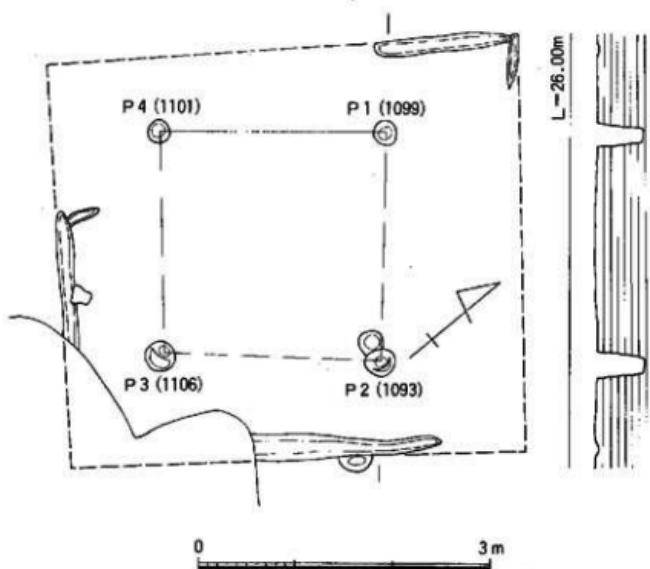


Fig.44 住居跡 3001 (1/60)

住居跡3002 (Fig.45・47, PL. 30・46)

E 4 区で検出した建物3004と重複している住居跡である。南東側と北西隅は未調査区にかかり、全容は確認出来なかったが、長軸方位を N-36°-W に取る長方形プランの住居跡である。推定規模は長径約 5.5 m、短径約 4.35 m、床面積 23.93 m² を測る。残りは悪く、床面下しか残っていない。焼失家屋であったようで、床面には住居中央部を中心炭化物を検出。焼土ブロックが分布していた。しかし建築材などの炭化材は確認出来なかった。周壁溝は東壁と南壁に部分的に認められた。住居の柱は 2 本で位置関係と規模から見て 1 基は P 1 (ビット 1535) が妥当と考えるが、もうひとつは確認出来なかった。この柱穴の埋土は暗褐色又は黒褐色粘質土で固くしまっていた。また南壁中央には屋内土坑 1660 が確認された。この土坑は長径 1.2 m、短径 0.9 m、最大深 0.36 m を測る。平面プランが不定形のものである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、土器片や小礫が南側から流れ込むような形で出土している。この土坑の北壁下には円形のすり鉢状に凹む部分があり、この部分に梯子をかけた出入口部と考えられる。この土坑の東側から北へ 2.2 m 程伸びる幅 15 cm 程の小溝がある。

焼上ブロックや炭化物を撤去すると甕 1 が横倒しの形で、その下部のみが検出された。この甕はちょうど住居のほぼ中央にあり、焼上・炭化物の下から出たという事で、炉体がわりに使われたものかも知れない。床面は地山の凹凸をならすために貼床されていた。

出土遺物は削平が著しかった為、床面出土のものではなく、炭化出来たものは屋内土坑 1660 からのものである。

1 は甕の 1/2 片で、炉壁として用いられたもの。復元口径 82.6 cm、底径 10 cm、器高 49.8 cm を測る。器壁の磨滅は著しいが外面下半に刷毛目がわずかに残る。内面は焼けたようで部分的に桃色を呈す。外面は黒斑がある。3 は小型甕で、復元口径 14.5 cm、器高 18.6 cm を測る。口縁は短く心持ち外へ開く。器表は磨滅がひどい。色調は赤褐色で胎土に粗砂を多く含む。4 は同一個体と思われる口縁部と底部片で、復元口径 25.1 cm、底径 8.4 cm を測る。いずれも器壁は磨滅し調整は不明。色調は黄橙色で、胎土は最大 4 mm 程の石英・長石粒を多量混入する。5 は甕口縁部 1/5 片で復元口径 21.5 cm を測る。く字状の口縁部で、磨滅は磨滅の為不明。色調は暗褐色で、胎土に粗砂を多く含む。6 は長胴の甕の胴底部分片。最大胴径約 22 cm を測る。磨滅がひどいが胴外面に粗い刷毛が残る。外面色調は明橙色で、胎土に 1 ~ 3 mm 内外の砂粒を多く含む。7 は甕の底部 1/3 片で復元底径約 10 cm を測る。色調は淡橙色で、胎土に粗砂・雲母片を多量に含む。8 は高环脚部 1/2 片。器壁は磨滅がひどいが内面にしづら痕が残る。色調は明褐色で、胎土に最大 3 mm 程の砂粒を多く含む。9 は鉢 1/3 片で底部はやや尖り気味と思われる。復元口径 14.4 cm を測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は黄橙色、胎土に粗砂を多く混入する。7 は床面出土、他は土坑 1660 出土である。

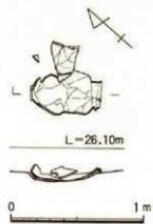
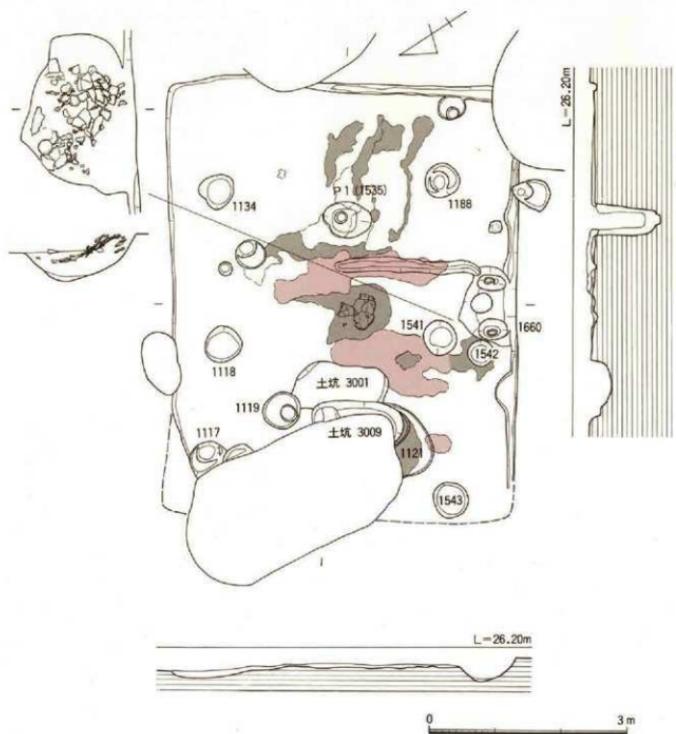


Fig.45 住居跡 3002 (1/60・1/30・1/4)

炉址及び出土遺物

住居跡3003 (Fig.46, PL. 30)

E 5 区の段落ち上面、樹木と樹木の間で検出した住居跡。住居跡3004と切り合う事や、削平がひどい為、壁のみが残り、全体の形状は不明。床面はピットや浅い不定形状の落ち込みがあり凹凸がある。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。主柱穴等は不明で、壁溝も確認出来ない。

出土遺物は埋土及びピットから弥生土器片が少量出土しているが、図示出来るものはない。

住居跡3004 (Fig.46, PL. 30)

E 5 区で検出した住居跡で大半が段落ちにかかり消滅するが、残存部では西側にベッド状遺構が残る長方形プランの住居跡と考えられる。ベッド状遺構の幅は約 1 m で壁下には周溝が巡る。ベッド状遺構の南側部分には炭化物・焼土ブロックが少量散布していた。主柱は 2 本柱と考えられるが、1 基については段落ドのピット 1151 が相当する可能性があり、これから住居跡を復原すると長さ 6 ~ 6.5 m、幅 5.2 m の東西長軸の長方形プランの住居跡と推定出来る。

出土遺物は埋土を中心に弥生土器の細片が出土しているが量は少なく、図示出来るものもない。

住居跡3005 (Fig.48*49, PL. 32*46)

F 3・4 区の段落上面で検出された住居跡3006と切り合う住居跡である。保存樹木間中の調査区でそれぞれの住居の全体の規模は判らない。一応住居跡3005が段落際に近い住居跡、住居

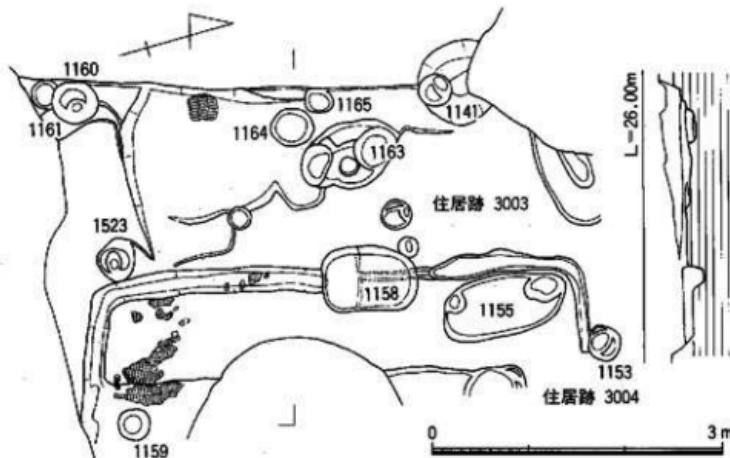


Fig.46 住居跡 3003・3004 (1/60)

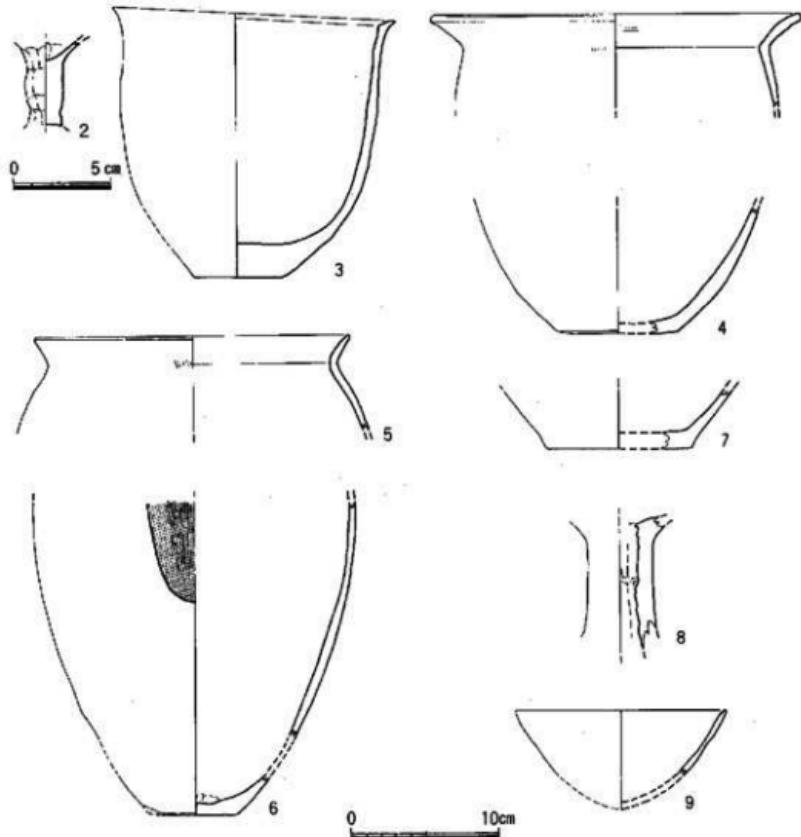


Fig.47 住居跡 3001・3002 出土遺物 (1/3・1/4)

跡3006がその外側の住居跡とする。確認したのは周溝が巡るコーナー部分であるが、西壁土層から見れば住居跡3005の方が後出する住居跡であり、他の住居跡と同様に東西主軸を取る西壁にベッド状遺構を持つ住居跡の可能性が強い。調査区北壁沿いに炭化物・焼上ブロックがあり、その下に直径70cm、深さ50cm程のピットがあったが、住居関係から見て、住居の支柱の可能性は少ない。支柱は調査区外にあるようでは判らなかったが、炉跡も段落下に3ヶ所の焼土面があったが、どれが妥当なのか特定出来ない。

出土遺物は埋土中から弥生時代後期の土器片が多量に出土している。上層で発見された形ではほぼ復元完形の高杯10が一個体出土している。また砥石片も1点出土している。

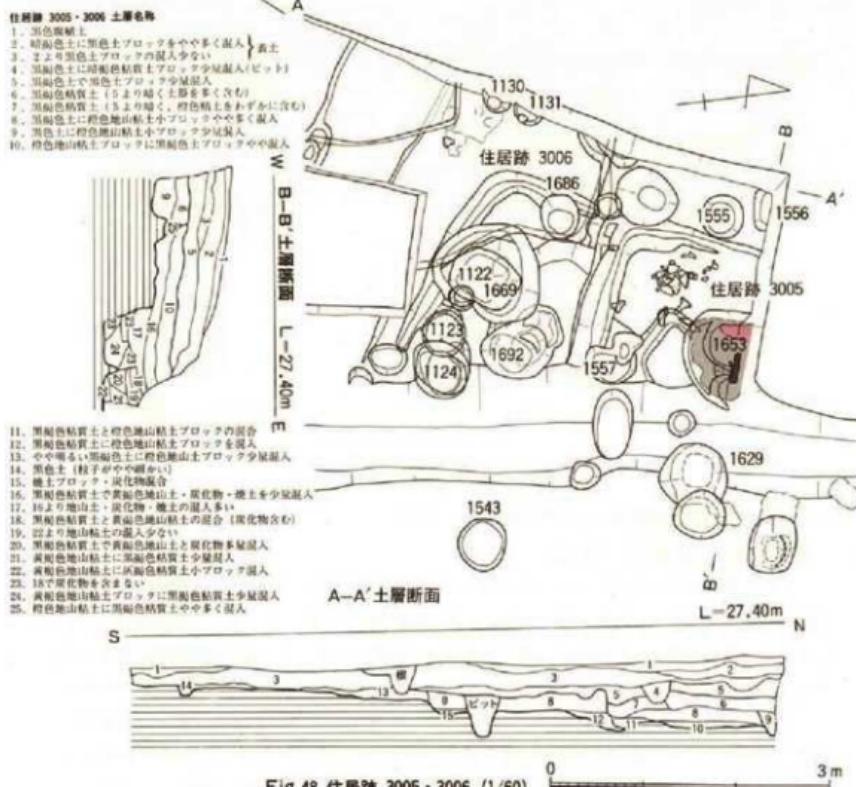


Fig. 48 住居跡 3005・3006 (1/60)

10は弥生時代後期後半の高坏である。脚端部を欠損する大型のもので、口径は30cmを測る。器壁は磨滅するが、外面刷毛が残る。坏部の口縁部と底部の壇に段を持ち、口縁部が外へ開く器形。色調は橙色で、胎土に3mm以下の砂粒を少量含む。

住居跡3006 (Fig. 48)

段落上面住居跡3005外側で検出したもので、南壁近くに炭化物・焼土ブロックが残る。形態ははっきりしないが、住居跡3005の南側にある周溝が巡るコーナー部分を含めた南北方向に長軸を取り両側にコ字形もしくはL形でベッド状遺構が巡るものかも知れない。主柱は2本柱と考えるが、炉跡と合わせて特定出来ない。埋土は黒褐色粘質土に橙色地山小ブロックをやや多く混入、床面は少し汚れる。

出土遺物は弥生土器の細片が出土しているが、図示出来るものはない。しかし住居跡の形態

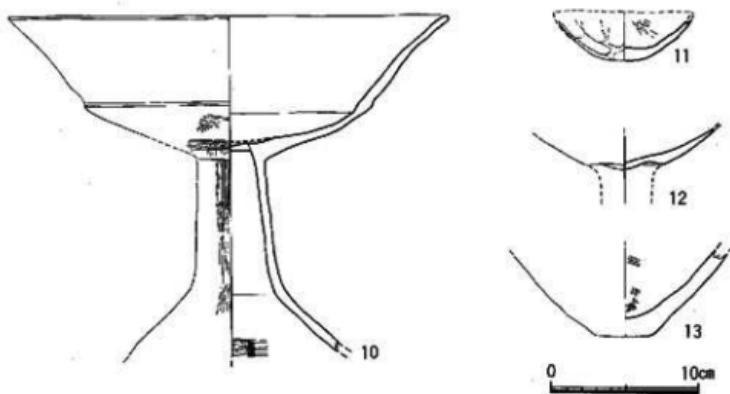


Fig. 49 住居跡 3006・3007 (1/4)

からみて弥生時代後期後半のものであろう。

住居跡3007 (Fig.49・50, PL.30)

F 4区で検出した主軸方位をN-90°-Wの東西方向に取る長方形プランの住居跡である。南側は住居跡3008に切られる。残りは悪く床面と周壁溝位しか残っていない。規模ははっきりしないが、長径約8m、短径約4.5m程と推定する。主柱穴は2本で、その柱間距離は3.8mを測る。またその中央部には炭化物が詰まった凹形の炉(1229)があった。この炉は直径約80cm位で、炭化物を撤去すると厚さ5cm程の焼けた焼土面があった。また住居跡3002と同様南壁中央部には0.95×0.7m、最大深25cmを測る不整形方の上坑があり、その堆土は黒褐色粘質土を主体とする。中には土器の細片と10~20cm位の小転碟があった。周壁溝は南壁沿いに残るのみで、またベッド状遺構は本来両側にあったと思われるが、その痕跡も確認出来なかった。時期としては出土遺物から弥生時代後期後半であろう。

出土遺物は床面及び屋内土坑1232や炉1229から弥生時代後期後半の土器片が出土している。

11は鉢と思われる底部片。口縁部を欠失するが、推定で約10cm弱を測る。外面指おさえ仕上げで、内面は刷毛目が残る。外面色調は褐色で、胎土は1~4mmの砂粒を多く含む。12は高壺の壺底部片。脚部との接合面が残り、器壁は著しく削減が著しい。色調はにぶい褐色で、胎土に砂を多く含む。13は壺の底部小片で底径3.8cmを測る。内面刷毛がわずかに残る。色調はにぶい褐色で胎土に3mm以下の砂粒と赤色粒子を含む。

住居跡3008 (Fig.51, PL.31.)

F 5区で検出した住居跡3007を切る長方形プランの住居跡。南半部が保存樹木にかかり全体

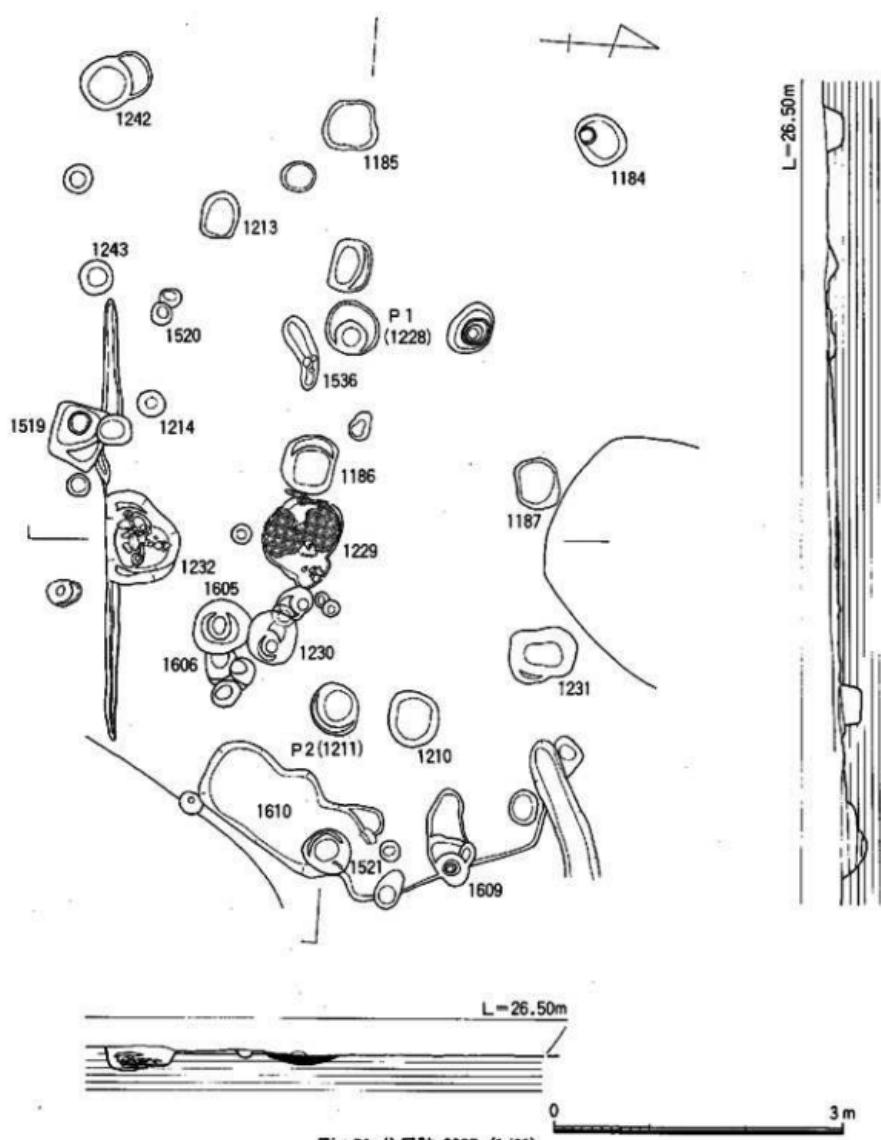


Fig.50 住居跡 3007 (1/60)

の規模はわからないが、主軸方向が住居跡3002・3007と異なり、住居跡3001に似る。規模は長軸長3.3m以上、短軸長2.9m、残存壁高約20cmを測る。埋土は黒褐色から黒色上で、炭化物を混入していた。西側床面は粘土をテラス状に貼り付けており、その上面には炭化物・焼土ブロックが散布しており、また西壁沿いには周溝も巡っていた。時期は遺物から見て弥生時代後期後半頃のものか。小型の住居跡と思われる。

出土遺物は弥生後期の甕の底部の粗片などが中ビニール袋1個程度で、染付磁器が1点混入していた。

住居跡3009 (Fig.52・54, PL. 33・46)

H4区で検出した住居跡3010に切られる住居。中央部は試掘トレンチで切られ、東側は段落にかかり消滅する。南側については住居跡3010の床面を振り下げる後確認した。この住居の現存規模は長径4.5m以上、短径5.0mを測る。主柱穴は2本でP1(ピット1515)、P2(ピット1517)が相当し、柱間距離は3mを測り、その中央に直径60cmの円形の浅く凹む炉があり、その中には炭化物が詰まり、底面は焼けていた。この炉を中心として反転復元すれば住居の長径5.6mと推定出来る。この住居の各壁下には溝が巡り、また西側には地山を削り出したL字形ベッド状遺構がある。南壁中央には50×50cm位の不整円形状の小土坑があり、これが入口と考える。床面北側ベッド下には焼土や炭化物が散布していた。

3009号住居と3010号住居跡の東側には別の住居跡と思われる周壁溝状に巡る小溝があり、更

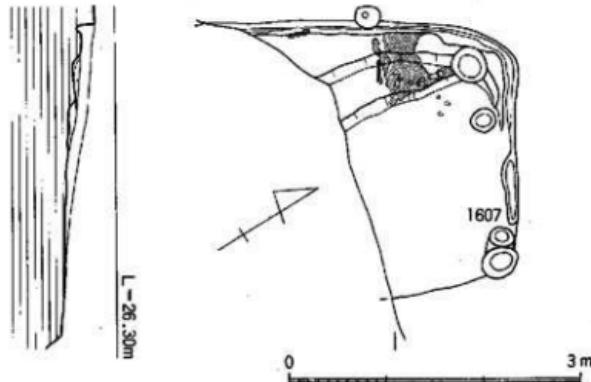


Fig.51 住居跡 3008 (1/60)

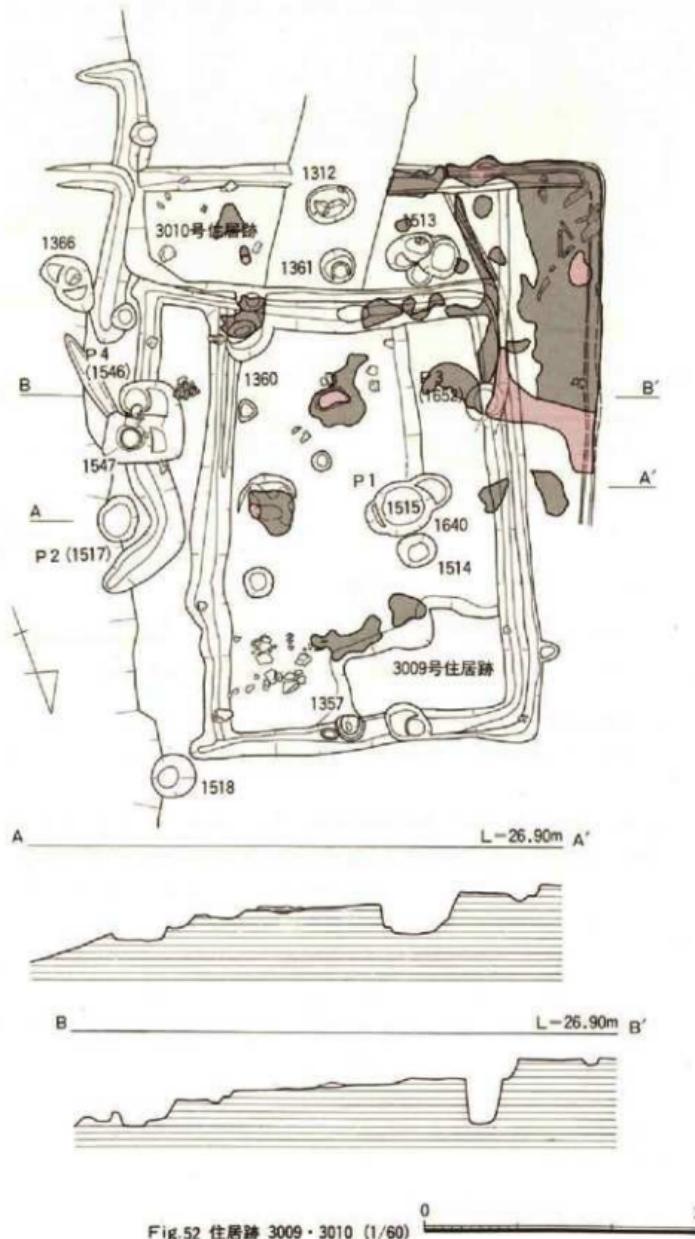


Fig. 52 住居跡 3009・3010 (1/60)

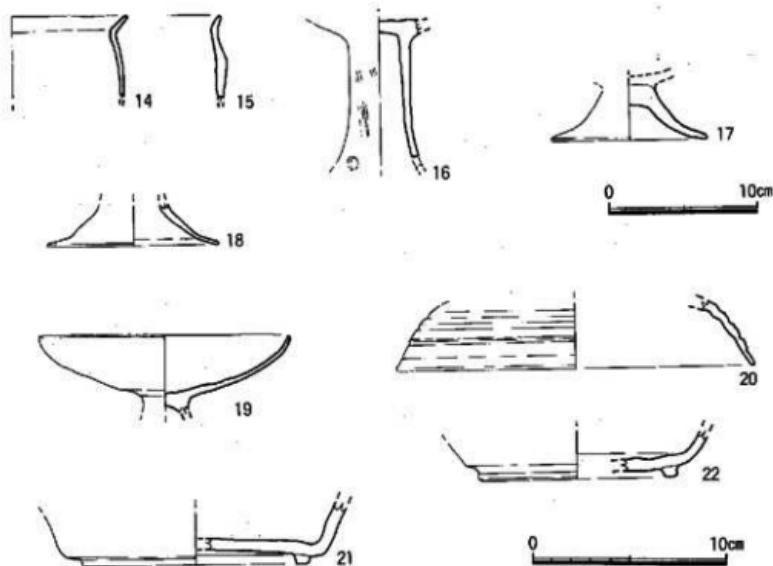


Fig. 53 住居跡 3009・3010・3014 出土遺物 (1/3・1/4)

に2~3棟住居が切り合っていたのかも知れない。

出土遺物は弥生後期後半代の土器が出土しているが、細片が多く復元図示出来るものは少ない。

14は甕の口縁部小片。復元口径15.6cmを測る。く字状を呈す口縁であるが磨滅がひどく調整は不明。外面色調は白色で、胎土は1~2mmの砂粒(石英・長石粒)を含む。床面ピット1514出土。15は鉢の小片。肩が張り短いく字状口縁を持つもの。器壁は磨滅し調整不明。色調は暗淡橙色で、胎土に1~2mmの砂粒を多く含む。16は高環脚部片。磨滅がひどいが外面刷毛がわずかに残る。色調は橙色で、胎土に1~2mmの砂粒と金雲母を含む。23は大型の壺口縁部と胴部片である。口縁部は内傾する袋状口縁部を呈す。外面色調は淡褐橙色を呈し、胎土に最大5mm程度の粗砂粒を多量に含む。24は大型の甕の口頸・胴部片。口径は51cmを測る。頸部に一条、胴部下半にも一条のコ字状の突帯が巡る。器壁は磨滅が著しいが、内外面に刷毛がかすかに残る。

住居跡3010 (Fig.52~54, PL. 33~46)

3009を切る住居跡である。焼失住居のようで全面に炭化物・焼土ブロックが散布し、建築材らしき炭化物も見られた。北壁は削平とトレンチに切られわからぬが、規模は3009とはほぼ同

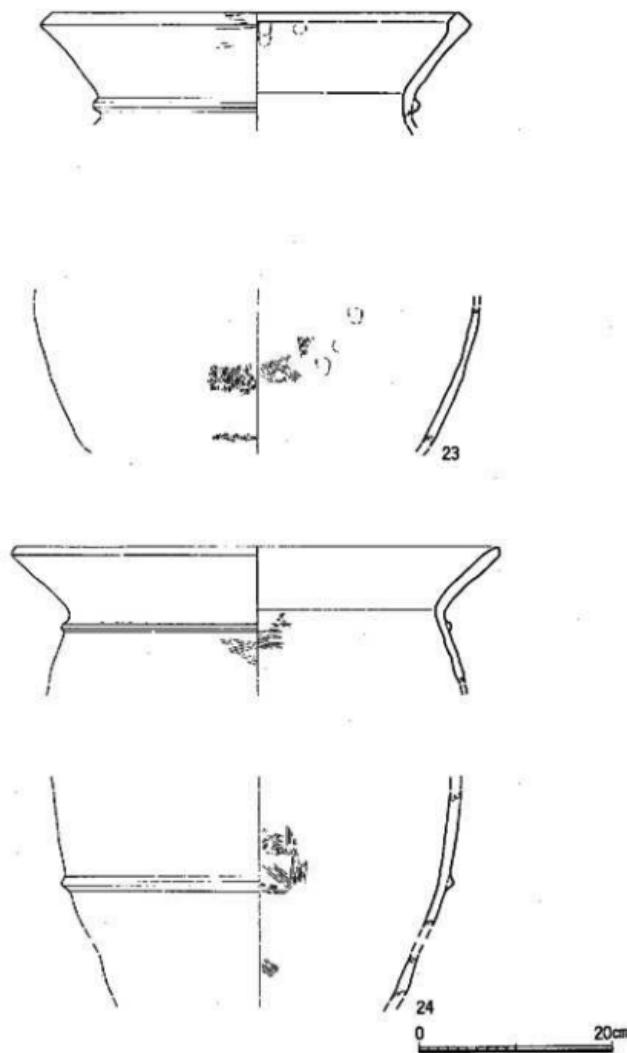


Fig.54 住居跡 3009 出土遺物 (1/6)

規模と考え、長辺5.2m以上、短辺5mを測る。西側にはベッド状造構があり、主柱は2本P3（ピット1652）、P4（ピット1546）であり、その中央部には25×36cmの炉があり、南壁中央部には出入口部と考える55×40cmの橢円形ピットがあった。

出土遺物は弥生時代後半でを中心とする土器片が出土している。大半が細片で図示出来るものは少ない。また鉄器片や凹石・軽石製の浮子なども出土している。

17は台付鉢の脚部1/2片。復元脚径10.6cmを測る。器表面は磨滅が著しい。色調は淡白橙色を呈し、胎土に1~3mmの砂粒を多く含み、黒雲母もわずかに含む。18は高坏の脚部1/2片。磨滅がひどいが内外面刷毛がかすかに残る。色調は暗灰から褐色で、胎土に最大5mmの粗砂粒を多く含む。19も高坏の坏部片で口径17.0cmを測る。丸底の体部から口縁が内湾気味に立ち上がる器形である。器壁はナデである。色調は暗褐色を呈し、胎土に最大5mm程の砂粒や金雲母片を少量含む。

住居跡3011 (Fig.55)

I 4区で検出した住居跡。削平がひどいうえに、西側は試掘トレンチ、東側は段落ちで削平され、北側は住居跡3010にかかり、全体の規模は不明である。南壁沿いに焼土面があり、また

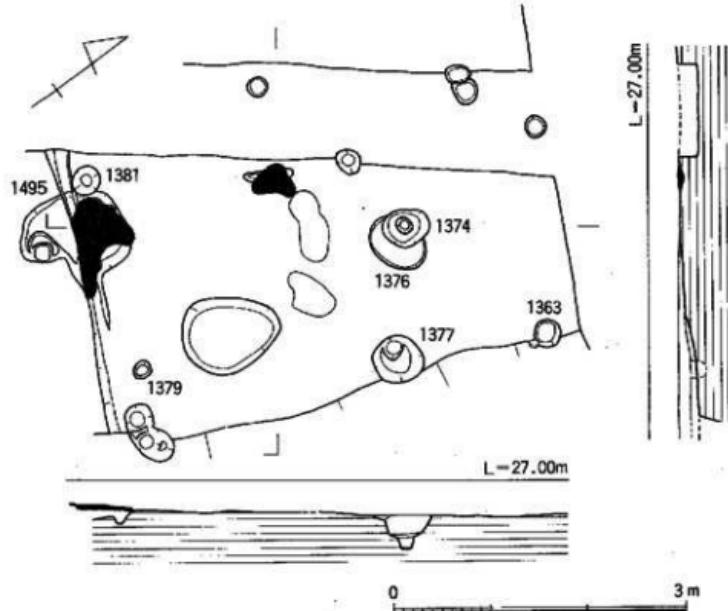


Fig.55 住居跡 3011 (1/60)

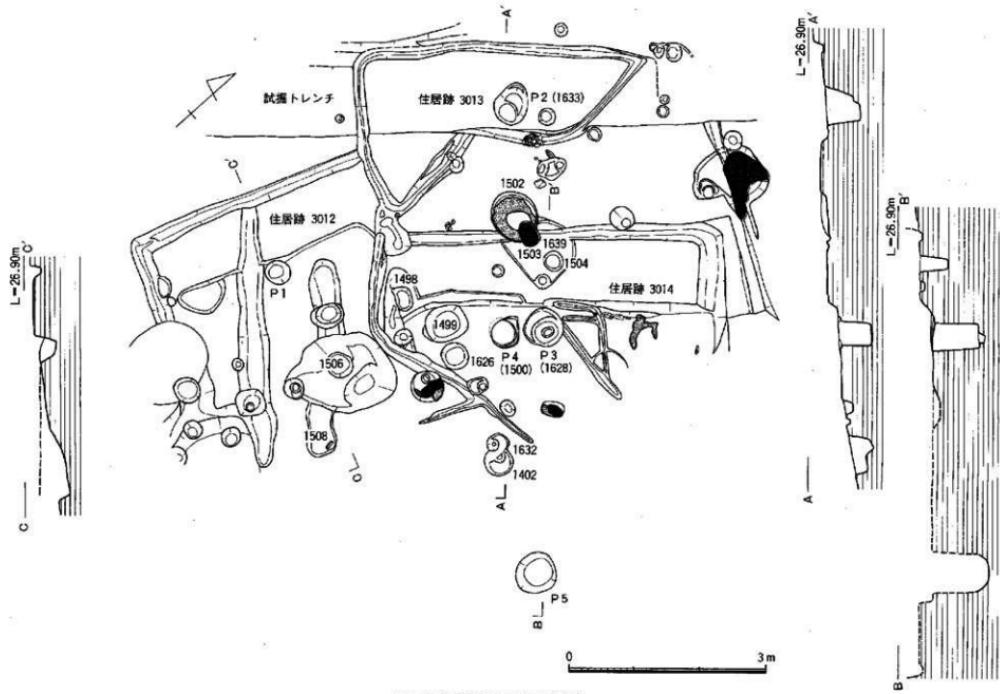


Fig. 56 住居跡 3012～3014 (1/60)

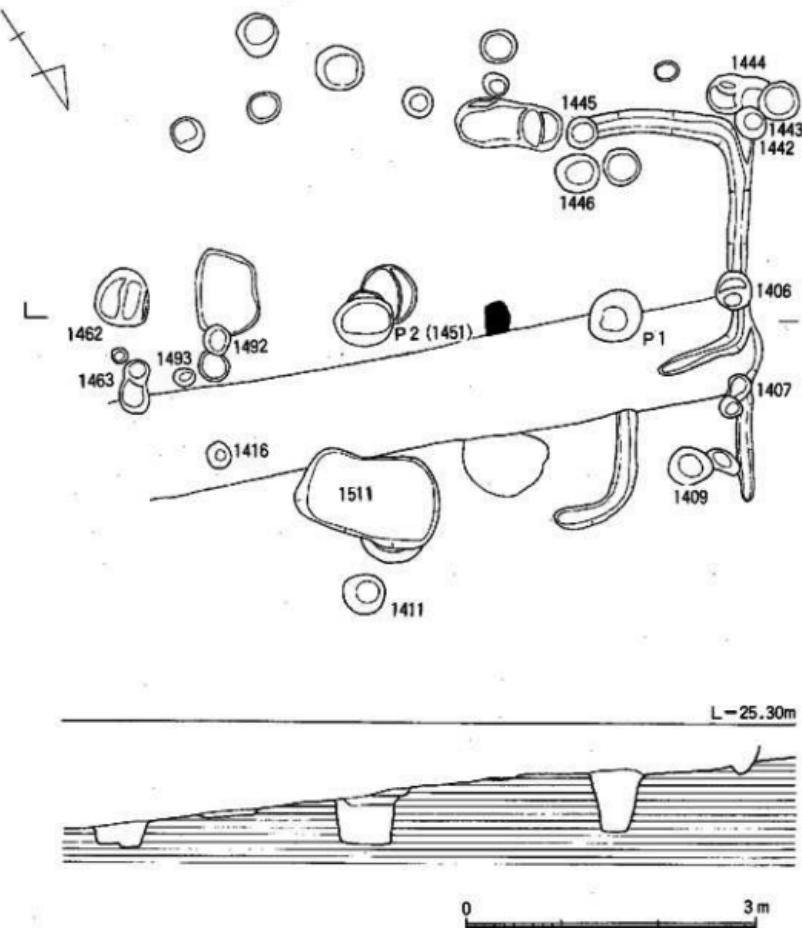


Fig.57 住居跡 3015 (1/60)

床面中央にも弱い焼土面がある。また南壁下には一部壁溝が残る。主柱穴は確認出来なかったが、床面は汚れた黄褐色地山粘土であった。

出土遺物は少なく弥生土器から土器器の細片が中ビニール袋1袋分出土している。その中に奈良時代の壺身の口縁部らしき細片が一点出土している。

住居跡3012 (Fig.56, Pl. 34)

I区南側で検出した住居群の一つ。住居跡3013・3014と重複し、かつ東側は段落ちし消滅し

ているので、全体の規模ははっきりしない。各住居跡の先後関係は切り合い関係から3012→3014→3013と考えられ、住居跡3012が一番占い。住居跡3012はそれらの一番南側の住居で、残存規模は長軸長3m以上、短軸長3.8m以上を測る。床面は溝3012などに切られるなど残りは良くない。主柱は2本柱であるが、西側のP1しか確認出来なかった。西側床面には幅1m程ベッド状遺構が付き、西壁と南壁下には周溝が巡る。埋土は黒褐色粘質上で地山ブロックを混入する。

出土遺物は埋土を中心に弥生土器や土師器、余良時代の須恵器片を含むが、量的にはそれ程多くない。

住居跡3013 (Fig.56, PL. 34)

一番新しい時期の住居跡で、西壁トレンチで切られるなど残りは良くない。主柱は2本で、P2(ピット1622)、P3(ピット1500)であり、その中心部には60×80cmの楕円形状の炭化物・焼土を含む床面が焼けた炉がある。この炉を中心として主柱を中軸として反転復元すれば、住居の規模は長径5.4m、短径4.4mと復元出来る。周壁は西壁と南壁に巡るが、周溝から続く性格不明の小溝がある。ベッド状遺構は本米西壁に沿ってP2の西側にあったと考えるが、試掘トレンチで消滅したのか確認出来なかった。南壁沿い炉と向かいあう位置に小溝に接する不定形状の70×40cm程のピットがあり、これが出入口のピットかも知れない。またP2寄りの床面には炭化物を含んだ焼土がある。

出土遺物は埋土や床面から弥生時代後期を中心とする土器片が中ビニール2袋程出土しているが、図示出来るものはない。

住居跡3014 (Fig.53-56-73, PL. 34)

3013号住居跡に切られるもので、大半は段落ちで削られた為、ベッド状遺構の部分しか検出出来なかつたが、確認状況から見て、他住居と同様に東西に長軸を持つ住居である。主柱は2本柱で、P4(ピット1628)とP5が対応すると考える。この柱間距離は3.6mであり、中心点から反転復元し、規模を復元すれば、直径6.6~6.7m、短径は5.4m程と考える。西壁沿いには幅1m程のベッド状遺構があり、西壁下には周壁溝も巡る。この住居の床面にも住居跡3013

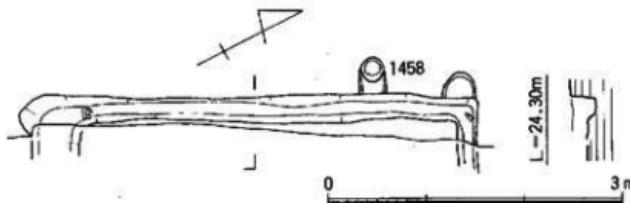


Fig.58 住居跡 3016 (1/60)

でも見られた性格不明の小溝がある。床面には炭化物が散布していた。

出土遺物は埋土中から弥生土器を中心として中ビニール袋1袋分出土している。他に奈良時代の須恵器が上層から小量出土するが、量的には少なく、また石臼丁などの石器や石錐などが出土している。

20~22は須恵器で、いずれも混入品である。20は蓋小片で復元口径18.4cmを測る。内外水引痕が明瞭に残る。色調は暗青灰色を呈す。21・22は高台付壺底部片。21は1/4片・22は1/6片で、復元高台径は11.6cm、10.2cmを測る。色調は淡灰色、灰白色である。58は弥生土器の大型の甕の小片で、口径は復元で49cm位である。器壁は磨滅が著しく調整不明。色調は淡黄色で、胎土に直径3mm以下の砂粒を多く含む。

住居跡3015 (Fig.57)

H・15区にかけて検出して主軸を東西方向に取る長方形プランの住居跡。残りが悪く、周壁溝とピットのみしか残らないが、それらの位置関係から全体規模を復元すれば、長辺約5.5m、短辺4.4m程となる。壁溝は西側高所部に残るが、それからベッド状造構が両側もしくは片側についたものと考える。主柱は2本でP1とP2(ピット1451)が相当し、その中間に25×35cm程の橢円形の焼土面があり、炉と考える。主柱の直徑は柱痕跡から20cm程と推定出来る。

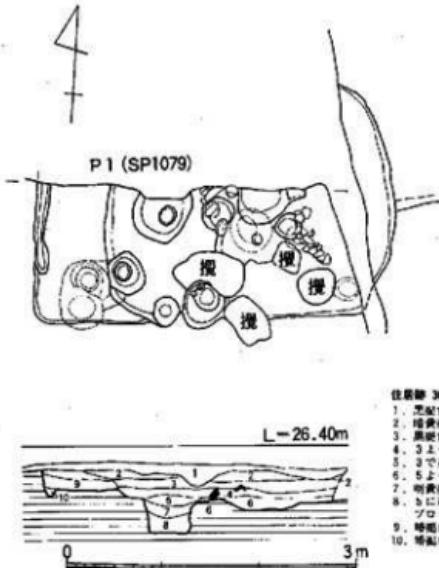


Fig.59 住居跡 3017 (1/60)

出土遺物は周壁溝と柱穴から上器片が10数点出土しているが、図示出来るものはない。

住居跡3016 (Fig.58・60, PL. 36・47)

I 6 区で検出したが、大半が東側境界地にかかり、全体の規模は不明。検出したのは周壁溝のみである。その周壁溝から幅は4.6mを測る。また主軸方向は住居跡3009などと同じである。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物は弥生土器から土師器の細片が中ビニール1袋出土している。また鉄鏃片なども出土している。25は須恵器の壺1/3片。復元口径13.3cm、器高5.1cmを測る。体部は水引き成形で外底部は回転ヘラ削り。色調は灰白色で、胎土に最大3mm程の砂粒を含む。焼成は甘く軟質。

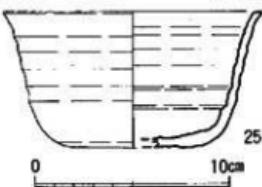
住居跡3017 (Fig.59・60, PL. 36・47)

D 6 区で検出した住居跡。北側と東側が境界にかかり全容はわからないが、第2次調査区に延長が椭円形状の土坑状の遺構として確認されている。これから推定して規模は長径3.7m、短径2.4m余りの小形の平面形態が長方形の住居跡と考える。木の根などによる搅乱をかなり受けるが、壁高は20cm程残り、西側に周壁溝と幅60cm程の地山削り出しのベッド状遺構がある。主柱は2本でP1(ピット1079)が相当する。炉跡は確認されていないが、第4層が炭化物を含み、このあたりが炉跡かも知れない。

出土遺物は埋土中から弥生土器片が中ビニール2袋位出土している。

26は弥生後期中頃の壺で、破片で復元した。口縁部は直立気味に外反するもので胴部は丸味を持つ。復元口径21.7cm、復元胴径27.2cm、器高28.0cmを測る。色調は茶褐色で、胎土に最大5mmの砂粒を多量に含む。

住居跡 3016



住居跡 3017

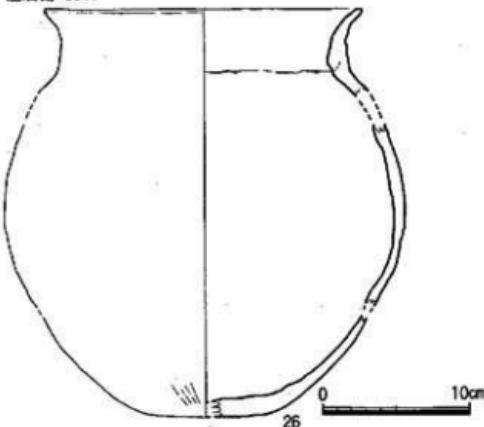


Fig.60 住居跡 3016・3017 (1/3・1/4)

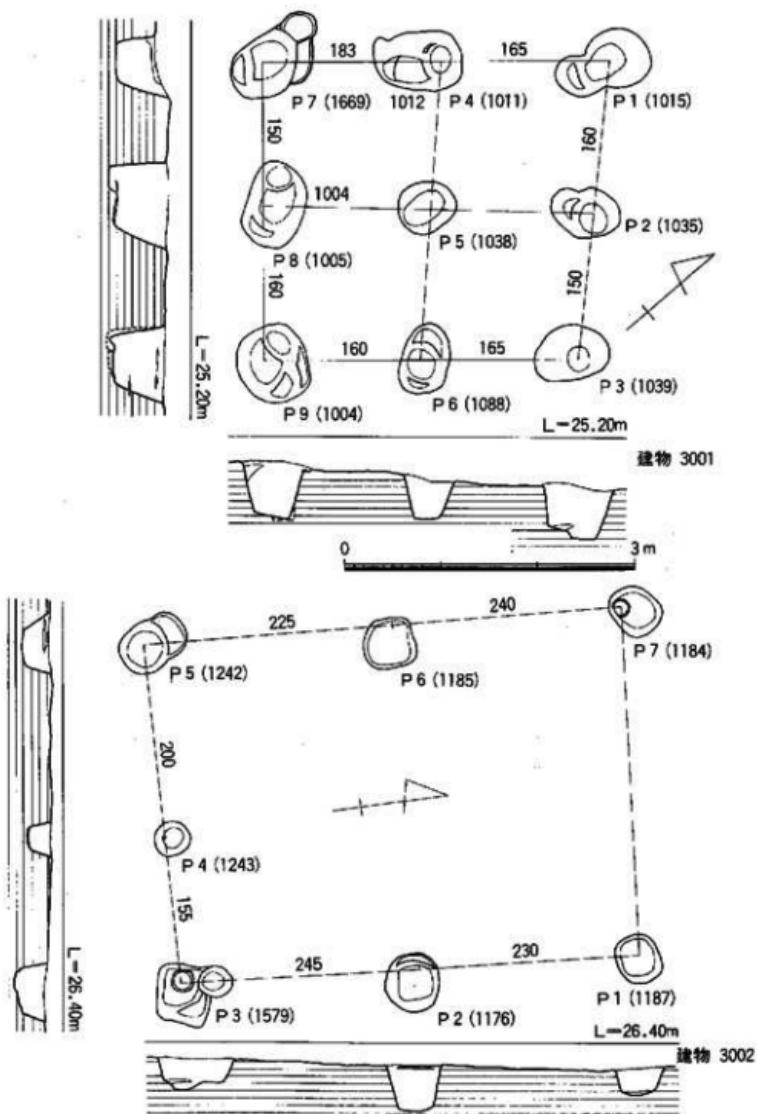
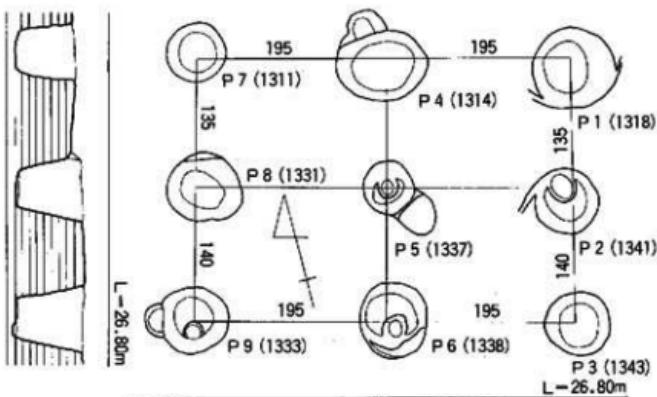
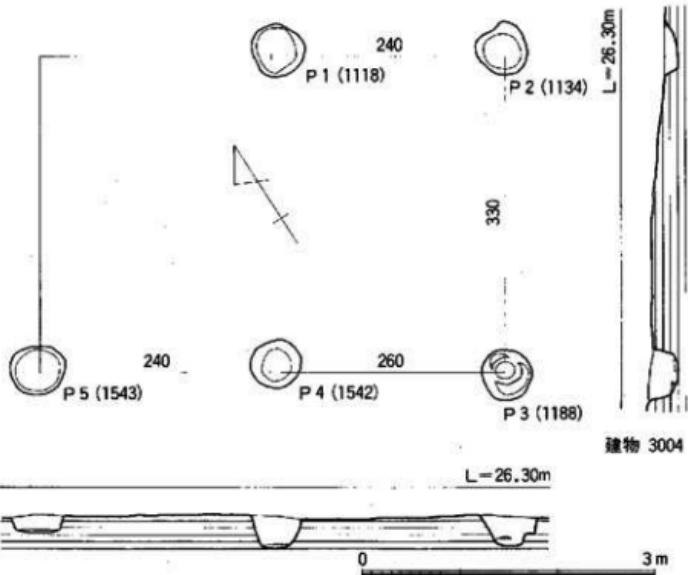
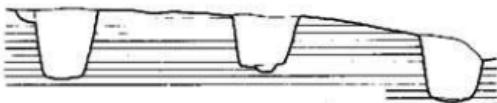


Fig. 61 建物 3001・3002 (1/60)



建物 3003



建物 3004

$L = 26.30m$

0 3 m

Fig.62 建物 3003・3004 (1/60)

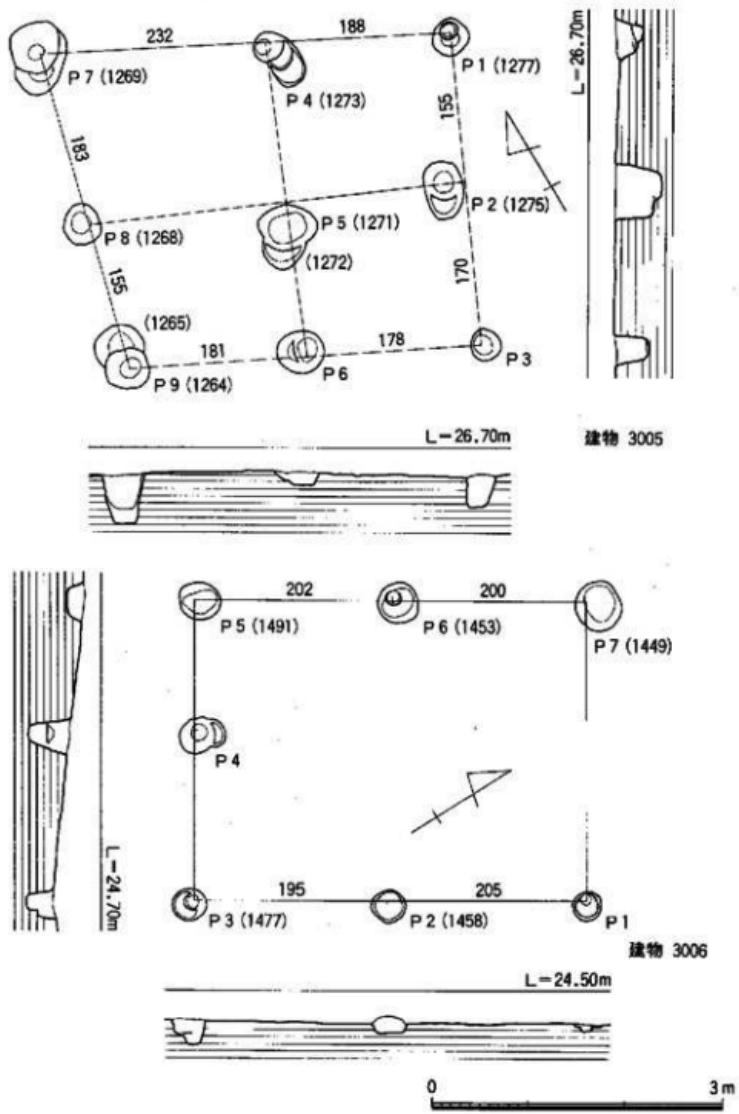


Fig.63 建物 3005・3006 (1/60)

2) 据立柱建物

建物3001 (Fig.61, PL.37)

I区調査区北側D4・5区で検出した主軸方位をN-53°-Wに取る2間×2間の総柱建物。規模は梁行全長3.10m、桁行全長3.25m、3.58m、床面積は10.54m²を測り、平面プランとしてはかなりいびつである。各柱穴は中央床東の柱穴を除いて抜痕が残る。各柱穴は比較的大きく深くしっかりしている。柱径は柱痕跡から25~30cm位か。柱穴埋土は暗褐色土又は黒褐色土で地山ブロックを含んでる。

出土遺物は各柱穴から弥生土器・土師器・須恵器片を含むが、図示出来るものは少ない。

27はP7(ピット1007)から出土したⅢa期位の須恵器環身口縁部小片。立上りは直に近く、口端部内面に段が付き、調整はナデ。色調は灰白色で、胎土に細部を含む。焼成はやや甘く軟質。

建物3002 (Fig.61, PL.37)

F4区で検出した主軸方位をN-4°-Wに取る1間×2間の南北棟である。3007号住居跡を切る建物である。梁間全長3.55m・3.65m、桁行全長4.75m・4.95m、床面積は17.46m²を測る。南側梁間には中間に他の柱穴より一通り小さく、浅い円形の間柱があり2間となる。柱穴プランは円形又は方形で、東側の柱穴が西側に比べてやや深い。柱穴埋土は暗褐色もしくは黒褐色土で地山ブロックを含む。

出土遺物は各柱穴から弥生土器などが出土しているが、いずれも細片で図示出来るものはない。

建物3003 (Fig.62, PL.38)

H4区で検出した主軸方位をN-67°-Wに取る東西方向の2間×2間の総柱建物である。梁行全長2.75m、桁行全長3.90m、床面積は10.73m²を測る。柱穴プランは円形で、中央東柱の柱穴を除いて、径は65~95cmと大きく、しかも60~80cmと深いが、一般的に東側柱穴の底面レベルは西側柱列に比べて深い。柱径は痕跡から15~20cm位であろう。柱穴埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物は各柱穴から弥生土器から土師器、須恵器の細片が出土している。図示出来るものは少ないが、時期を表わすものを示す。

28はP6(ピット1338)出土の須恵器の環身口縁部細片。Ⅲb期からⅣa期位のものである。内外面調整ナデ。外面部調は灰褐色で自然釉がかかる。胎土は精良。25はP8(ピット1330)から出土した須恵器環身天井部1/4片。天井部は回転ヘラ削りで内面はナデ。ろくろ回転は

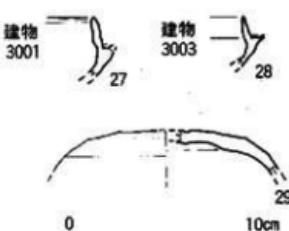


Fig.64 建物 3001・3003

出土遺物 (1/3)

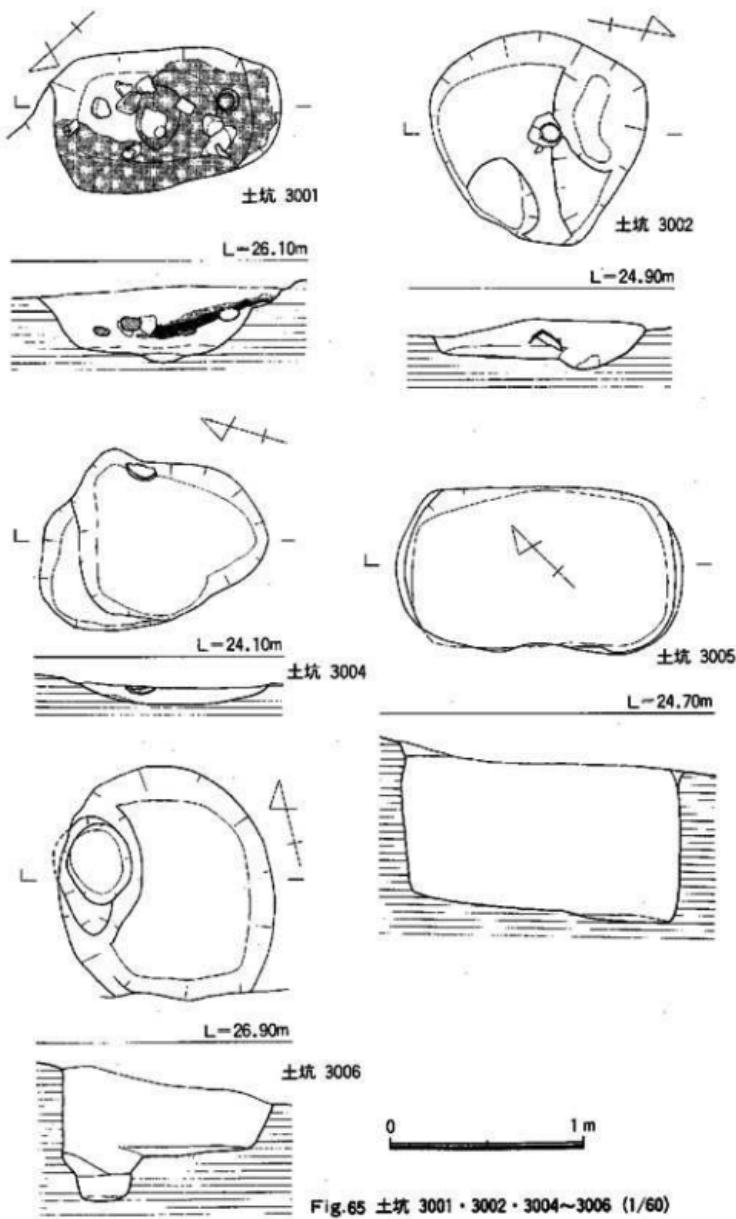


Fig.65 土坑 3001・3002・3004～3006 (1/60)

時計回り。外面色調は灰色で、胎土に最大3mm砂粒を多く含む。

建物3004 (Fig.62)

E4区、3002号住居跡上面で検出した主軸方位をN-57°-Wに取る1間×2間の建物。方向的には3001号建物に近い。規模は梁間全長3.30m、桁行全長4.80m、床面積は15.84m²を測る。柱穴プランは円形又は梢円形で、直径55cm前後、深さは15~35cmと余り深くない。柱径は柱痕跡から15cm前後か。埋土は黒色もしくは黒褐色土である。

出土遺物は各柱穴から弥生土器などの土器片がかなり出土している。須恵器の細片も一点含むが、図示出来るものはない。

建物3005 (Fig.63)

G4区3003号建物北側で検出したN-63°-Wの2間×2間の純柱建物。柱筋は通らず、いびつな建物である。規模は梁行全長3.23m・3.35m、桁行全長3.59m・4.23m、床面積は12.57m²を測る。柱穴プランは円形又は梢円形で、いくつかの柱穴は柱を抜かれたようにピットが切り合う。柱穴の大きさや深さはまちまちで、柱径は痕跡から15cm位であろう。埋土は暗褐色から黒褐色土が主体である。

出土遺物は各柱穴から弥生土器や土師器などの土器片が出土しているが、須恵器は含まない。P8(ピット1268)から鐵鎌片が1点出土している。

建物3006 (Fig.63)

I区の南東隅、I5・6区で検出した主軸方位をN-33°-Eに取る2間×2間の建物。規模は梁行全長3.10m、桁行全長4.05m、床面積は12.56m²を測る。柱穴プランは円形で、大きさは30~50cm、深さは10~45cmと余り大きくななく、深さはまちまちである。柱径は痕跡から15cm位である。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物は各柱穴から弥生土器などの土器片が出土しているが、図示出来るも

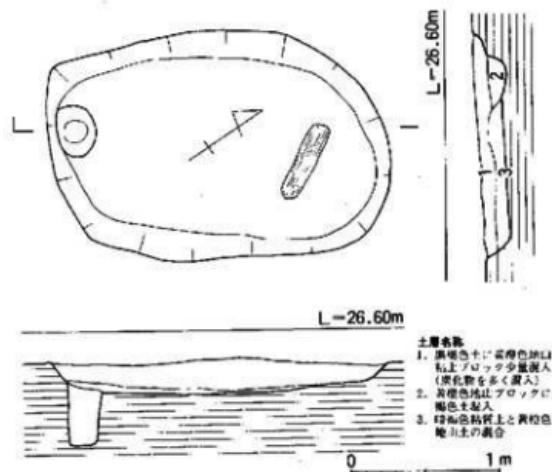


Fig.66 土坑 3003 (1/40)

のではない。

3) 土坑

土坑3001 (Fig.65・68, Pl. 35・47)

E 4 区で検出した略長方形の土坑。3002号住居跡に切り込み、また西側を3009土坑に切られている。長径1.15m、短径0.73m、最大深25cmを測る。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦で中央部がピット状に浅く凹む。埋土は黒褐色粘質土であるが、南側から中層にかけて土器片を含んだ炭化物が流れこみ、その下は黄褐色粘土ブロックとなっている。

出土遺物は弥生時代後期後半位を中心とする土器片が出土している。他には鉄器片が1点出土している。

30は小型の鉢か壺の脚部1／3片。復元胴径は9.5cmを測る。器壁は荒れ調整は不明。色調は浅黄橙色で、胎土に径2mm程の砂粒を含む。31は小型壺の胴頸部。最大胴径11.6cmを測る。器壁は荒れるが、内面に指おさえ痕が残る。色調は浅黄橙色で胎土に径3mm以下の砂粒を多く含む。32は脚台部である。器壁は荒れ調整は不明だが、指おさえ痕が残る。色調は橙色、胎土に3mm以下の砂粒を多く含む。33は大型の鉢口縁部小片。口径は推定で21cm位か。器壁は荒れ調整不明。外面色調は黒ずんだ黄橙色、胎土は3mm以下の砂粒を多く含む。34は壺の底部片。平底の小さな底部が付き、その径は6cmを測る。外面は刷毛目であるが、内面の刷毛は細かい。外面色調は橙色で、黒斑がある。胎土に2mm以下の砂粒と赤色粒子を含む。35は支脚片で、

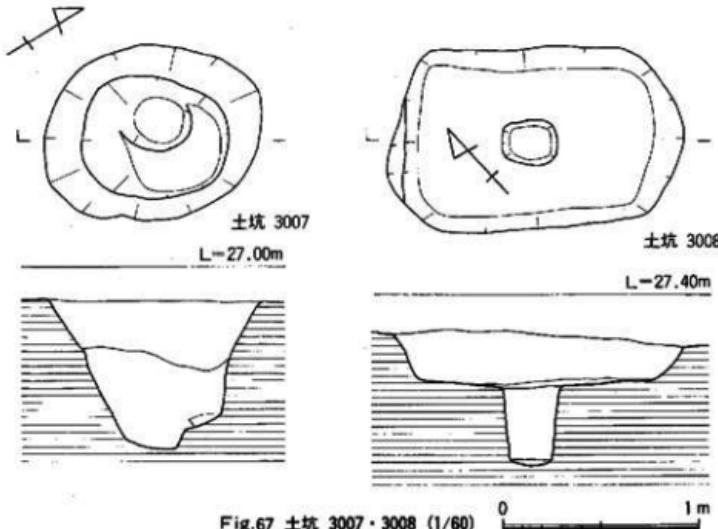


Fig.67 土坑 3007・3008 (1/60)

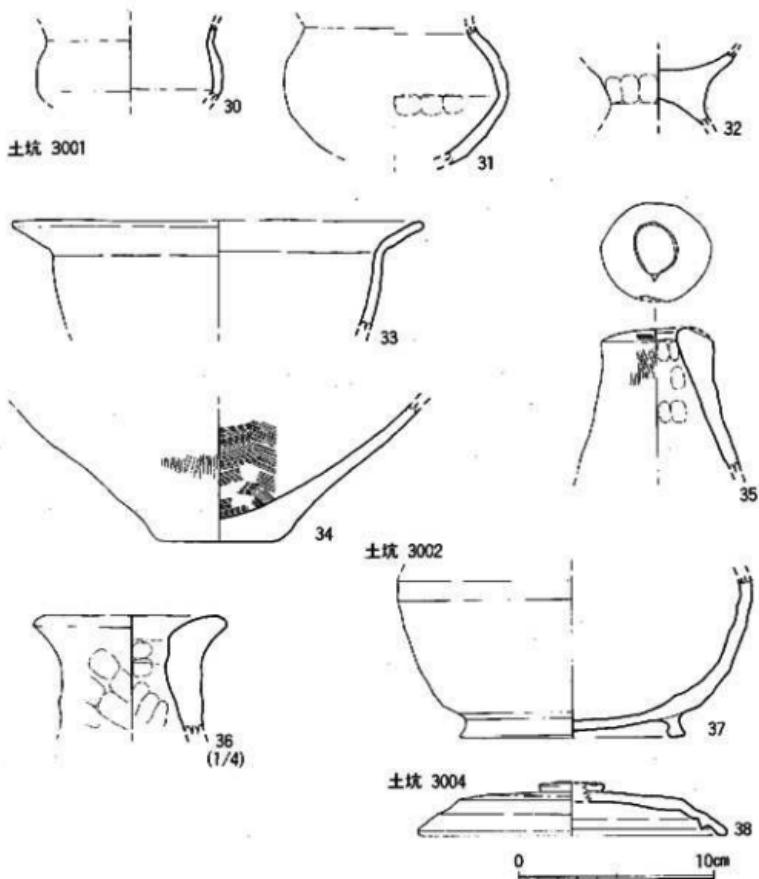


Fig.68 土坑 3001・3002・3004 出土遺物 (1/3・1/4)

受部の径が5.7cmを測る。受部中央には $2.2 \times 2.5\text{cm}$ の梢円形状の円孔があく。内外面タテ刷毛だが、内面は指おさえ痕が残る。外面色調は褐色、胎土は径3mm以下の砂粒を多く含む。36は器台の受部ともいべき口縁部1／3片。復元口径11.2cmを測る。頸部のくびれは小さく口縁直下にあり、口縁部はやや肥厚する。内外面指おさえ痕が残る。外面色調は橙色。胎土に1～4mmの粗砂粒を多く含む。

3002土坑 (Fig.65-68, P.L. 36-47)

調査区東側のG 6区で検出した隅丸三角形状の土坑。長径1.13m、短径1.10m、最大深さ25

cmを測る。北側壁下と東側壁下が一段落ち窪む。埋土は黒褐色粘質土である。底面中央に奈良時代の長頸壺の底部片が伏せた状況で出土しており、この土坑の時期を示すものである。

出土遺物は弥生土器から土師器などの土器片が小ビニール1袋と少量で、須恵器の細片が2点含まれていた。

37は須恵器の長頸壺の底部。胴部は丸味を持ち、底部にやや外方へふんばる高台が付き、その直径は11.6cmを測る。外底部は削りのちナデ。内面はナデ、外面色調は暗灰色で自然釉がかかり黒灰を呈す。胎土は直徑3mm程の砂粒を少し含む。

土坑3003 (Fig.66, PL. 38)

G 4区で検出した梢円形状の土坑。3003号建物を切っている。規模は長径2.33m、短径1.58m、最大深さ20cmを測る。底面はほぼ水平で、断面は浅い逆台形状を呈す。南側沿い中央には径25cm、深さ40cm程のピットがあり、北側には炭化材があった。埋土は黒褐色粘質土を主体とするが、底面は汚れた地山粘土ブロックである。

出土遺物は弥生土器を中心とする土器片が中ビニール1袋程出土しているが、須恵器の甕の胴部片が1点あり、古墳時代後期頃であろうか。

土坑3004 (Fig.65-68, PL. 36-47)

H 6区で検出した不定形形状の土坑。長径1.15m、短径0.93mを測る。底面は丸底気味に中央が深くなり、その深さは17cm位である。北側にはテラス状の部分がある。埋土は黒褐色粘質土で、明橙色地山粘土ブロックを混入する。

出土遺物は弥生土器片から土師器片を中心として中ビニール袋1袋程出土しているが、須恵器が2点程出土しており、その時期から7世紀中位から後半位が考えられる。

38は東壁沿いで出土した須恵器の环蓋1／2片。復元口径15.8cm。器高2.8cmを測る。天井部に鉗状の摘みが付き、口縁部内面には嘴状の小さな三角形のかえりが付く。天井部外縁は回転ヘラ削りで、ろくろ回転は時計回り。その他の部分はナデで、ややひずみがある。色調は赤みがかった暗褐色、胎土は細砂をやや含む。

土坑3005 (Fig.65, PL. 37)

H 6区で検出した隅丸長方形形状の土坑。規模は長径1.46m、短径0.83m、最大深さ80cmを測る。断面は箱形で壁はほぼ直立する。底面は北から南へ下傾している。埋土は上層が灰褐色地山粘土ブロック、下層が黄褐色地山粘土ブロックである。出土遺物はなく、時期、性格もわからぬが、貯蔵穴もしくは落し穴状のものであろうか。

土坑3006 (Fig.65, PL. 37)

I 区南側境界地のJ 4区で検出した略円形の土坑。3012号住居や3011溝を切る。規模は一部境界地にかかるが。長径1.2m以上、短径1.10mを測る。底面は西側にピット状の落込みがあり、東側が相対的にテラスを呈す。底面迄の深さはテラス部で最大45cm、ピット部で70cmを測

る。埋土は上部大半が黒色土で橙色地山粘土を含むが範まらない。下半は橙色地山粘土ブロックに黒褐色土を含む。遺構の性格はわからないが、西側にピットを持つ事から柱穴の可能性もある。

出土遺物は弥生上器片を中心とした土器片が小ビニール1袋で、細片が多く時期は不明。

土坑3007 (Fig.67, PL. 38)

F 3区の調査区西側境界地で検出した楕円形状の土坑。規模は長径1.10m、短径0.90mを測る。底面は東側がテラス状の平坦面を持ち、西側はテラスから径30×37cm程の円形のピット状の落込みを持つ。深さはテラス部迄最大67cm、ピット部は83cmを測る。埋土は黒褐色粘質土に地山粘土ブロックを混入する。出土遺物はなかった。柱穴が落し穴状の土坑か。

土坑3008 (Fig.67, PL. 39)

H 3区で検出した略丸長方形形状の土坑。北側は搅乱を受けているが、規模は長径1.50m、短径0.94mを測る。底面はほぼ水平で、その深さは30cm程で、底面中央部には更に略丸長方形形状の28×23cm、深さ40cm程のピットがある。埋土は黄褐色粘質土かシルト上で、中に橙色粘土ブロックをわずかに含む。落とし穴状の遺構であろうか。

出土遺物は底面中央のピットから黒曜石の剝片が1点出土した。

土坑3009

個別で図示していないが、E 4区の上坑3001を切る舟形の形態の土坑。保存樹木部分にかかり。全容はわからないが、長径1.48m、短径0.6m以上、深さ14cm以上を測る。埋土中に炭化物・焼土ブロックを含んでいた。

4) 溝状遺構

溝3001

D 4区で検出した長さ約3m、幅20cm、深さ5cm程の小溝。黒褐色粘質土の埋土である。3001号住居の周壁溝と同一方向であり、竪穴住居跡の残欠かも知れない。遺物の出土はなかった。

溝3002 (Fig.70, PL. 47)

E・F 4区で検出した段落ちドの溝状遺構。新しい時期で段落ちドの排水路もしくは自然流路かも知れない。

39は壺器もしくは施釉陶器。器種はわからないが仏具の香炉のようなものであろうか。底部は上げ底で、外面には角状の突起がある。色調はにぶい灰色であるが、内底には褐色釉が、外面には煤が付着する。40は須恵器の高环脚部。復元脚径13cmを測る。ナデで内面にしづり痕が残る。色調は灰色から黒灰色を呈し、胎土に径3mm以下の砂粒を含む。41は弥生土器の甌口縁部小片。口縁部には棒状工具による刻み、外面は幅2cm程のヘラ状工具による条痕、内面もヘ



Fig. 69 各溝土層断面図 (1/40)

ラ状工具によるナデか。外面色調は黒ずんだ黄褐色で、胎土に 2 mm 以下の砂粒を含む。夜白期のものか。42は弥生土器の鉢 1 / 6 片。復元口径 22 cm を測る。器壁は磨滅が著しいが、内面にはヨコ刷毛と指おさえ痕が残る。色調はにぶい黄褐色で、胎土に 3 mm 以下の砂粒・雲母を多く含む。弥生時代前期後半代のものか。

溝3003 (Fig.69)

F 6 区で検出した東西方向の小溝。規模は全長 4.24 m、最大深さ 15 cm 程である。埋土は暗い黒褐色土で下層に褐色地山粘土ブロックをわずかに含む。出土遺物は上器片を少量含む。

溝3004 (Fig.69・71, PL.40)

G 4 区で検出した北から西に湾曲して延びる溝。確認規模は長さ約 6.2 m、最大幅は南側で 0.8 m、深さは 30 cm 弱を測る。溝断面は舟底形で埋土は明褐色地山粘土と黒褐色粘質土の混合土である。

出土遺物は弥生時代後期を含む土器片など中ビニール袋 1 袋程出土している。

43は器台の口縁部か復元口径 14.8 cm を測る。頸部のくびれが強い。器壁は磨滅し調整不明。色調は浅黄橙色を呈し、胎土に径 3 mm 以下の砂粒を多量に含む。44は高杯の脚部片。全体に磨滅がひどく調整は不明。色調は黄橙色を呈し、胎土に直径 3 mm 以下の砂粒を多く含む。

溝3005 (Fig.71)

G 4 区の溝3004の南側で検出した東西方向の小溝。確認規模は長さ 3.4 m、最大幅 0.36 m、深さ 5 ~ 10 cm を測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は弥生土器らしき細片が 13 点程出土している。

45は高杯の脚部片。器壁は磨滅がひどく調整不明。色調は浅黄橙色で胎土に砂粒を多く含む。弥生時代後期末位のものか。

溝3006

G 3 区で検出した東西方向の小溝。溝3007を切る。確認長は 4.52 m、幅 0.14 ~ 0.28 m、深さ 1 ~ 8 cm を測り、極めて底が浅い。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物に弥生上器の細片らしきものを 12 点程含むが時期は不明。

溝3007

3006号溝に切られる小溝で、北側は保存樹木にかかる。南から北へ緩やかに S 字状に延びる

小溝で、確認規模は長さ約5m、幅0.2m、深さ10cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土で下層に地山粘土ブロックや焼土・炭化物ブロックを混入する。この溝の東壁上には砥石125があった。整穴住居跡の周壁溝の可能性もある。

出土遺物は赤生土器と思われる細片が37点程出土しているが、図示出来ない。

溝3008

H3区で検出したS字状を描いて延びる小溝。北側一部は試掘トレンチにかかり消滅する。確認長7.4m、幅0.26~0.44m、最大深さ7cm位を測る。埋土は黒褐色で非常に残りが悪い。

出土遺物は土器片を少量含むが、時期は不明。

溝3009

J3区で検出した南北から北東に延びる小溝。規模は長さ2.7m以上、幅0.6m、深さ20cm程を測る。溝断面は浅い逆台形で、埋土は暗褐色粘質土と橙色地山粘土の混合土で炭化物を混入する。

出土遺物は赤生土器の細片を少量と焼土ブロックを少量混入。

溝3010

同じくJ3区で東へ弧を描いて延びる小溝。西側は試掘トレンチ、南側は境界地にかかる。確認長は3.2m、幅は南壁で0.7m、深さ35cmを測る。断面は浅いじ字状で、埋土は粒子が細かい暗褐色粘土で地山粘土ブロックを含む。出土遺物は土器片が2点出土し、時期不明。

溝3011 (Fig.71)

J3・4区で検出したT字形状を呈す小溝。3012号住居、3006号土坑を切る。南北の幅広い溝は浅く、北側の東西の溝が更に少し浅く、南北の溝との合流部には櫛群があった。東西溝は

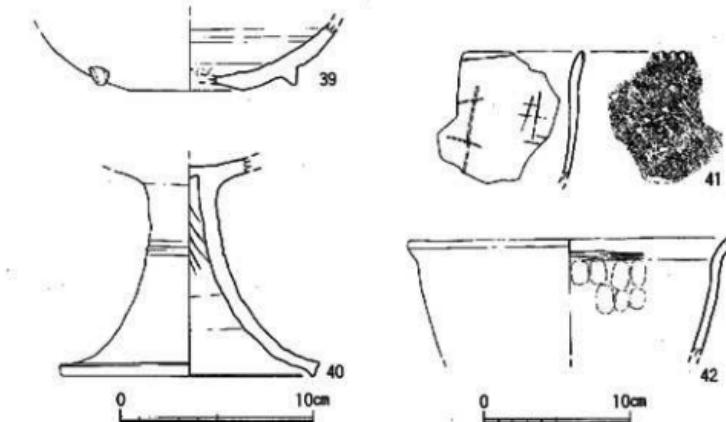


Fig.70 溝3002 出土遺物 (1/3・1/4)

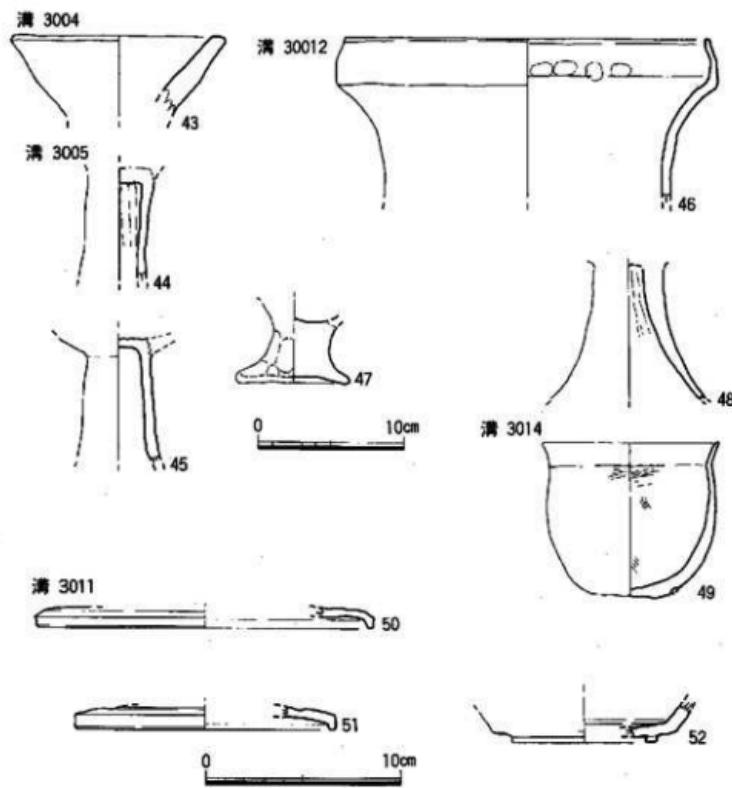


Fig. 71 各溝出土遺物 (1/3・1/4)

長さ4.25m、幅0.5m、深さ15cm程を測る。埋土はやや暗い黒褐色土である。

出土遺物は弥生土器や上部器の細片と、奈良時代の壊身や蓋、壺、甕などの細片を含む。

50～52は須恵器。50は高台付坏の1/4片。復元口径7.5cmを測る。全面ナデ。51・52は坏蓋の口縁部小片。復元口径は50が13.3cm、51が約17cmを測る。色調は50が暗灰色、51・52が灰白色で、胎土は良い。

溝3012 (Fig. 71, PL. 47)

H 6区で検出した北から南へ西側に湾曲して延びる小溝。保存樹木等にかかり不連続であるが、確認規模は長さ約6.3m、幅0.3～0.4m、深さ10～30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物は弥生土器片などが中ビニール袋1袋で、混入と考える須恵器の細片を含む。

46は壺の口縁部1/4片で、復元口径25cmを測る。口縁部は袋状気味の二重口縁。器壁の磨

滅は著しいが内面に指おさえ痕が残る。47は脚台部でワイングラス状の坏部が付くと考えられる。磨滅が著しいが脚台外面は手づくねで指おさえ痕が残る。48は高坏の脚部片。磨滅が著しいが内面にしづり痕が残る。色調は47が淡黄色、48が明澄色、49が淡灰褐色で、粘土にはそれぞれ砂粒を多く含む。

溝3013

H 6 区で検出した東から西へC字形に延びる小溝。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物は弥生土器と思われる甕の細片が3点程出土している。

溝3014 (Fig.71, PL.47)

D 5 区で検出した北から南へJ字状に延びる小溝で、北側は包含層を切り込む。確認規模は全長約6m、幅は0.22~0.40m、深さは最大16cm程である。埋土は黒褐色粘質土で、包含層の埋土とはほとんど変わらない。

出土遺物は弥生土器などの上器片がややまとまって出土しているが、大半が小片で、図示出来るものは少ない。49は弥生土器の小型の甕で復元口径12cm、器高10.5cmを測る。口縁は頸部から外方へやや屈折して開き、内外面器壁は磨滅するが部分的に刷毛目が残る。色調は橙色で外底近くに黒斑が有る。胎土は5mm以下の粗砂粒を多く含む。弥生時代後期後半のものか。

溝3015

D 5 区の包含層上面で検出した弯曲して直角に巡る幅の狭い小溝。残りは悪く、両端は消滅している。3014号溝と合わせて南北に長軸を持つ堅穴住居跡の周整溝の可能性もある。埋土は黒褐色粘質土で包含層の土とはほとんど差はない。

出土遺物は弥生土器や上器器、須恵器の細片を少量含むが、図示出来るものはない。

5) ピット出土遺物 (Fig.72-73, PL.39-40-47)

ピット1054はD 5 区で検出した円形のピット、直径0.63×0.56cm、深さ60cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。53は古墳時代前期初頭位の甕2/3片で、底部を欠失する。復元口径18.9cm、胴部最大径21.6cmを測る。器壁は磨滅するが、内外面刷毛である。色調は浅黄褐色で胎土に3mm以下の砂粒を多く含む。ピット1231はF 4 区で検出した隅丸長方形状の土坑。0.76×0.55m、

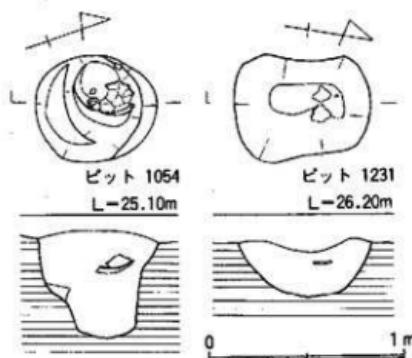


Fig.72 ピット1054・1231 (1/30)

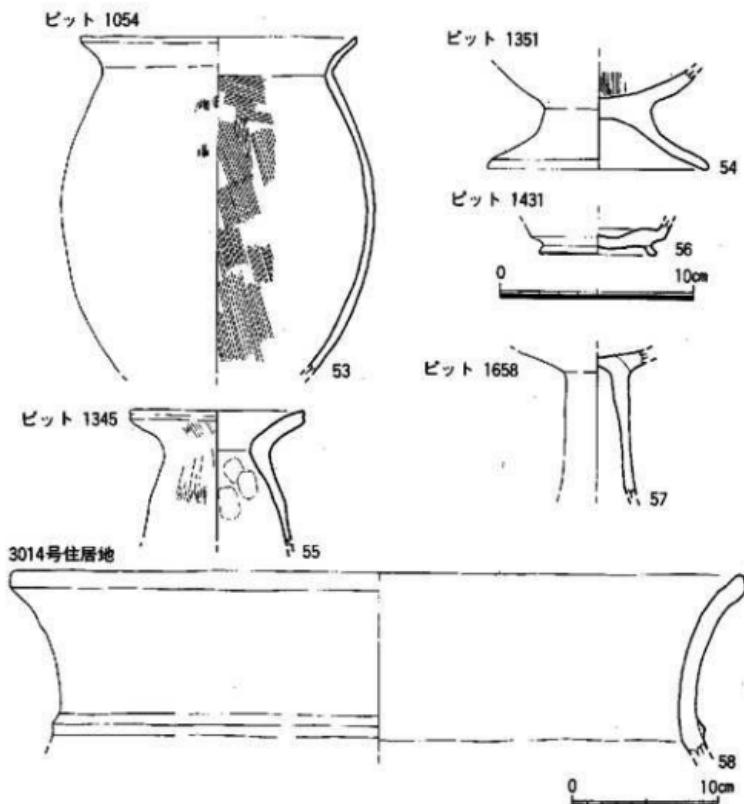


Fig.73 各ピット出土遺物 (1/3・1/4)

深さ30cmを測る。土器片が2点出土しているが、時期は不明。

54はピット1351から出土した器台1／3片で、口径12cmを測る。頭部の縋まりは強く、口端部に浅い凹線が巡る。色調は橙色で、胎土に細砂粒を多く含み、黒雲母も含む。55はピット1345出土の台付鉢の脚部片。復元脚径11.4cmを測る。内面は網目、その他はナデ。色調は橙色で、胎土に3mm以下の砂粒を多く含む。56はピット1431出土の須恵器高台付壺1／4片。復元高台径6.0cmを測る。調整はナデ。外面色調は灰黑色で、胎土に黑色粒子と白砂粒を含む。57はピット1658出土の弥生土器高壺脚部片。磨滅が著しく調整は不明。色調は橙色で、胎土に4mm以下の砂粒と赤色粒子を多く含む。

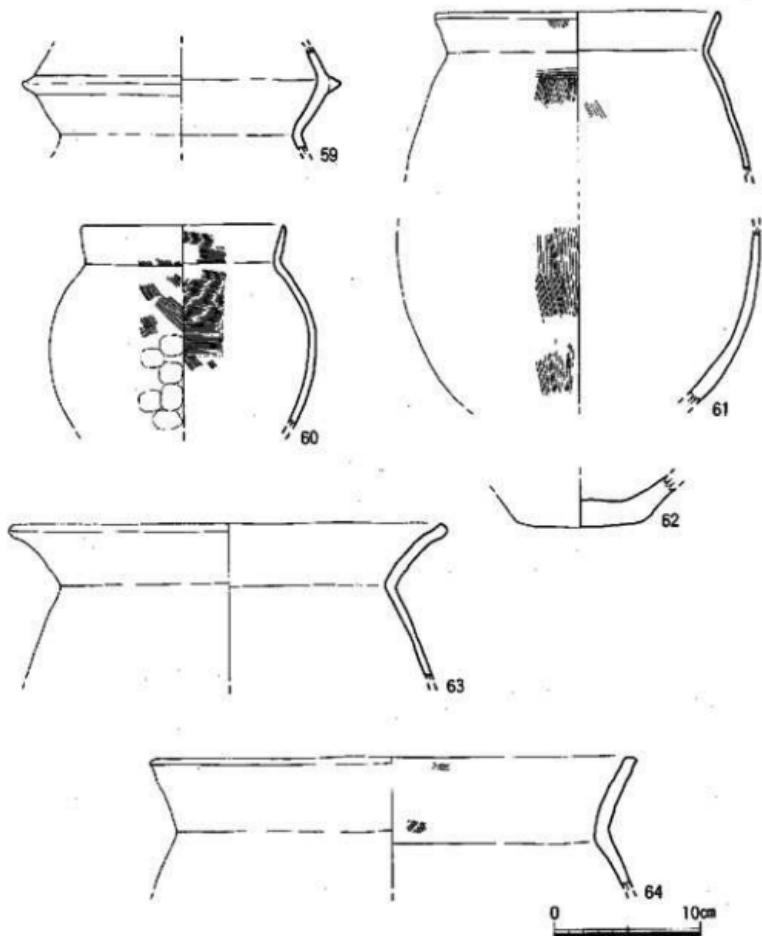


Fig.74 包含層 2号土器群出土遺物 1 (1/4)

6) 包含層の調査 (Fig.74~79, PL.48)

包含層は I 区北側の C・D 5 区の浅い谷部で検出した。包含層は北側程厚く堆積している。埋土は上層が黒褐色粘質土もしくは黒色粘質土を主体とし、下層は暗褐色粘質土が主体となる。遺物は上層に多く含まれ、特に谷の落ち際に多い。図示していないが落ち際に 1 号土器群・2 号土器群と遺物の集中する部分がある。また包含層上面から切り込むピットや溝などの遺構

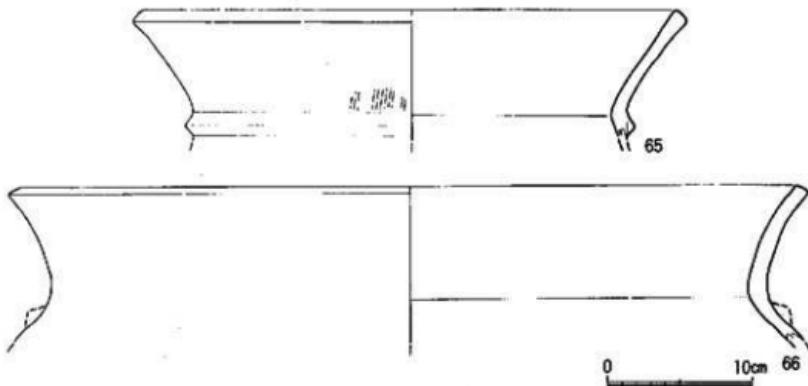


Fig.75 包含層 2号土器群出土遺物 2 (1/4)

もあるが、同様の埋上ではっきり確認出来ず、地山面迄掘り下げる段階で確認している。出土遺物の大半は弥生時代後期中頃から終末期の上器片であり、量が多い。他に鉄鎌や石斧などの破片も含む。

59・60は壺。59は弥生終末期の複合口縁壺の小片。全体に磨滅が著しい。60は古墳時代前期初頭、内面はヨコ刷毛。61～66は弥生時代後期中頃から終末位のもの。61は口縁から脚部片、復元口径19.2cmを測る。外面刷毛、内面ナデで刷毛がかすかに残る。62は凸レンズ状の平底底部片。63は終末位の壺の口縁部1/3片。復元口径約30cmを測る。器壁は荒れ調整不明。64は後半代の壺口縁部1/6片。復元口径33.2cmを測る。器壁は磨滅が著しい。65・66は大型壺で頸部に一一条の三角突帯を巡らす後期中頃のもの。65は1/8片で復元口径37.8cmを測る。66は小片で推定口径は約55cm位。65の外面上にはかすかに刷毛が残る。67～71は高壺の脚部片。いずれも弥生後期終末のもの。67は外面ヘラ削りのち刷毛、68は磨滅が著しく調整不明。69はわずかに刷毛が残る。70は外面に細い刷毛が残る。71・72は脚台付鉢の脚部片。71は内外面刷毛が残る。72は器壁が剥落し調整不明。73～75は杏形器台と称される支脚。逆コップ状で頂部に凹孔がある。73・74は磨滅が著しく調整不明。75は外面指おさえで内面に刷毛を施す。いずれも終末期のもの。76・82は器台である。いずれも頸部のくびれは強い筒形の器台。76は底部1/2片を欠失するが、口径13.0cm、脚径14.2cmを測る。外面下半は叩き、内面は刷毛。77は口縁部1/3片で復元口径16.4cmを測る。78は脚部1/4片で、復元脚径15cmを測る。内外面下半に刷毛目が残る。79は口縁部1/3片で、復元口径15.7cmを測る。外面タテ刷毛、内面ヨコ刷毛。80は1/2片で復元口径11.8cm、復元脚径15cmを測る。内外面下半に刷毛が残る。81・82

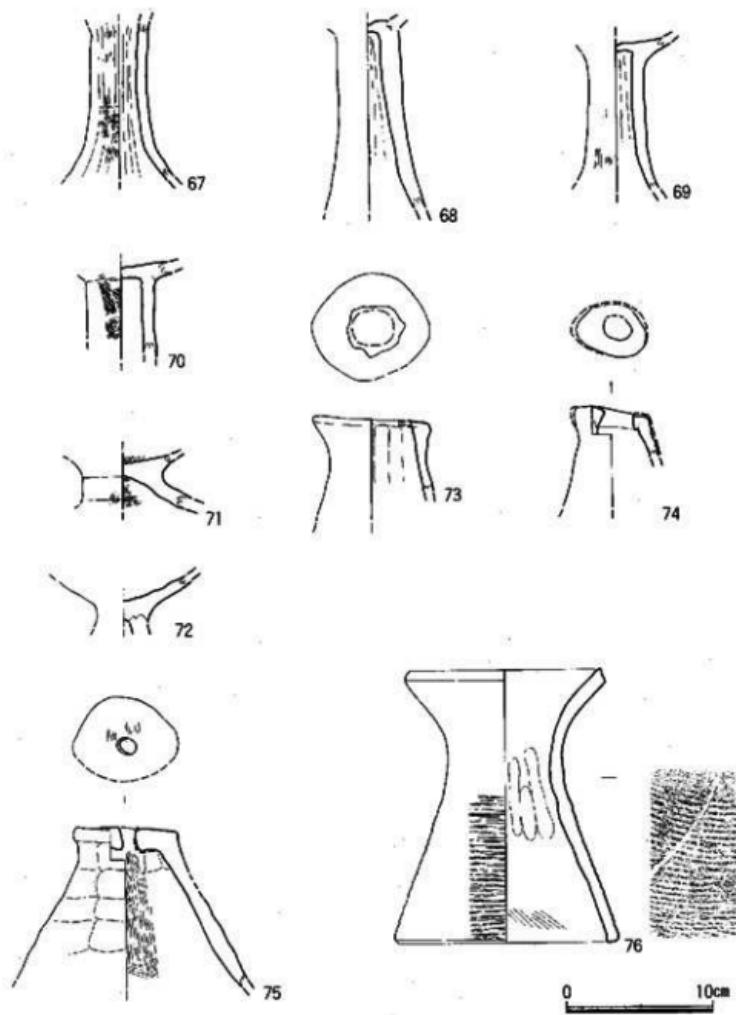


Fig. 76 包含層 2 号土器群出土遺物 3 (1/4)

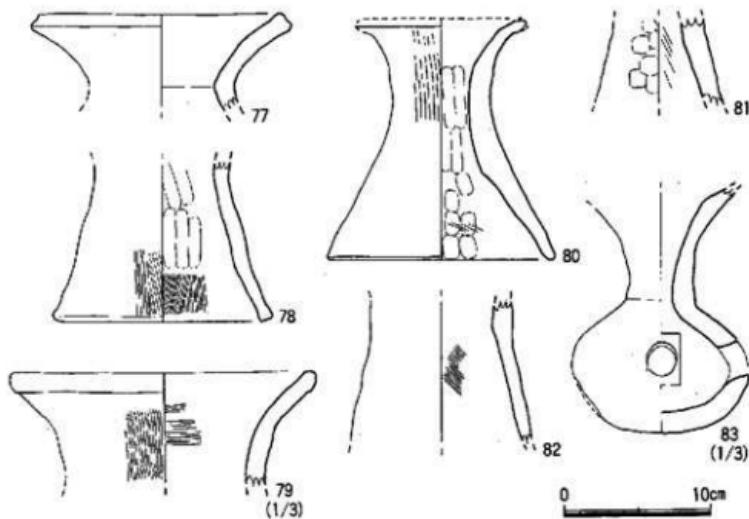


Fig. 77 包含層2号土器群出土遺物4 (1/3・1/4)

は筒部小片。81は外面指おさえ痕が残る。82は1／2片で内面に刷毛がわずかに残る。83は溝状遺構M1680上層から出土した牛焼けの須恵器の頸。口縁部を欠失するが胸部最大径9.1cmを測る。胸部中央に直径1.6×2.1cmの円孔があく。焼きは悪いがどっしりしている。

84～91は包含層中出土のもの。84は壺口縁部1／8片。復元口径23.5cmを測る。弥生後期後半代のもので、器壁は磨滅が著しいが刷毛目が残る。85は把手付の広口壺1／2片で復元口径14cmを測る。口縁の立上りはやや内傾し、肩部に1対の把手が付く。器壁は磨滅が著しく調整不明。色調は黄橙色で、胎土に砂粒と赤色粒子を多く含む。類例として西新町遺跡や浦志遺跡A地点に出土例がある。86～90は筒形容器台。86は口縁部小片で復元口径12cmを測る。外面叩き、内面刷毛である。87は膨みを持つ筒部1／4片。外面叩きのち刷毛、内面ナデのち刷毛を加える。88は1／2片で復元口径13.2cm、復元脚径17.2cm、器高14.3cmを測る。器壁は磨滅が著しく調整は不明だが、内面にわずかに刷毛目が残る。90は脚部小片で復元脚径15.4cmを測る。外面はナデ、内面は刷毛である。91は弥生土器の底部片。底部には木葉圧痕が残る。92～96は1号土器群出土。92・93は筒形の器台。92は1／3片でわずかに膨みを持つ。内外面刷毛目。93は1／4片で復元で口径7.2cm、底径9.4cm、器高は14.8cmを測る。外面指調整、内面ナデと刷毛調整。94は終末期位の壺底部片か。不安定な底部で、磨滅が著しく内面に刷毛が残る。95は高壺の接合部片。器壁の磨滅は著しいが内外面刷毛目が残る。96は複合口縁の壺の口頸部片。

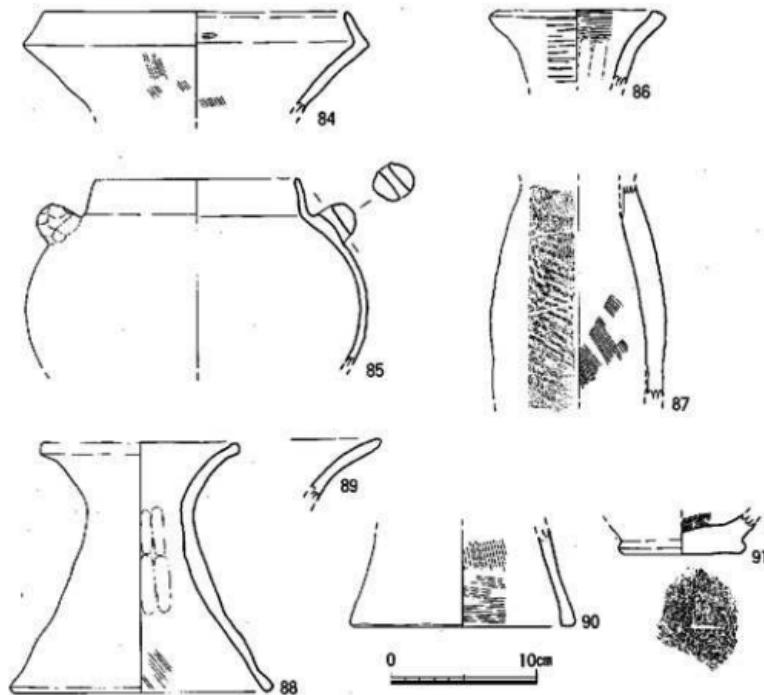


Fig.78 包含層出土遺物 (1/4)

終末期のものか。口縁と頸部の境にコ字状の突帯と頸部と肩部の境に三角尖帯が巡る。頸部外面にタテ刷毛、内面にヨコ刷毛を施す。

7) II区の調査 (Fig.80, PL. 42)

I区の南側遊歩道部分の調査である。北から南への傾斜面である。調査区が狭い上に削平がひどく、検出構造はそれ程多くない。遠構面は15~60cm程の表土。黒色腐植土下の明橙色地山粘土（花崗岩バイラン土）である。検出した構造はピット・溝などで、風倒木痕と思われる不定形土坑もあった。

溝3016 (Fig.79, PL. 48)

北側で検出した小溝。長さ3.5m、幅0.35m、深さは西壁で40cm余りを測る。埋土はくすんだ橙色砂礫混粘質土で、底には黒色腐植土を含んでいた。



Fig. 79 包含層・II区3016号溝出土遺物 (1/3・1/4)

97はく字状に外反する鉢口縁部小片。復元口径は推定で17.7cmを測る。器壁は内外は磨滅し調整は不明。外面色調は黄橙色で、胎土に径2mm以下の砂粒を多く含む。弥生時代終末から古墳時代初め頃のものか。98は脚台付の鉢で破片から推定復元した。鉢部が3016号溝出土。脚部が包含層出土のものである。器壁の磨滅は著しく調整不明。外面色調淡灰褐色で、胎土に粗砂粒を多く含む。

8) 遺構面・表土出土遺物 (Fig. 81, P.L. 49)

99は表土出土の弥生後期後半から終末にかけての高杯脚部片。内外面磨滅が著しく調整不明。100はF5区の段落下で出土した奈良時代の長頸壺底部片。復元高台径10cmを測る。外底部はヘラ削りのちナデ、その他はナデ。101は表土出土の須恵器で、N期の壺身1/4片。復元口

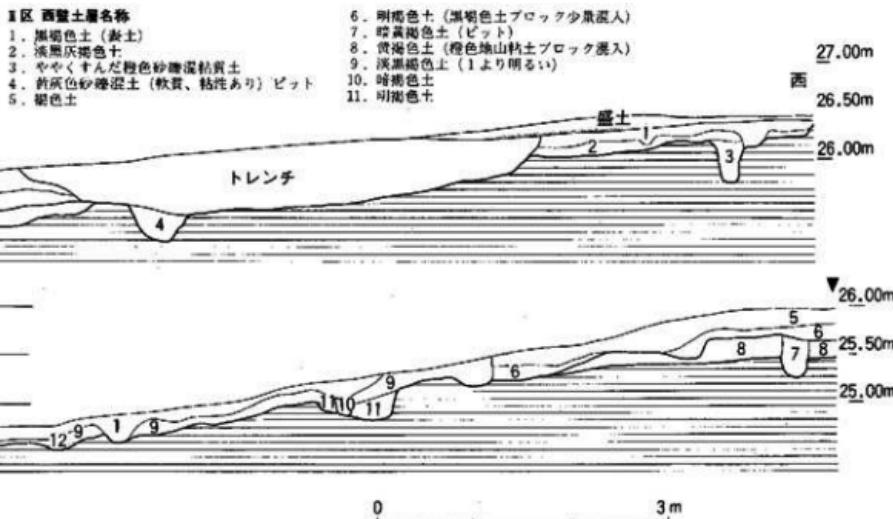


Fig. 80 I区 西壁土層断面図 (1/60)

径10cmを測る。内外面ナデ。102は遺構面出土の高台付环小片。復元高台径7.8cmを測る。103は遺構面出土。口縁部1／6片で復元口径13.5cmを測る。口縁部は玉縁状に肥厚し、端部に浅い凹線が巡る。104は包含層上面で出土。李朝系の陶器の皿底部片。復元底径4.6cmを測る。内面に胎土目痕が残り、不透明な乳白色釉がかかる。外底はややあげ底で胎土目痕が残る。105は表土出土。明代の青磁で盤口縁部小片。半透明の明綠灰色釉が厚目に均等にかかり、全面に水裂が入る。106はG 3区遺構面で検出した环で復元口径11.4cm、器高3cmを測る。磨滅が著しく調整は不明。底部に径2cm程の焼成後の穿孔がある。

9) 各遺構出土のその他の遺物

玉類 (Fig. 82, PL. 49)

107～110はC 5区包含層上層出土の滑石製の白玉。法量は直徑が3.5mm、5mm、4.5mm、5mm、厚さは3mm、2.5mm、2.5mm、1.5mmを測る。111は住居跡3017床土中出土の滑石製の略円形の有孔円板。長径3.3cm、短径3.0cm、厚さ0.5cmを測り、中心より少しづれて径2mmの孔がある。外側は削りで部分的に欠失する。

石器類 (Fig. 83・84, PL. 49・50)

112は住居跡3005出土の砥石片。黒灰又は暗青灰色の粘板岩製で、残存長9.9cm、最大幅2.8cmを測る。上下面と右側面を砥面として使用。仕上底であろうか。113は住居跡3007床面出土。

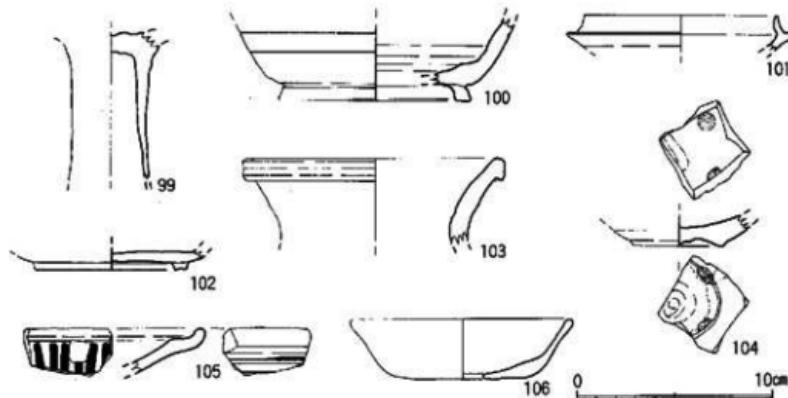


Fig. 81 連構面、表土出土遺物 (1/3)

黒灰から暗青灰色の粘板岩で残存長11.4cm、最大幅2.8cmを測る。上下両側面を使用しており上に砥石である。114は住居跡3009床面出土の凹石又は磨石。上面に使用による敲打痕が残り、その他は全面擦り、長さ10.1cm、最大幅7.4cm、厚さ29cmを測る。石質は灰色の玄武岩。115・116は軽石製の浮子でいずれも309号住居跡出土。全長は2.9cm、2.8cm、重さは3.5g、2.5gである。117は住居跡3017出土の凹石。花崗岩製で両側面は難な仕上、上下両面は敲打調整痕が残り、使用痕の凹みが残る。118は住居跡3014ベッド上で出土した石包丁で、刃部最大長9.9cm、刃部最大幅3.7cm、厚さ0.7cmを測る。表面は研磨仕上で刃部には使用擦痕が残る。色調は明灰色で、石質は変成岩系か。119は住居3002もしくはピット1112上面で出土した粘板岩製の砥石片。色調は黒灰色で、全皿底面として使用。残存長7.6cm、最大幅2.2cmを測る。120・121は石鎌でいずれも石質はサヌカイト。鎌身1.8cm、2.1cmを測る。120は3014号住居跡埋上。121はD5区の不定形状の深い窪みから出土。122は住居跡3002床面出土の楔のような石器である。全

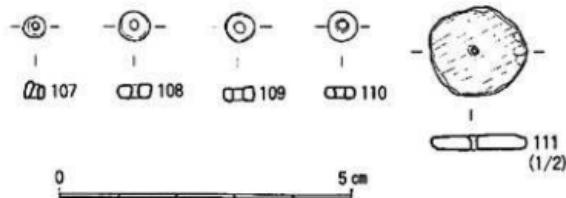


Fig. 82 各連構出土遺物 (1/1 · 1/2)

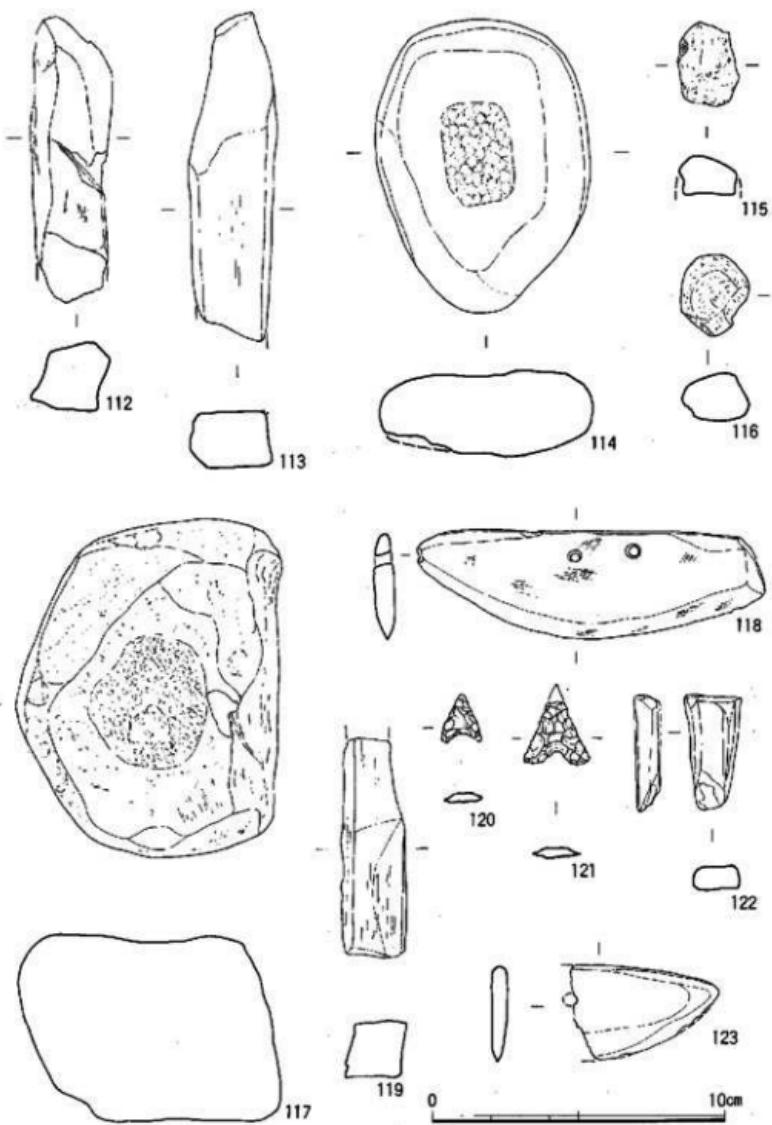


Fig.83 各遺構出土石器 1 (1/2)

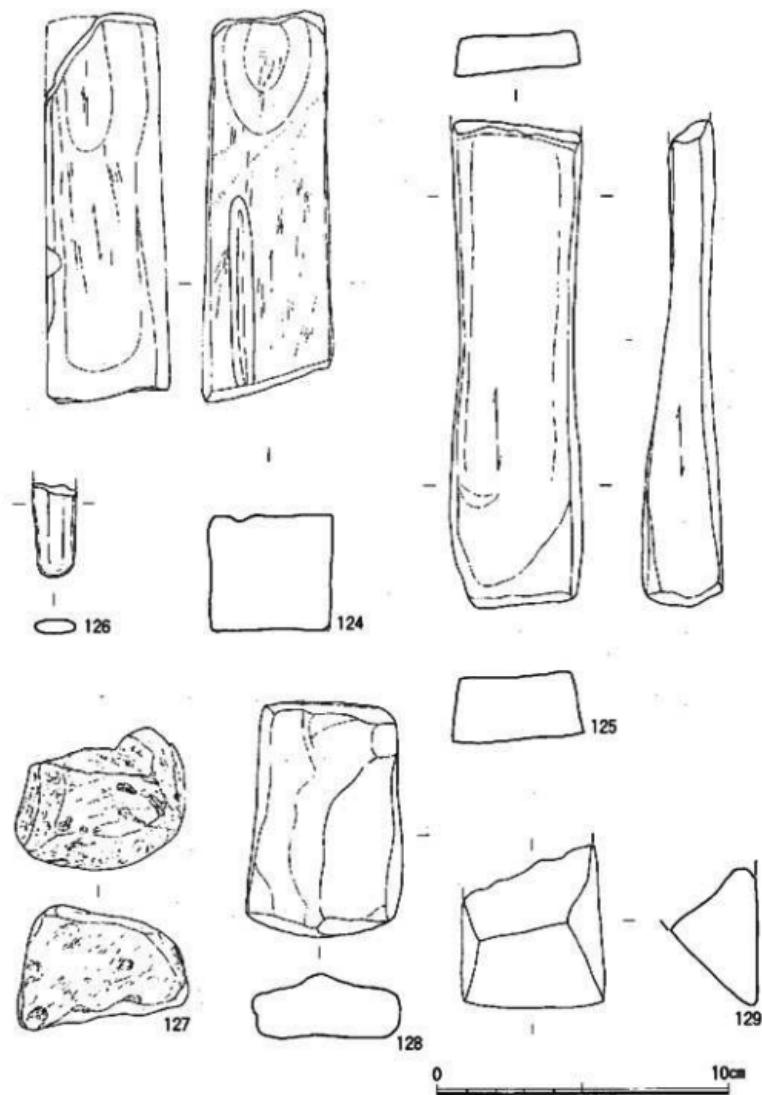


Fig.84 各遺構出土石器 2 (1/2)

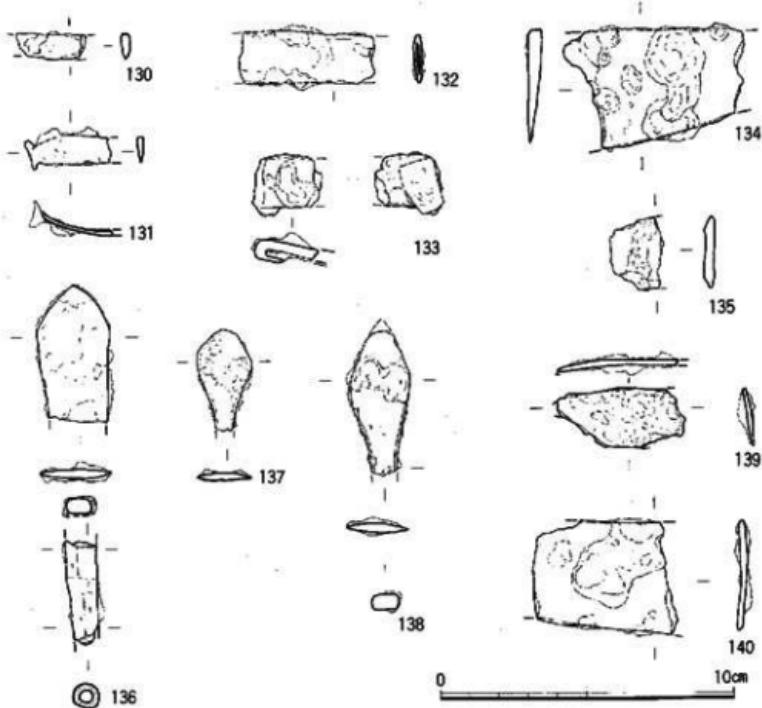


Fig. 85 各遺構出土鉄器 (1/2)

長4cmで各面擦っている。色調は暗灰青色で細粒砂岩又は硬砂岩である。123は土坑3003出土の石包丁片。残存長5.1cm、厚さ5mm程で、全面研磨している。色調は明灰色で、石質は安山岩系か。124はJ4区の不定形ピット1508から出土した長方形で断面方形を呈す大型の砥石。全長13.5cmを測り、断面は 4.2×4.0 cmを測る。全面砥面として利用し、各面擦痕が明瞭に残る。色調は灰白色でアブライトか。125は満3007上面溝際で検出した細長い砥石。かなり使用により擦り減る。残存長17.0cm、最大幅4.7cmを測る。青灰色から暗灰色の泥岩か粘板岩か。金属製利器を低いだものか。126はピット1313出土の小型の不明石製品。全面擦っている。残存長3.3cm、厚さ0.5cmを測る。暗赤褐色の豆色凝灰岩か。127は包含層2号土器群中出土の軽石製の浮子。長さ5.7cm、最大幅4.9cm、重さ24gを測る。128はC5区包含層下層出土の叩石か磨石。各面敲打調整痕と擦痕が残る。最大長8.0cmを測る。色調は黄白色で、石質は玄武岩か。129は

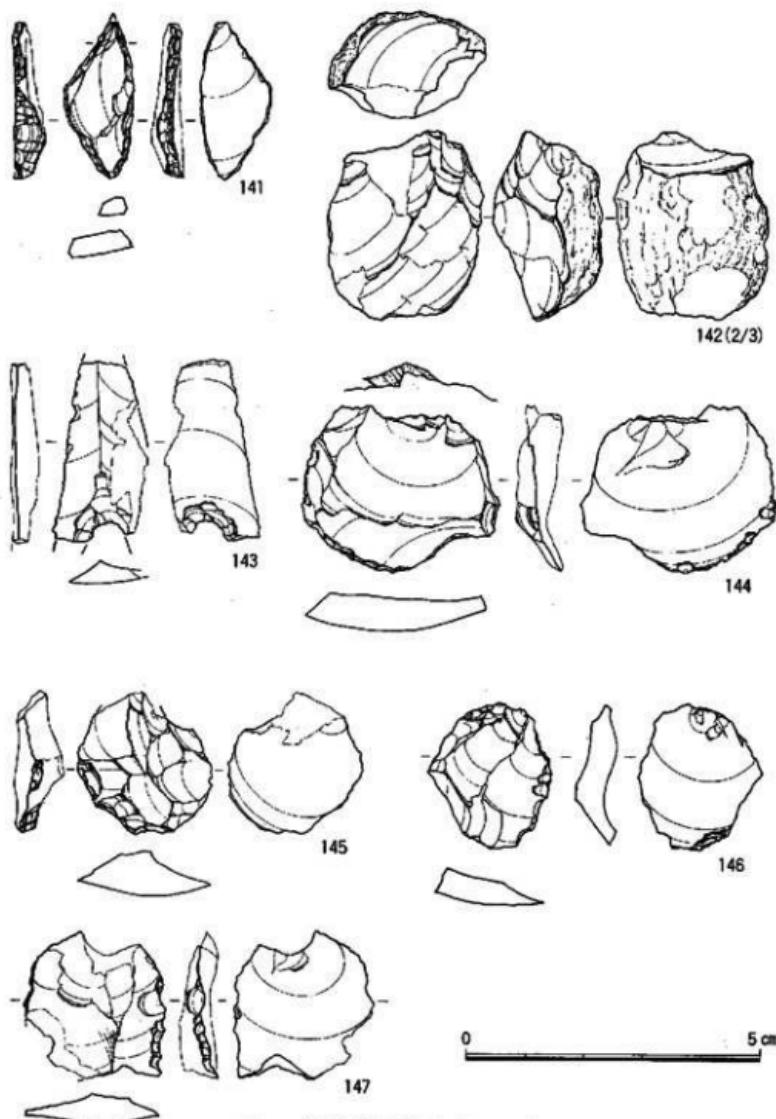


Fig. 86 各遺構出土石器 3 (1/1 - 2/3)

D 5 区包含層下の遺構面から出土した柱状片刃石斧の刃部片か。残存長5.6cm、幅4.8cmを測る。風化が著しい黄白色の頁岩である。

鉄器類 (Fig.85, PL.50)

130は住居跡3010出土の刀子刃部片か。残存長2.3cm、刃部片0.9cmを測る。錆がひどい。131も3010号住居跡で出土した。錆がひどいが刀子の刃部片と思われる。残存長2.8cm程を測る。先端部が反っており、やりがんなに転用した事も考えられる。132は住居跡3013床面で検出したやりがんなの一部か。錆がひどく、両側に明瞭な刃部片が認められない。残存長4.6cm、刃部幅1.8cmを測る。133も住居跡3013床面出土。手鎌片か。残存長1.9cmを測る。錆膨れがひどい。134は鎌の破片で、残存長6.1cm、刃部幅4.0~2.8cm、厚さ0.4cmを測る。錆膨れがひどい。135は住居跡3016から出土した不明鉄片。鉄素材か。1.7cm×2.5cmの大きさである。136はD 5 区のピット1054出土の有茎の鉄鎌。鎌身部と茎部片。鎌は柳葉形で、茎部には木質が残る。長さは茎部を合わせると8cm以上で大型のものである。全体に錆がひどい。137は溝3001出土の木葉形の有茎無刺形鎌、残存長3.5cm幅1.8cmを測る。全体に錆がひどい。138はC 5 区包含層上層から出土した柳葉形の有茎無刺形鎌。残存長5.0cm、鎌幅2.0cmを測る。全面錆がひどい。139は土坑3001出土。全長4.3cmを測る。不明鉄片で鉄素材か。140は建物3005P 8から出土した鎌片もしくは不明鉄片。全長4.9cm、最大幅3.9cmを測る。全体に錆がひどい。

第3次地点出土縄文時代以前石器資料 (Fig.86, PL.50)

全資料16点のうち、石器として7点を以下に報告する。すべて石材は、黒曜石である。資料には、先上器時代、縄文時代の遺物が含まれる。

141は、急傾な調整剝離により素材を斜めに断ち切るようにして2側刃をつくり出したナイフ形石器である。刃部に相当する縁辺にも剝離痕が連続している点、他の多くの例とは異なる。

143は、剝片鎌である。無茎凹基の石鎌である。先端部、基部、右側辺部を欠いて空髄。

142は、石核である。拳大の円錐を用い、単段打面の石核である。石核下部の剝離面は凸面で、素材分割時のものかもしれない。

145~147は、素材である剝片の縁辺に連続、あるいは断続する剝離を残す石器である。剝離は、特定の形状をつくり出してはいない。素材も特定の種類の剝片ではない。

141・145・146は3010・住居跡3009埋土、147は住居跡3014埋土、143はピット1260・142はF 5 区段落下山上である。

図 版

第1次調査 (PL1～PL16)

第2次調査 (PL17～PL26)

第3次調査 (PL27～PL50)



(1) 調査地周辺航空写真 (1948年撮影)



(1) 調査地周辺航空写真 (1987年撮影)



(1) 調査地遠景（東から）



(2) 第1次調査Ⅰ区調査前（東から）



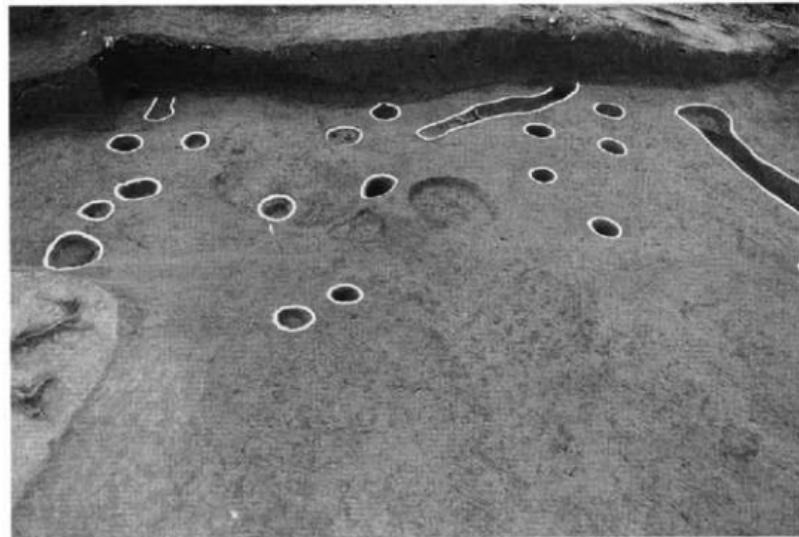
(1) 第1次調査 I 区遺構検出状況（西から）



(2) 第1次調査 I 区谷部東側土層（西から）



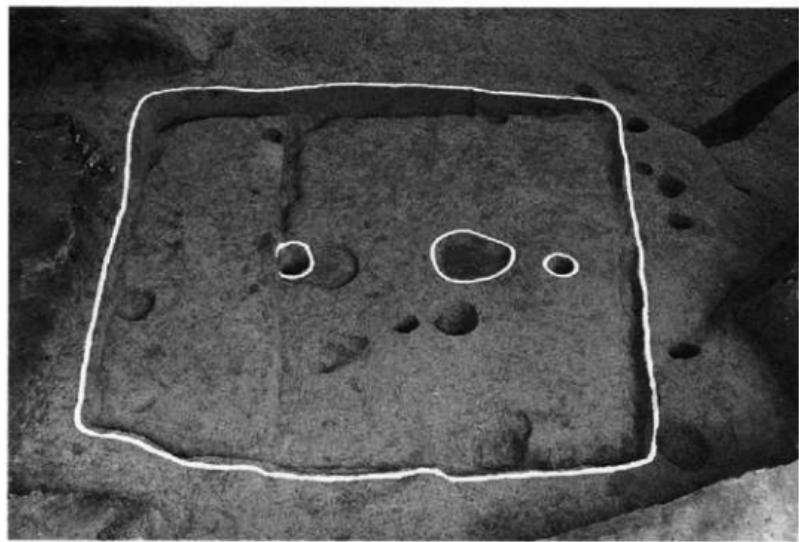
(1) 第1次調査II区調査前（北から）



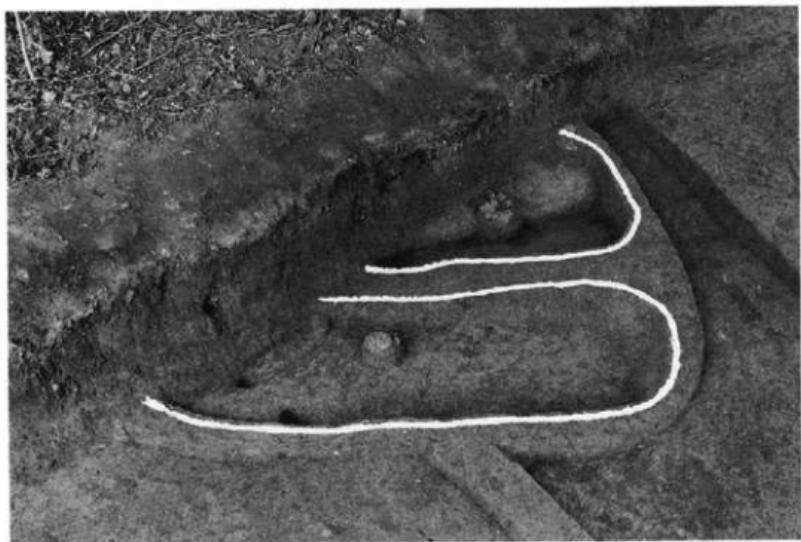
(2) 第1次調査II区東辺部柱穴検出状況（西から）



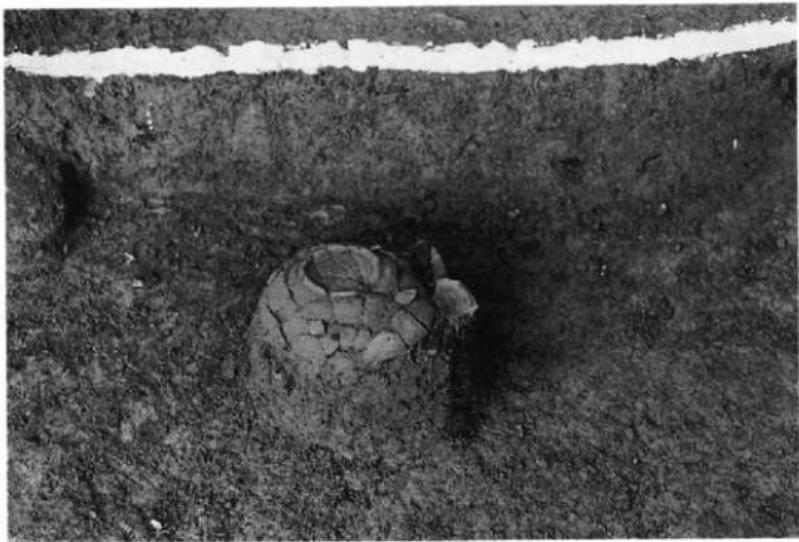
(1) 第1次調査II区1号溝内遺物出土状況（東から）



(2) 第1次調査II区1号住居跡発掘状況（南から）



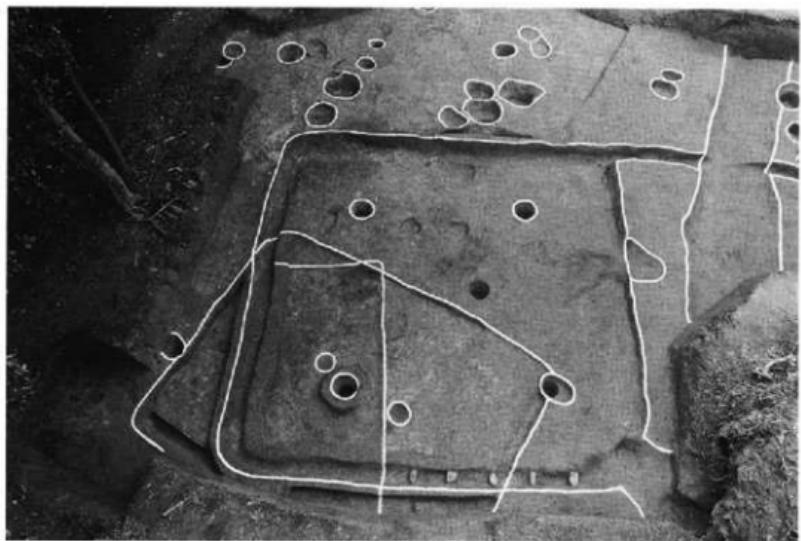
(1) 第1次調査II区1・2号土壤墓検出状況（南から）



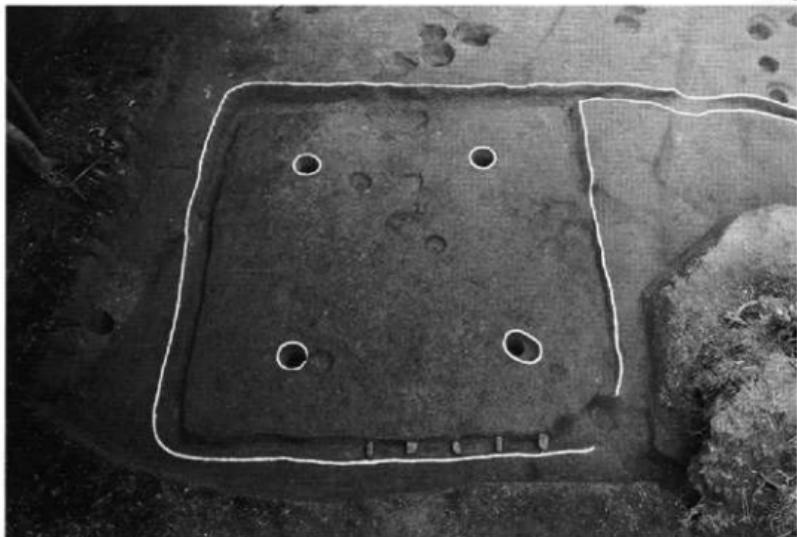
(2) 第1次調査II区1号土壤墓内遺物出土状況（南から）



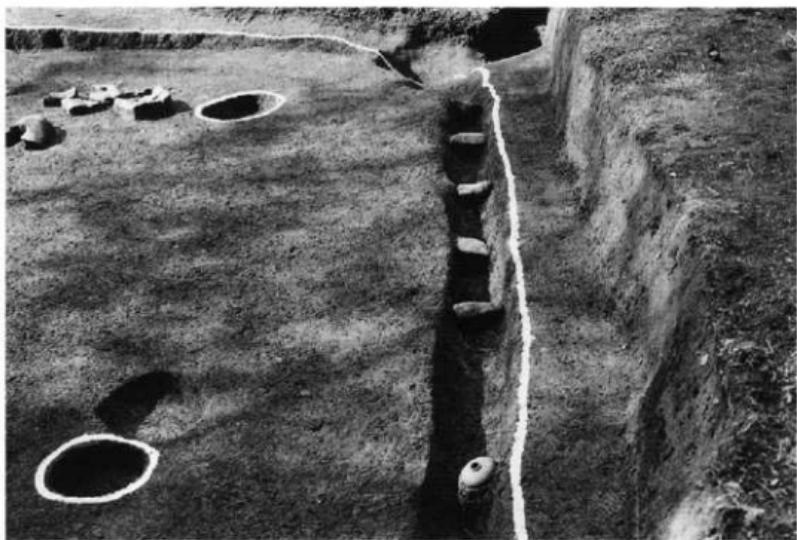
(1) 第1次調査Ⅲ区調査前（南から）



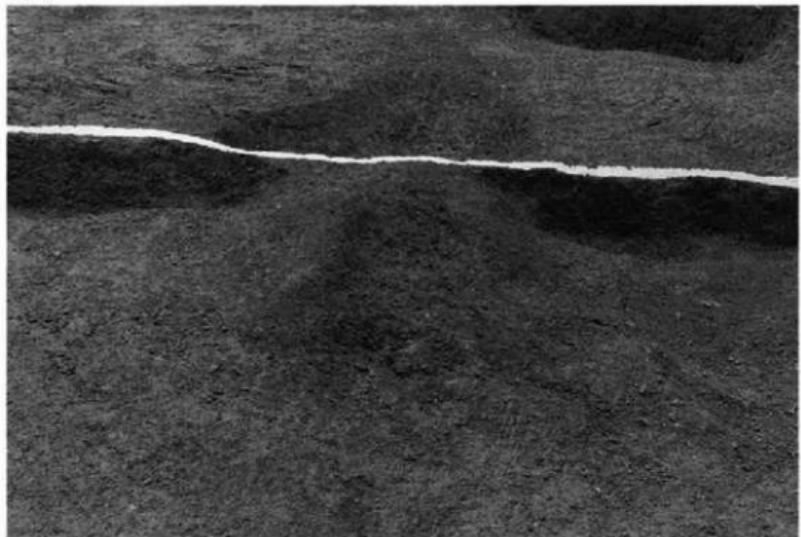
(2) 第1次調査Ⅲ区南半部遺構検出状況（東から）



(1) 第1次調査Ⅲ区2号住居跡完掘状況（南から）



(2) 第1次調査Ⅲ区2号住居跡東壁溝内遺物出土状況（南から）



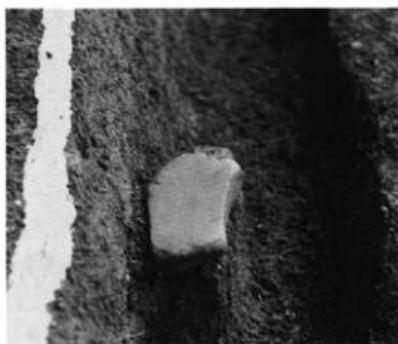
(1) 第1次調査Ⅲ区 2号住居跡竪跡検出状況（南から）



(2) 第1次調査Ⅲ区 2号住居跡床面遺物出土状況（南から）



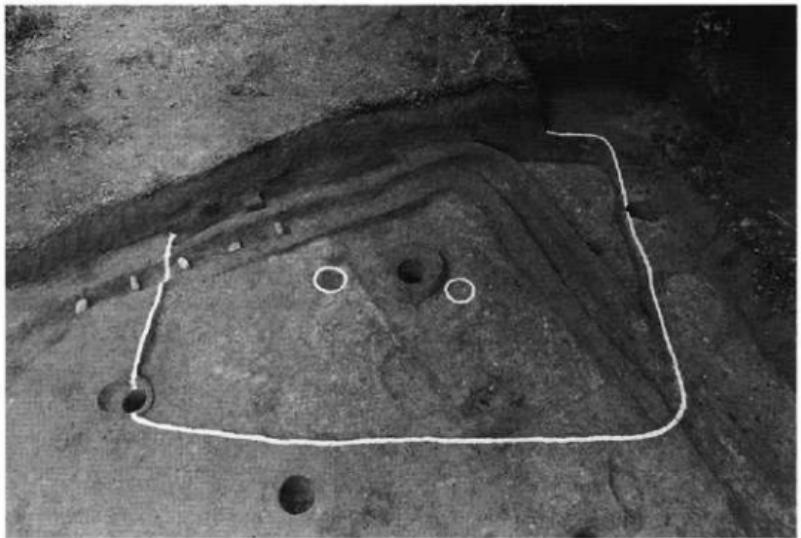
(1) 第1次調査Ⅲ区 2号住居跡東壁溝内遺物出土状況（北から）



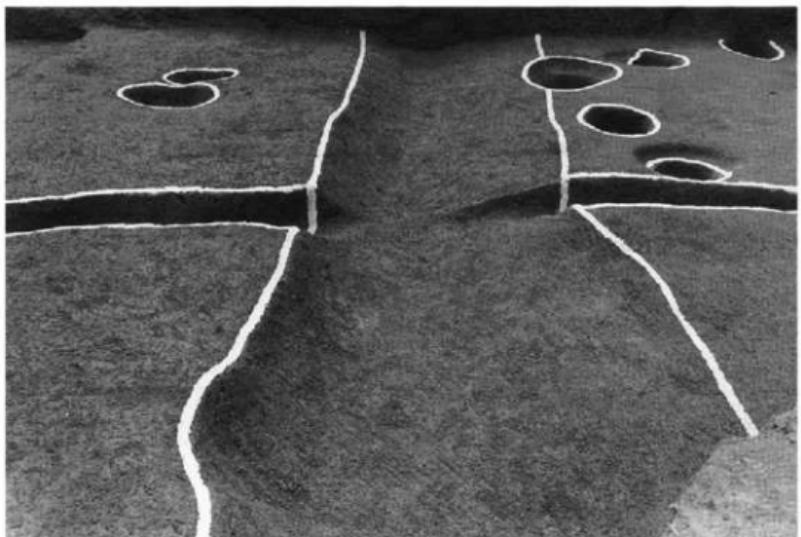
(2) 第1次調査Ⅲ区 2号住居跡南壁溝内遺物出土状況（東から）



(3) 第1次調査Ⅲ区 2号住居跡南壁溝内遺物出土状況（東から）



(1) 第1次調査Ⅲ区 3号住居跡発掘状況（西から）



(2) 第1次調査Ⅲ区 2号溝検出状況（東から）



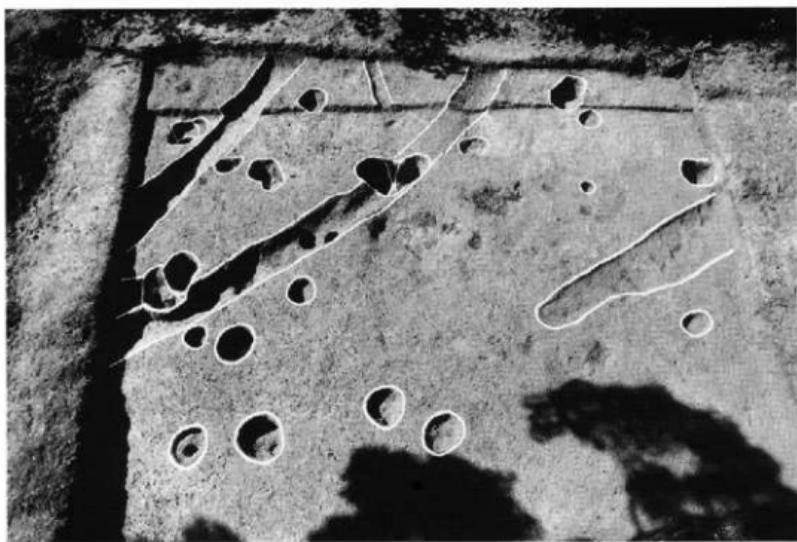
(1) 第1次調査Ⅲ区1号墓棺墓検出状況（南から）



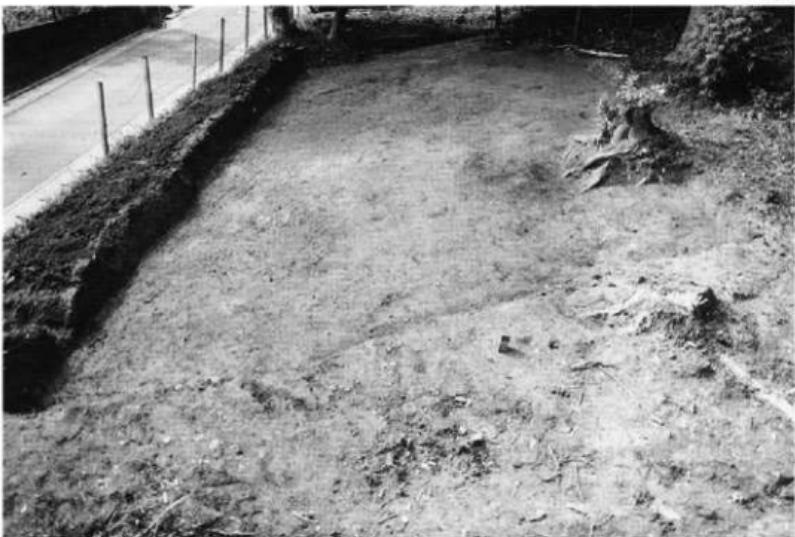
(2) 第1次調査Ⅲ区1号墓棺墓検出状況（東から）



(1) 第1次調査IV区調査前（南から）



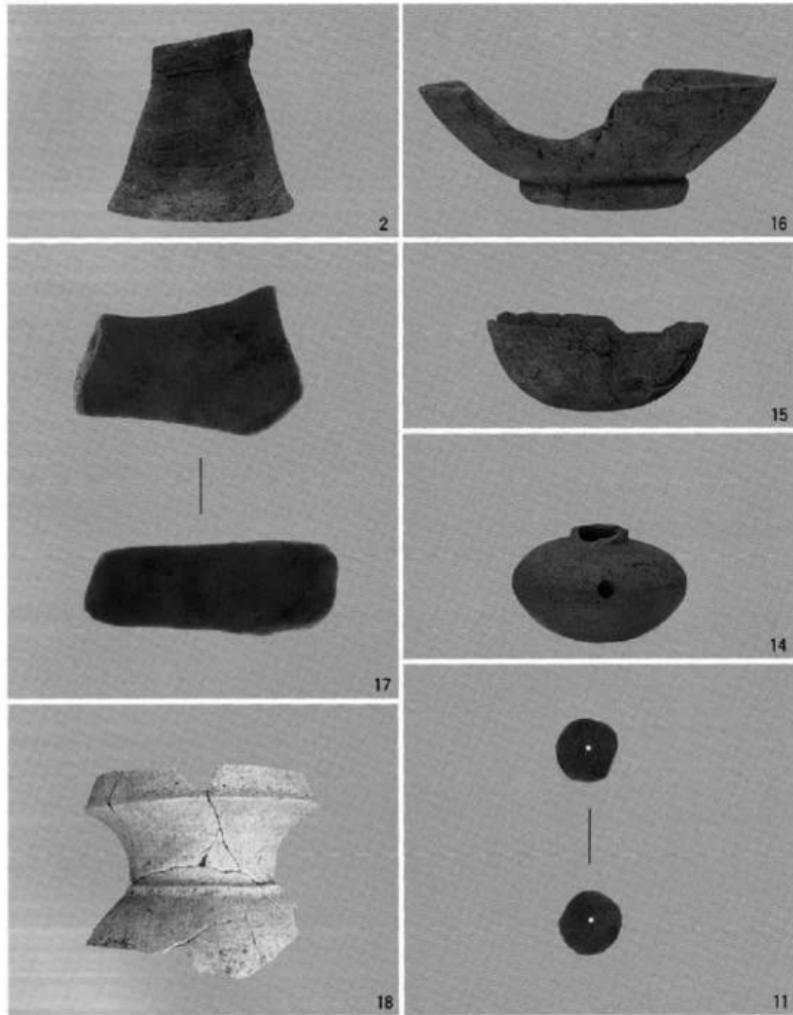
(2) 第1次調査IV区遺構検出状況（東から）



(1) 第1次調査V区遺構検出状況（東から）



(2) 第1次調査VI区遺構検出状況（東から）



(1) 第1次調査出土遺物



(1) 住居跡 2004 (東から)



(2) 住居跡 2007 (東から)



(1) 住居跡 2044 (東から)



(2) 住居跡 2124 (北から)



(1) 住居路 2124,2125,2128,2129 (北から)



(2) 住居路 2125,2128,2129 (北から)



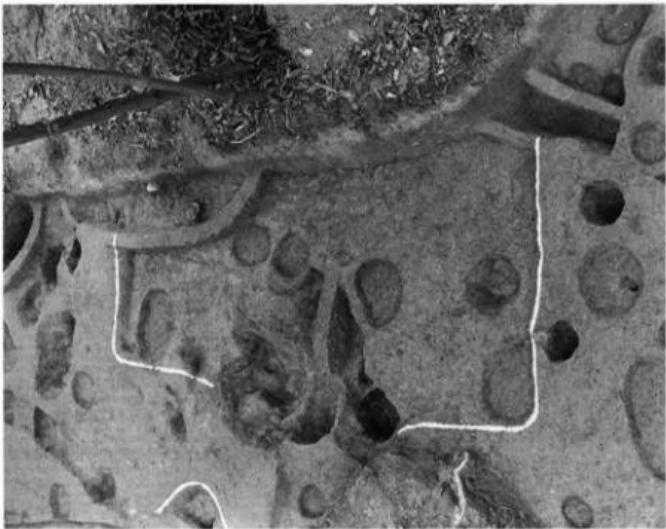
(1) 住居跡 2193 (北から)



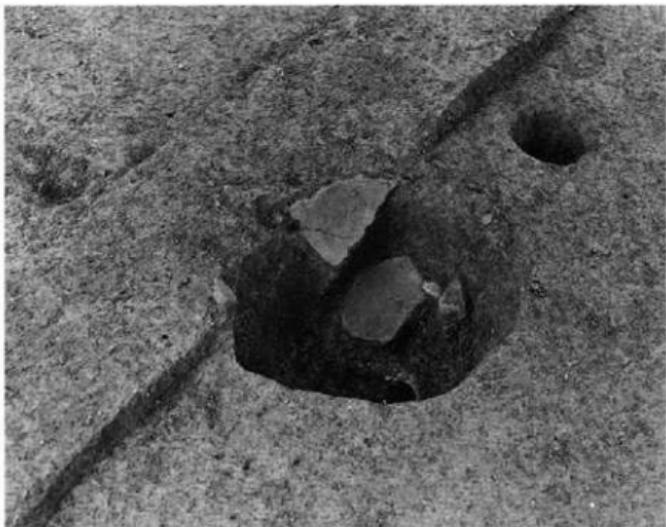
(2) 住居跡 2163 (西から)



(1) 住居跡 2195 (北から)



(2) 住居跡 2126 (北から)



(1) 住居跡 2315 遺物出土状況（東から）



(2) 住居跡 2383 (西から)



(1) 住居跡 2407・2509 (北から)



(2) 土壌 2130 (西から)



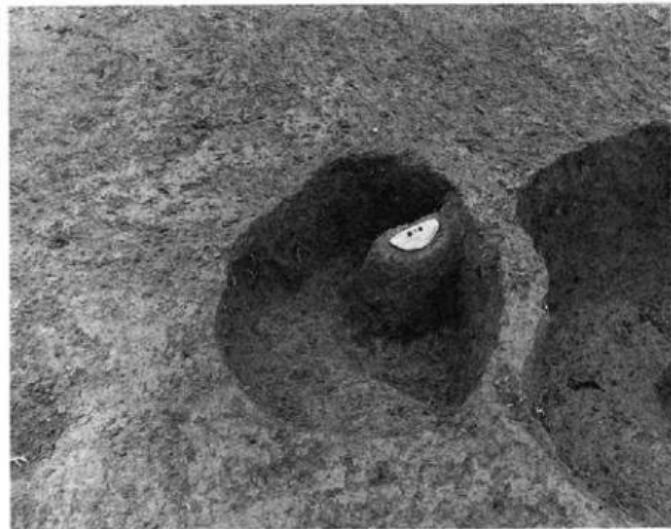
(1) 土壌 2316 (北から)



(2) 土壌 2317 (北から)



(1) 造構 2123 遺物出土状況（東から）



(2) ピット 2127 遺物出土状況（南から）



(1) 道構 2168 (北から)



調査区全景（北から）



(1) 調査区北半部（西から）



(2) I 区北半部包含層（南から）



(1) I 区南半部 (北から)



(2) I 区南半部 (東から)



(1) 住居跡 3002 (南から)



(2) 同 住居跡 壺 検出状況 (北から)



(1) 住居跡 3003・3004 (西から)



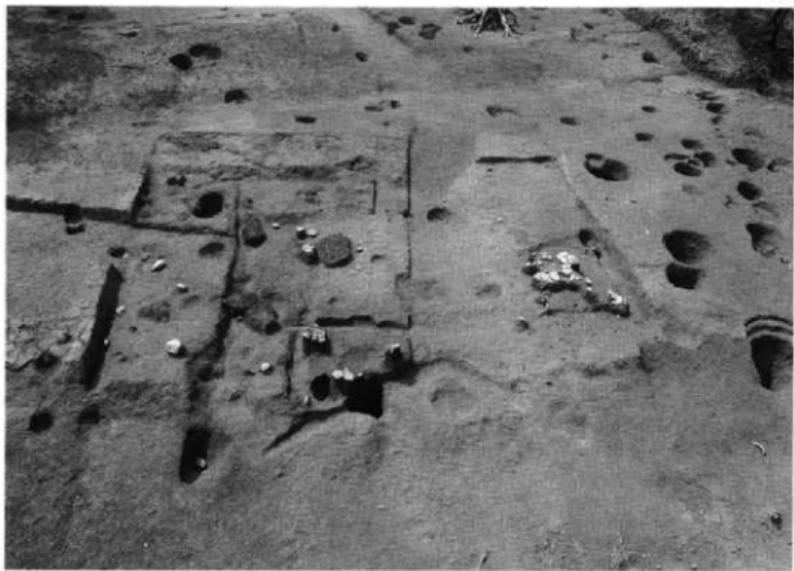
(2) 住居跡 3008 (東から)



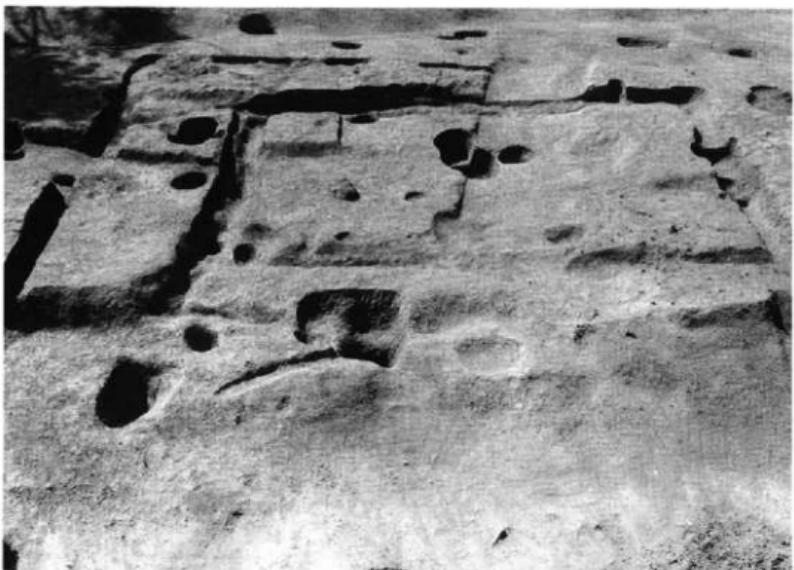
(1) 住居跡 3005・3006 (東から)



(2) 住居跡 3007 (北から)



(1) 住居跡 3009・3010 (東から)



(2) 同 完掘状況 (東から)



(1) 住居跡 3012・3013・3014 (東から)



(2) 同 (南から)



(1) 住居跡 3013・3014 (東から)



(2) 住居跡 3012 (南から)



(1) 住居跡 3016 (南から)



(2) 住居跡 3017 (南から)



(1) 建物 3001 (南から)



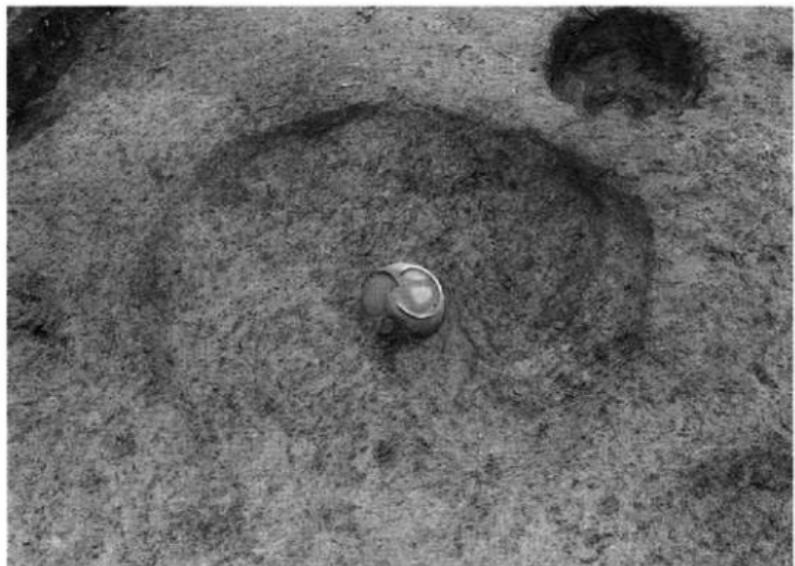
(2) 建物 3002 (北から)



(1) 建物 3003 (南から)



(2) 土坑 3001 (北から)



(1) 土坑 3002 (東から)



(2) 土坑 3004 (南から)



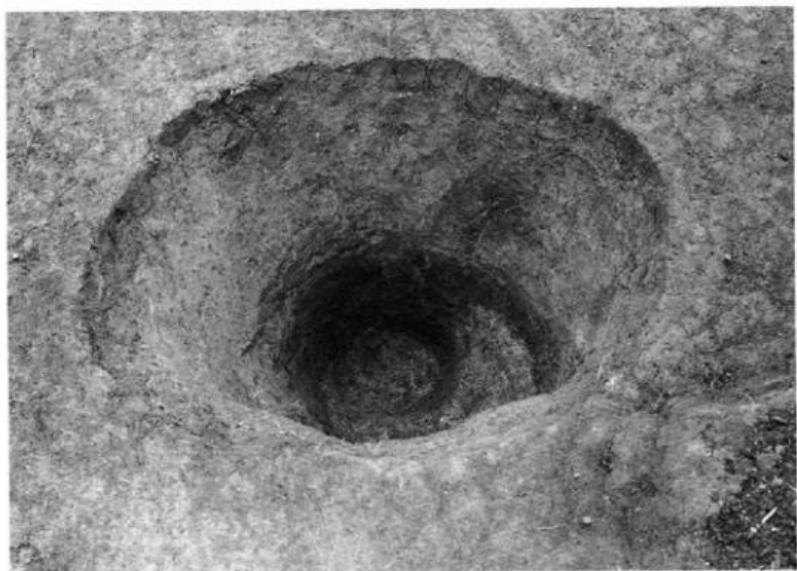
(1) 土坑 3005 (南西から)



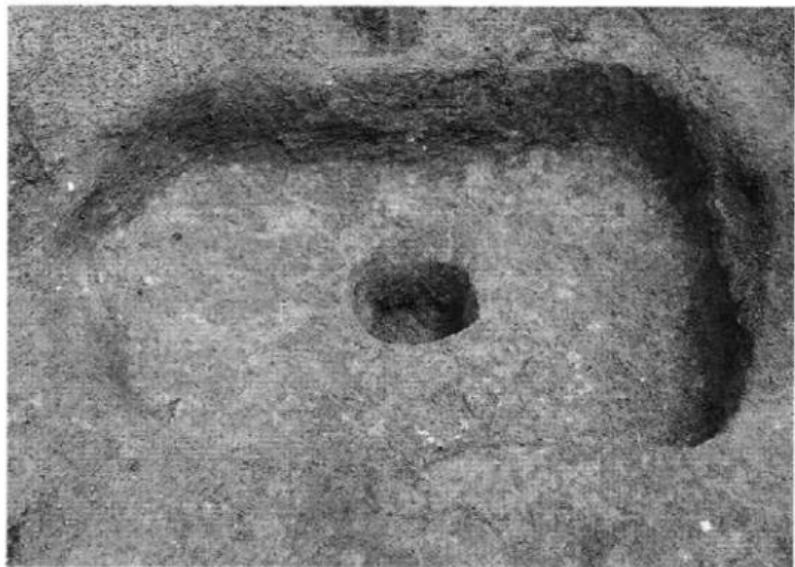
(2) 土坑 3006 (南から)



(1) 土坑 3003 (東から)



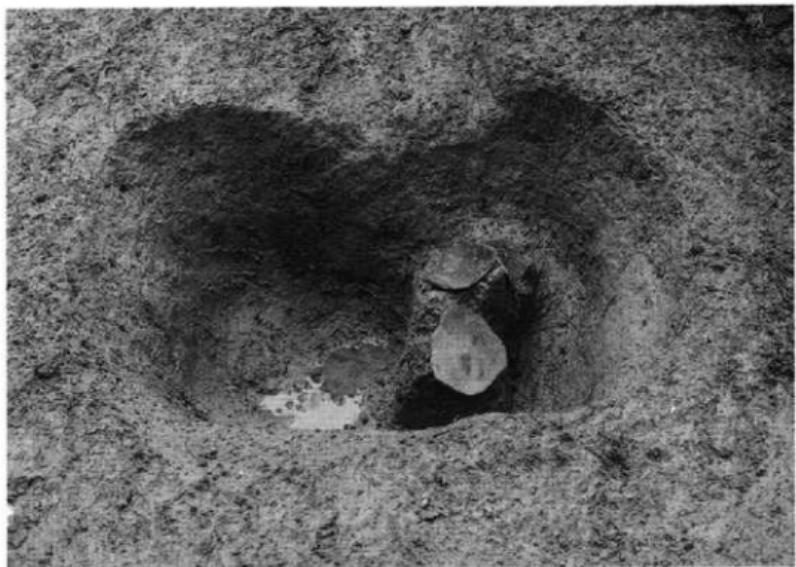
(2) 土坑 3007 (東から)



(1) 土坑 3008 (西から)



(2) ピット 1054 (南から)



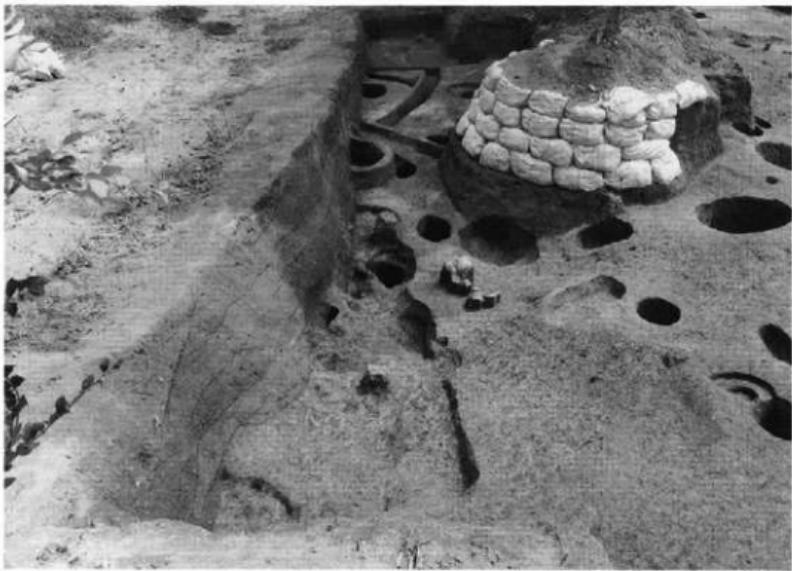
(1) ピット 1231 (東から)



(2) 溝 3004 (北から)



(1) 2号土器群 検出状況（北から）



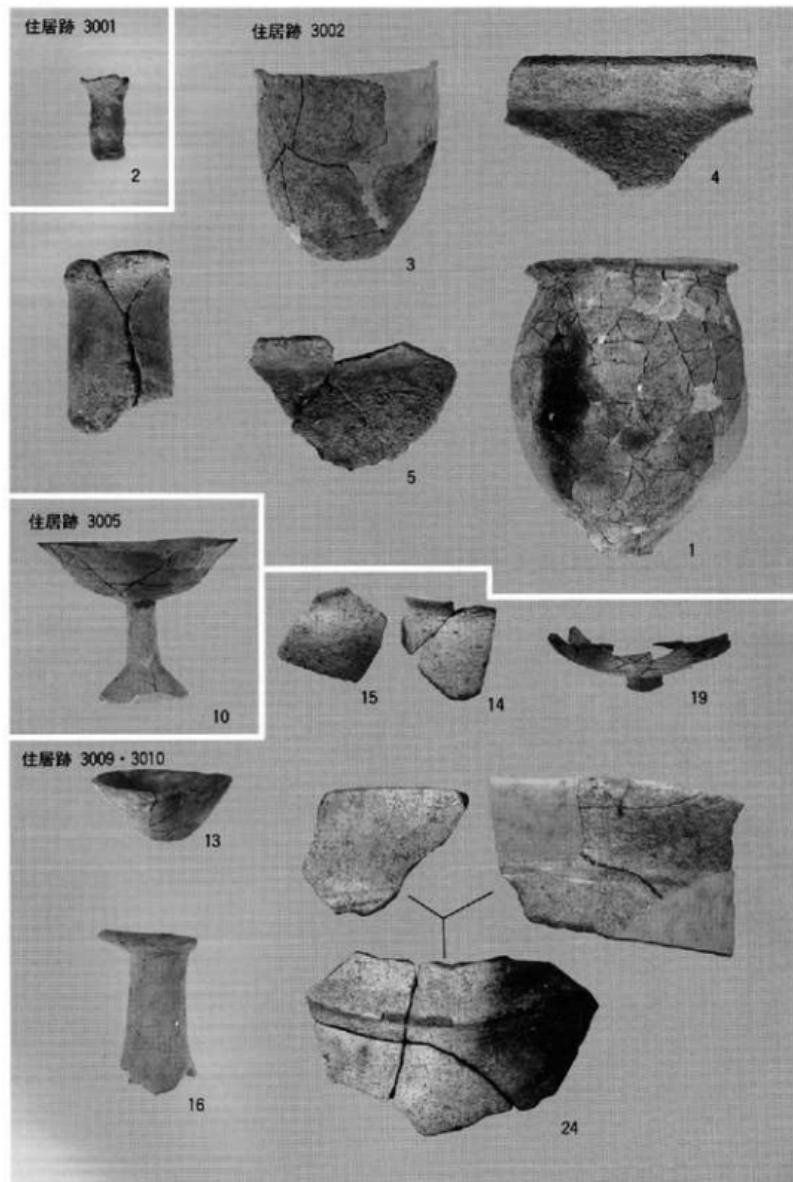
(2) 包含層掘り下げ後（西から）



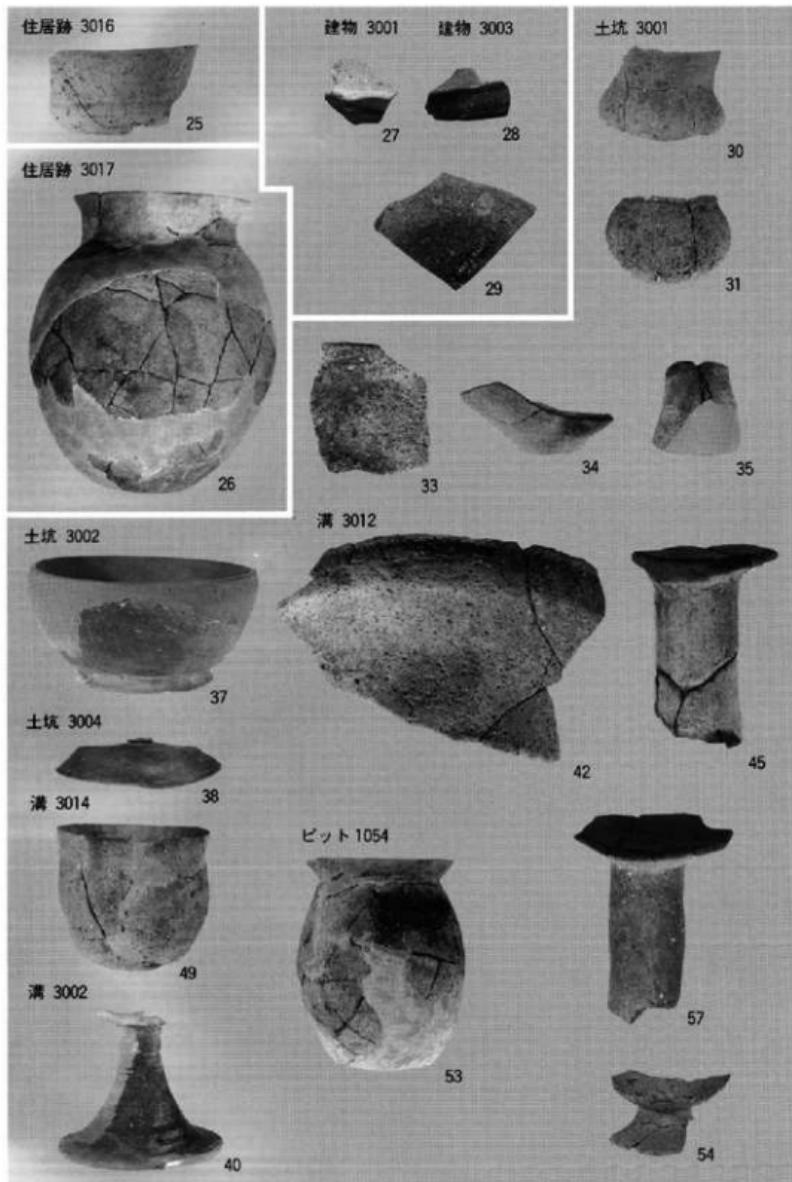
(1) II区全景（西から）



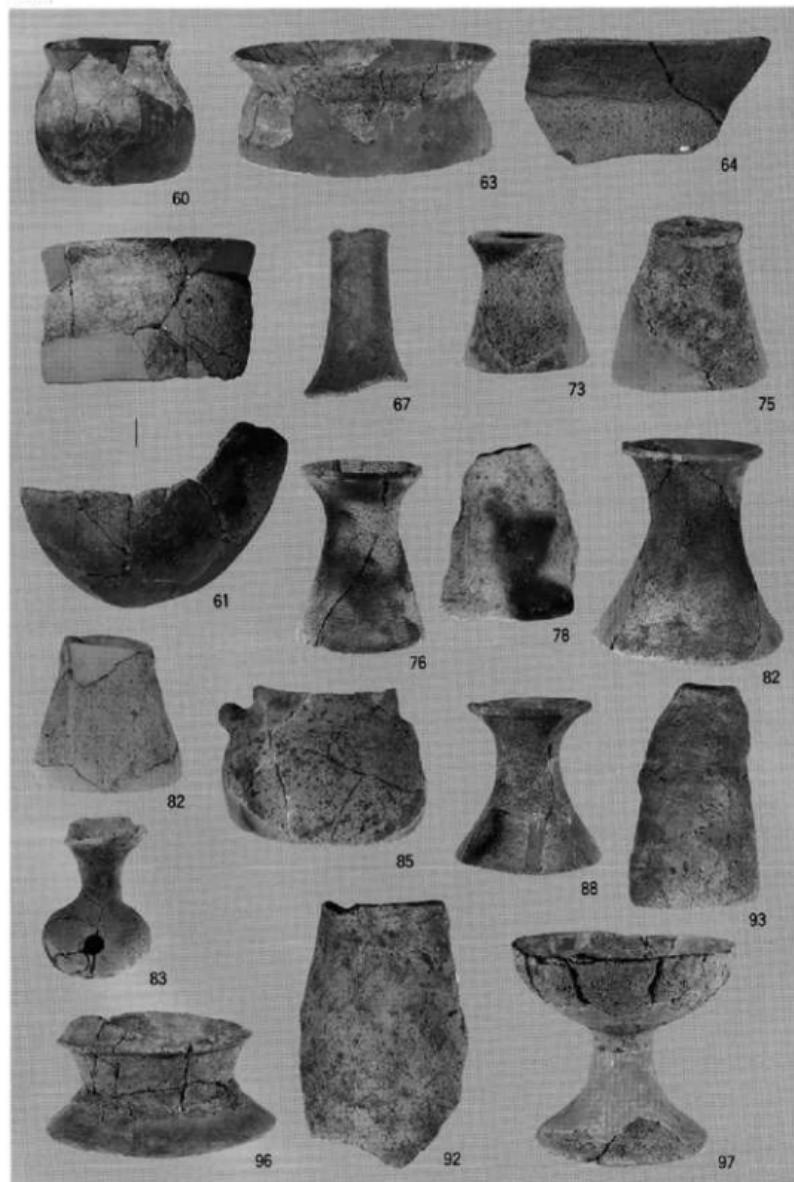
(2) 溝 3016（東から）



各遺構出土遺物 1

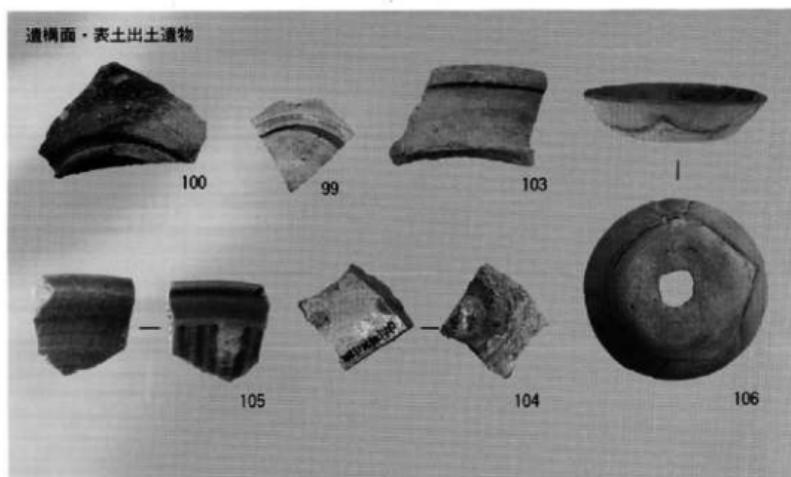


各遺構出土遺物 2



各遺構出土遺物 3

遺構面・表土出土遺物

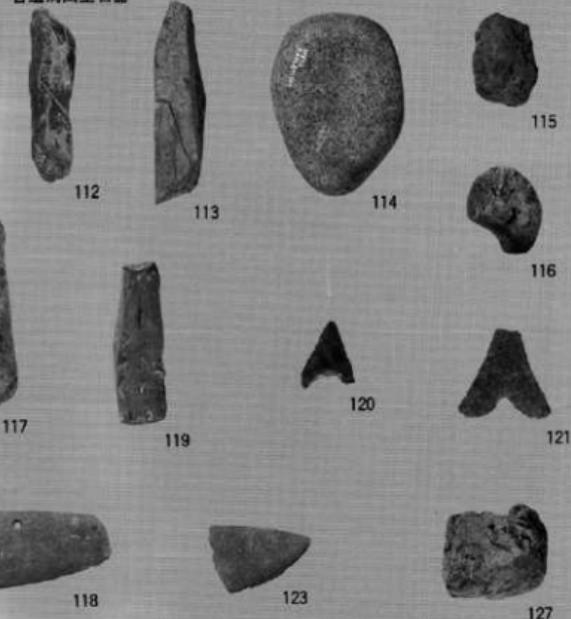


住居 3017



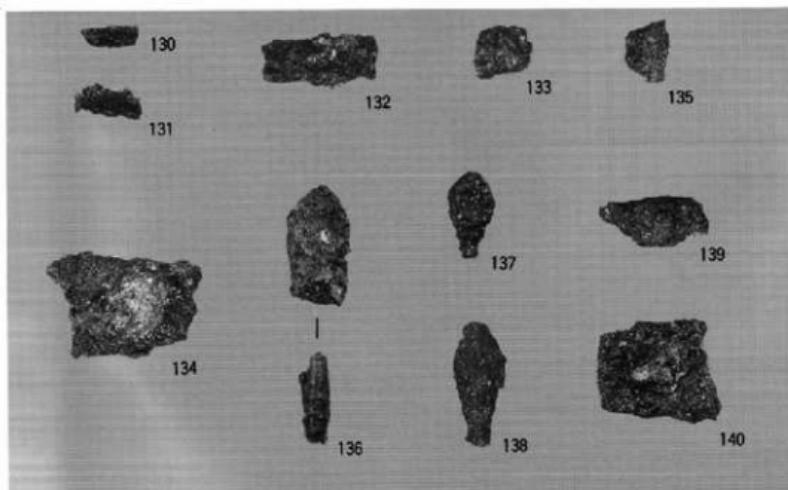
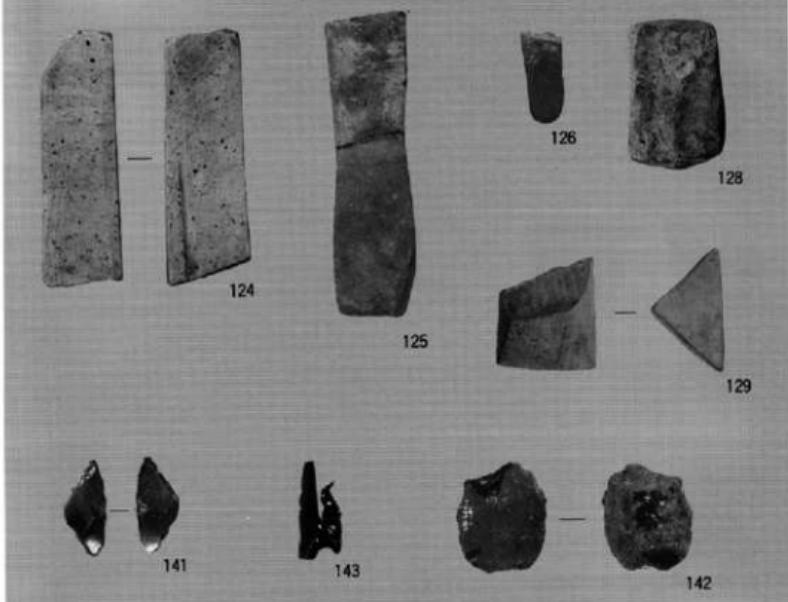
111

各遺構出土石器



各遺構出土遺物 4

各遺構出土石器



各遺構出土遺物 5

飯倉F遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第379号

1994年（平成6年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
1丁目8の1

印 刷 福博綜合印刷株式会社

